
言葉ではなく ルーフェイア・シリーズ09

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉ではなく ルーフエィア・シリーズ09

【Nコード】

N3086F

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

学院を飛び出した親友を追って、抗争のスラム街へ。心やさしい美少女が織り成す、異色の学園ファンタジー第9弾 かなり外向きの話で、8作と同じくバトル要素が多めです 反王道、「無情」という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 携帯版は1行毎の改行or空行です 現在、第11作を連載中

Episode : 01 知らせ

N a t t i e s s

授業がほとんど終わってあとは休みを残すばかりで……そんなある日だったの。

「ナティ、連絡が来たんだ」

「連絡？ 誰から？」

シーモアがこういう風に言うからには、あたりまえだけどあたしも知ってる人。

「ケインからさ。」

どうも旗色がよくないって、ガルシイに内緒で送ってきたよ」

「うそ……」

ガルシイもケインも3年前までいたスラムの仲間で、どっちも年上。とうぜんだけど遅いって言うか手馴れてるって言うか、ともかくちよつとやそつとじゃびくともしないのよね。

なのにサブのケインがわざわざ「旗色悪い」って言ってくるんだから、これ、そうとうじゃないのかなあ？

「やっぱり、ヤバいのかな？」

「ヤバくなきゃ、ケインがわざわざ連絡なんてしてくるもんか。」

ナティ、あんた出かけられるかい？」

「もちろん」

どこへなんて聞かない。訊かなくなつてわかるもん。

そっか。3年ぶりなんだ。

よく考えたらあたしたち、あそこを出てから一度も帰ってないの。そりゃ、手紙なんかでのやりとりは、ずっと続けてるんだけど。

みんなに会えるといいな……。

R u f e i r

「今年も、あとちょっとだね」

「だな。しっかしあつという間だったな」

あたしとイマド、珍しく2人でケンデイクの町へと来ていた。

実を言うと最初は、シーモアとナティエスとの3人で出かける予定で、前から約束してた。けど昨日、急に2人とも用事が出来て流れてしまった。

2人とも「ごめんね」と言いながら、たちまちどこかへ行ってしまったから、よほど急いでいたんだろう。

当然あたしはひとり ミルはとくにアヴァンだ で取り残されてしまって、見かねたイマドがいつしよに来てくれた。

「シーモアとナティエス、どうしたのかな？」

彼を見上げながら尋ねる。

最初に会った時から頭ひとつ以上身長差があつたけど、イマドのほう伸びるのが早くて、今じゃあたしは彼の胸までしかない。

「さあな。ただあの調子だと、ロステイオへ行つたんじゃないか？ あいつらけっこう、ダチがあつちにいるらしいからな」

「そうなんだ……」

わざわざ友達に会いに帰るなんて、うらやましかった。戦場で育つたあたしには、学院の外には友達がいらない。

「まあた深刻になりやがって。今ダチがいるんだからいいだろ」

「あ、うん。そうだね」

イマドに言われて思いなおす。

学校に行けて友達がいるんだから、これ以上望むほうが贅沢だ。

「そういえば……イマドは今年は、伯父さんのところ、帰らないの？」

いつもそうだけど、授業が残り少なくなるとイマドは、さっさとアヴァンの伯父さんのところへ帰ってしまう。

「そうしてもいいんだけどよ、今年は真ん中の姉貴に赤ン坊生まれたかな。」

帰ったら絶対こき使われるから、ギリギリにしようと思ってさ」「イマド、いろいろ上手だから」

どこで覚えたのかは知らないけれど、イマドは料理なんかが上手だった。あたしも時々教えてもらったり、食べさせてもらったりしてる。

Episode : 02

「そりゃ下手とは言わないけどよ、妙にアテにされるのも考えもんだぜ」

普通じゃあんまり聞けないようなばやきに、つい可笑しくなる。

「けど、そう言う割に手抜き……しないから」

「そゆのはプライドゆるさね」

結局凝り性なのが、災いしてるらしい。

「まあいいや。とりあえずヒマだから、なんか作ってやるよ。リクエストあるか？」

「ケーキ」

「イヤミか、それ？ 俺じゃシルファ先輩みたいにはいかなーぜ、それだけは」

「でも、イマドのも、おいしいから」

シルファ先輩も、いま学院にいなかった。タシユア先輩と一緒に、どこかへ行ってしまったらしい。

「んじゃそろそろで昼メシ食ってから、晩メシとケーキの材料だけ買ってくるか」

「うん」

けっきょく食事をしたあと、町の一角、食料品やなにかを売っている店がひしめいている、市場へ行く事にする。

「で、なんのケーキがいいんだよ？」

「そう言われても……」

とっさには思い浮かばない。

「白いの、この間シルファ先輩に、作ってもらったし……生オレン

ジとか、ダメ？」

「そりゃムリだな。時期じゃねえから。しゃあねえ、適当に作るぞ？」

「ありがと」

そんな話をしながら、駅前の広場を横切っていく。

結構な広さの円形の広場は、綺麗に石畳が敷かれていて、周囲には洒落たベンチが幾つも置いてあった。

小春日和のせいか、けっこうたくさんの人で賑わっている。

「こんど昼メシでも持ってきて、ここらで食うか？　あとは埠頭の方とか」

「あ、いいかも」

ちようど駅に列車が着いたところらしくて、たくさんの人たちが階段を降りてきていた。

そこへ突然、銃声が響く。

「行くぞ！」

「うん」

とっさに走り出した。

騒ぎの起きた駅から慌てて逃げてくる人々の中を、うまく逆走する。そして駅員さんには悪いけれど、そのまま改札を飛び越えて構内へと飛びこんだ。

あとで入場料、払った方がいいのかな？

そう思いながらもとりあえず、自分とイマドとに防御魔法だけはかける。

「あれか？　けどなんなんだよ?!」

イマドが言うのももっともだった。なにしろなにかの劇映みたい

に、構内で銃撃戦が展開されてるのだから。

ただ良く見ると、襲われてるうち応戦しているのはひとりだけで、3人ほどを相手にしている。

しかも襲っているのはあたしたちよりほんの少し年上、襲われている方にいたっては、あたしたちとさほど変わらないか、中にはもっと小さい子までいた。

再び銃声がして、応戦していた少年が倒れる。このままじゃもっと小さい子達までが、犠牲になりかねない。

Episode : 03

2人で一瞬だけ視線を交わして、左右に散る。
まず、一気にイマドが突っ込んだ。向こうが撃ってくる弾は魔法で弾き返せるから、まったく躊躇いが無い。

同時に襲っている3人の少年の手元でそれぞれ、威力こそ弱いものの電撃が炸裂する。こういう襲撃者なら大抵持っている魔力石を、イマドが暴発させたんだろう。

予想外の事態に驚いている少年の一人に、彼はあっという間に詰め寄った。

速い！

精霊の支援を受けてるならともかく、素のままとはとても思えないスピードだ。

そして次の瞬間には、剣の柄を敵のみぞおちに叩き込んでいた。
この間にあたしも一人を峰打ちで昏倒させる。

一瞬にして残るはあとひとり。

その残った襲撃者に、あたしの太刀とイマドの剣との切っ先が、左右から喉元へと突きつけられた。

「あ、うあ……」

さすがに少年（？）がパニックを起こす。

「武器を捨てろ」

イマドが鋭くそう言うと、彼は素直に従った。

「ルーフェイア！」

「分かってる」

すぐに、襲われて倒れている少年の方へと向かう。

傷を調べると肩に一発当たっているだけで、それも幸い貫通していた。

簡単な回復魔法をかけると、あっさりと出血が止まる。

「お兄ちゃん、大丈夫なの？」

「うん、大丈夫よ」

連れられて来たらしい子供たち 5、6歳の子供が3人ほど

に、そう答えて安心させる。

「待ってて。すぐ病院に」

「……ダメ、だ」

「え？」

思ってもみなかった言葉に驚いた。気を失っているとはかり思っていた、この怪我をした少年が、そうはつきりと口にしたのだ。

「どうしたんだよ？」

もたついてるあたしに、イマドが声をかける。

「イマド、それがね……病院、ダメだって……」

「なんだよ、それ？」

言いながら彼はこっちへ来て 襲撃者はもう柱に縛り付けてあった 少年の瞳を覗き込む。

「そういうことか。しゃあねえな、とりあえずこいつらまとめて、学院連れてくか。」

ルーフェイア、お前学院長に連絡してきてくれ。俺はこっち、適当にごまかしとく」

「あ、うん。分かった」

いまいち事態が飲み込めなかったけれど、とりあえず連絡しに行った。イマドは時々、こうやって誰も何も言わないのに、真相を知ってしまうことがある。

「お忙しいところ申し訳ありません。あの、6年Aクラスの、ルーフェイアIIグレイスです。えっと、学院長に……つないでもらえますか？」

Episode : 04

断られるんじゃないかと思ったけれど、意外にもすんなり繋いでもらえた。

通話石の向こうの声が変わる。

「どうしましたか？ あなたがわざわざ連絡してくるんですから、なにかあったんでしょうが」

「ええと、ケンデイク駅で銃撃戦に遭遇して、とりあえず鎮圧したんですけれど……どうも双方わけありらしくて、イマドが学院へ連れていった方がいって言うもんですから、それで……」

我ながら説明になってない。

もつともあたし自身学院へ連れて行く理由を聞いていないから、当然かもしれないけれど。

「その年で『銃撃戦を鎮圧』などとさらっと言えるのは、あまりいいでしょうねえ。

いいですよ、イマドがそう言ったのなら連れて来なさい。迎えをやりましょうか？」

驚いたことにあっさり許可が下りた。

「すみません。怪我人と小さい子がいるので、そうしていただけると助かります」

「分かりました。すぐに向かわせますから、そのまま待機してないさい」

「了解しました」

それだけ言って連絡を終える。

現場へ戻ると、もう襲撃者も怪我をした少年も移された後だった。ホームに残る血の跡を、駅員が洗い流している。

「あの、すみません。学院の者なんですけど、イマド　　じゃない、友達はどこに行ったんでしょう?」

尋ねると、その駅員が半歩ほど後ずさった。
なんだか妙に怯えられている。

「えっと、あの……?」

太刀が抜き身なの、まずかったかな?

「え、あ、いや、学院ね。その、友達なら控え室、だよ」
「ありがとうございます」

お礼を言つて、指差してくれた方へ向かった。確かに「控え室」の文字がある。

ドアを開けて中へ入ると、武装解除されて手を縛られた襲撃者と、それを見張るイマドとがいた。

撃たれた少年はソファに寝かされて、心配そうに子供たちが覗きこんでいる。

「学院長、なんだって?」

「迎えをよこすから、待機してるように」

そう言いながらイマドの隣へ行く。と、今度は子供たちが不安げに身じろぎした。

あ、いけない。

慌てて太刀を鞘に収める。

「けど、駅員さんたちに、なんて……言っただの?」

どう言い繕ったのかが不思議で、尋ねてみる。

「別に。『学院の任務に関係することだから』ったら、すぐ納得し

てくれたぜ」

「任務って……あたしたち、傭兵隊じゃないけど……」
「どうせそこまで考えやしねえよ」

これでいいんだろうか？

でも代わりに訂正なんて、あたしに出来そうじゃなくて、とりあえずそのままにしておくことにする。

合計7人を、港から学院の連絡船に乗せて戻ったのは、それからしばらくしてからだった。

Episode : 05

I m a d

診療所と学院長とに全員引き渡して、やっと一息ついたのは、もう夕暮れになってからだ。撃たれたガキが連れてきたチビどもには、ルーフェイアがついてる。

軽食6人前ほど作りながら、俺は迷ってた。

あいつらの持ってきた「ワケ」は、あんまいもんじゃない。けど、見過ごせる話でもねえのが困る。つか、もしルーフェイアのやつが聞いたら、速攻でここ飛び出しちまうだろう。

んでもって抗争のど真ん中に、飛び込んでしまうことになる。

じつ言うとしーモアとナティエスが、慌ててどっかへ出かけた時から、なんかおかしいとは思ってた。

けどまさか、これほどでかい抗争のために戻ったとは……。

あの2人つてのはロステイオの首都、ベルデナードのスラム出身だ。しかもそのスラムにいくつもある、暗殺集団　ギヤング団　なんかじゃない　の中でも、1、2を争うチームの所属だったって聞いている。

で、そこがナワバリだかをめぐって、別のところと全面衝突はじめたらしい。駅での銃撃戦はその延長戦だ。

前哨戦でかなり形勢がヤバくなったしーモアたちの仲間が、せめてチビどもだけでもしーモアたちの所へつてもりで逃がしたものの尾けられて、最後の最後で鉢合わせしたっぽかった。

パンを重ねながら、ぼうっと考える。

ルーフェイアのヤツは、間違いなく行くこうとするだろう。

なんとかして知られないようにすりゃ、いいんだろうけど……チビどもが来ちまった以上、それもムリだった。確実にバレる。

止めるか、行かせるか。

ムリだな。

あいつが行く気になったら、止めようなんてない。イザとなりや学院にシュマーの船呼んでも、出てっちまうはずだ。

しかもマズいことに、良くも悪くもルーフィアのヤツは、素直で疑うってこと知らない。そのうえ自分が、やたら人目引く美少女だっての、まるっきり自覚してねえ。

そんなのがひとりでスラムをウロウロするとか、考えるまでもなくヤバ過ぎだろう。肉食竜の前に、肉の塊置くようなもんだ。だったら行かせて、フォローするほうがまだマシだった。

ベルデナードまでは、かなり距離がある。

いちばん早いのは、ケンデイクから海超えて、大陸東南部の元ワサル国へ。そこから列車使って、隣のロデステイオに入るルートだろう。

船で丸1日、列車で4日の長旅だ。

通り抜けるワサルは、植民地化されたせいでいまもいろいろキナ臭いけど、町の治安はそれなりだ。ちゃんと列車も運行してるし、沿岸部の観光地は今も変わらず賑わってるっていう。

ロデステイオのほうも軍政敷いてっけど、国内はけっこう自由らしい。首都のベルデナードは、観光でも有名くらいだ。あと、あんま覚えてないし実感ねえけど、俺の生まれた国だったりする。

ただ首都のスラムとか言われても、俺は場所さえよく知らなかった。

まともに物事覚えてる年には、もうこの学院にいたから、俺がちゃんと知ってんのはケンデイクと、叔父さんがいるアヴァン方面だけだ。

ともかく行き当たりばったりで行って、迷ってるヒマはねえから、下調べしとかなないとヤバいだろう。

チビどもにでもきくか。

多分いちばん現実的な手段に、考えが落ち着く。どう聞き出すかって問題があるけど、まあどうにかなるだろう。

あとはただ早く、ここを出れるかだ。

その抗争とやらがいつかは知らねえけど、シーモアたちが速攻で出てってるから、そんなに余裕ねえんだろう。

行って、どうにか出来るとは思わなかった。

けどルーフェイアのヤツはぜったい引かねえだろうし、俺もあいつらにはけっこう借りがある。

だから、やれるだけのことはやってみるつもりだった。

Episode:06

Rufair

「おい、メシできたぞ」

そう言って入ってきたイマドに、真っ先に反応したのは、子供たちだった。

聞いたところでは3人とも、ベルデナードのスラムからここまで来たらしい。ただどうしてケンデイクへ来ることになったのかはまでは、どうしても話してくれなかった。

「うひゃあ、ご馳走だよ!」

3人のなかではいちばん年からしい少年が、目をまるくした。

「うわあ、いっぱいだ〜!!」

「すつごおい、これ全部食べていいの?!」

大騒ぎになる。

「……そこらへんのありあわせだって。まあいいや、しっかり食べよ?」

「うん!」

一斉に手が伸びる。

たちまち奪い合いが始まった。

「あ、だめよ、ケンカなんかしちゃ……ほら、たくさんあるんだもの」

急いで間に入る。

「けど、こいつ俺の盗ったんだぜ!」

「ちがうよ、これあたしのだもん!」

この子達、満足に食べていなかったんだろうか? 自分の分を確

保するのに必死だ。

こんなに小さいのに。

スラムは過酷だと聞いたことがあるけど、急に実感して悲しくなる。

あたしも戦場は辛かったけど、こういう思いはしたことがない。

「あれっ、お姉ちゃんどうしたの？」

「あゝ、泣かした〜!!」

「俺じゃないぞ！」

子供たちに騒がれて、自分がつい涙をこぼしていたことに気付く。

「あ、えっと、違うの。ケンカするほど……みんながお腹、空かせてたんだって思ってた……」

ゆっくり、食べてね？」

3人が静まり返った。

「どうしたの？」

「ごめんなさい。もうケンカしない」

子供たちが口々に謝る。

「そんな、いいのよ。あたしがすぐ泣いちゃうのが悪いんだもの。

ほら、ミルクもあるからね」

「うん、お姉ちゃんありがと！」

今度は3人とも、ケンカをせずにお行儀よく食べ始めた。その姿にほっとする。

「おい、これお前のな」

ぼうつと子供たちを眺めていたら、イマドがお皿を出してくれた。子供たちの分とは別に、いろいろ挟んだパンが乗せられてる。

「ありがと」

あたしはどうも生存競争に弱いから、わざわざわけておいてくれたんだろう。

それにしてもイマド、いったい何人分作ったんだろう？ 子供たちののはきつちり3人前以上あるし、自分の分も2人前くらい確保している。

子供5人で6人前？

すごいとしか言いようがない。

半分呆れながら、あたしも手をつけた。

「あ、おいしい」

思わずそう言葉が出る。

でも食べながら……どうしても気になることがあった。

Episode:07

「 イマド、聞いてもいい? 」

「 ん? なんだ? 」

一瞬ためらう。

けどやっぱり気になって、尋ねてみた。

「 あの子たち、なんで襲われたりしたの? 」

あの時学院に連れて行こうと言い出したのは、イマドだ。だとすれば、理由が分かってるはず。

「 ん 」

イマドが珍しく、口ごもった。

「 どうか、したの? 」

急に心配になる。

イマドがこんな風に言うのをためらうことは、ほとんど無い。言えないなら言えないで、そうはつきり言うのがいつもだ。

「 あたしが聞いたら、困ること? 」

それならなにも、無理に聞こうとは思わない。ただ雰囲気からみると、それともまた違うようだった。

「 ホント言うと言いたくねえんだけどよ、言わないわけにもいかないつつかさ…… 」

「 ? 」

この子達が来たことが、どうしてそんなに複雑な話になるんだろう?

「 まあいいや、あとでゆっくりな。どっちにしてもここじゃ、落ち着いて話も出来ねえし 」

「あ、そうだね」

確かにそばで子供たちが騒いでたら、混み入った話はしにくいだろう。

「ねえねえお姉ちゃん、おかわり〜!」

思ったそばからお呼びが掛かった。

「おかわりって……やだ、もう全部食べちゃったの?」

驚いたことに、あれだけあったホットサンドがもうなくなっている。

「イマド、どうしよう? まだあるの?」

「悪い、これ以上だとまたつくらねえと……」

「え〜!!」

抗議の声が上がった。

「んなこと言っただけじゃしょうがねえだろ。また作るから待ってるの」

「そうしたら、これ食べたら? あたし、後でいいから」

待たせるのも可哀相で、自分のお皿を差し出す。

「あ、こら、それじゃお前の分がなくなるだろ。ぜったい生存競争負けれると思って、わざと分けてやったのに」

「でも……」

こんな小さな子達に我慢をさせるなんて、可哀相だ。

「あ、じゃあいいよ。俺たち別に、すっごくお腹空いてるわけじゃないしさ。な?」

「うん、あとでいい」

「え?」

急に聞き分けのよくなった子供たちにびっくりする。

「無理しないで、いいのよ?」

慌ててそう言ったけれどみんな「待ってる」と言っ
て、それ以上はせがまなかった。

Episode : 08

「ごめんね、あなたたちにまで気を遣わせちゃって」

「いいっていいって。それより姉ちゃん、早く食べちゃいなよ。食べてないの、もう姉ちゃんだけだぜ？」

「えっ？……うそ……」

子供たちはまだともかく、気がつくといマドまでいつのまにか食べ終えている。

いったいいつの間に、食べたんだろう？

ともかくあたしだけ食べ終わっていないのもおかしいから、急いで手をつけた。

子供たちはまとめて、イマドが話し相手になっている。

「兄ちゃんさ、昼間すごかったよな」

「お姉ちゃんも強かったよね？」

「そりゃまあ、俺らいちおう学院生だからな」

けっこうイマド、嬉しそうだ。

でも確かに、学院生の強さは半端じゃない。あたしたちくらいの年でも 上級傭兵の候補生ともいえるAクラスは特に みつちり仕込まれている。

「そっか。俺も入りたいんだよな」

「ムリだよ」

あはは、と子供たちの笑い声が響いた。

「やっぱりさ、シーモアお姉ちゃんとか、ナティお姉ちゃんみたいに強くなっちゃ」

「シーモアとナティ……ナティエス?!」
唐突に飛び出した名前に驚く。

「あれっ、姉ちゃんシーモアの姉キとナティねえ、知ってるんだ？
もしかして、ダチとか？」

「あ、うん。そうだけど？」
なあんだと一斉に子供たちがうなずく。

「どうりでメチャメチャ強いワケだよな」
「うん！」

子供たちが納得する。
けどあたしはそれどころじゃなかった。

だから、イマドが言いたがらなかったんだ。

理由はともあれ、銃撃戦に巻き込まれるような子供たちだ。とう
ぜん何か裏が、それもとんでもないものがあるんだろう。

その子供たちがシーモアとナティエスを知っていて、なおかつ彼
女たちはスラムへと出かけて行った。

このことに、一瞬息苦しくなる。

正確なことは分からないけれど、ベルデナードのスラムには……
銃撃戦以上のものが待っているはずだ。

視線をやると、イマドが真剣な顔をしていた。その瞳が「半端な
話じゃない」と言っている。

「ねえ」

子供たちの方に向き直った。

「シーモアもナティエスも、大事な友達なの。何があったか……教
えてくれる？」

きっとあたし、
厳しい顔をしていたんだろう。
子供たちがごくり
とつばを飲んだ。

Episode : 09

「悪い、待たせた」

「うっん、あたしも……いま来たところ」

翌朝、船着場で待つてると、時間ピッタリにイマドが来た。

時間が早いから、まだ人は少ない。吐く息が白い中、任務らしい先輩が2人居るだけだ。

シーモアたち、大丈夫だろうか？

助けた子供たちの話から、シーモアたちが向かったのは、昔いたベルデナードのスラムで間違いないのが分かった。しかもよく聞いてみると、これから大規模な「祭り」つまりは抗争があるという。

とんでもない話だった。

あたしも実際に見たわけじゃないけど、シュマーには世界各地のスラムから、一族へ加わった人も多い。そんな彼らから伝え聞いた話だと、それこそ殺るか殺られるかだっていう。

それを承知で、シーモアたちはスラムへ向かったらしかった。だとすれば、早くしないと2度と会えないかもしれない。

気が気じゃなかった。

あたしが育った戦場では、人が死ぬのは当たり前のことだった。ついさっきまで一緒に話をしていたはずの人が、一瞬にして骸となる。そういう世界だった。

だから……いつも怖かった。今日は誰がいなくなるのかと。

やっとそう思わなくなったのは、学院へ来てからだ。

もちろん父さんや母さんには、その危険がいまもあるけれど、少

なくとも友達や先輩にはそういうことはない。

それなのに。

これ以上誰かがいなくなるのは、絶対に嫌だ。

「さっさと行こうぜ。乗り遅れるわけにやいかないからな」
「そうだね」

学院の方にはさすがに本当のことは言えなくて、あたしはアヴァンの親戚宅　実際にそこにあるのはシュマーの施設　へ、イマドはアヴァンの伯父さんの家へ行くと告げてあった。

少し気が咎めるけど、「ベルデナードのスラムへ行って、抗争に加わります」なんて言ったら、絶対に出かける許可はもらえない。もっとも一度学院の外へ出てしまえばあとはノーチェックだし、中には「私用」と言って強引に許可をもらう先輩　タシユア先輩　かも　もいるというから、ルーズといえばルーズだ。ともかく学院側には内緒にしたまま、どうにかあたしたちは外へ出る許可がもらえた。

ただこれは、ムアカ先生のおかげもかなりある。

いつどこでどう話を訊いて気付いたのか分からないけれど、先生にはあつという間に、あたしたちのしようとしていることを見抜かれてしまった。

なのに先生、そのまま黙って自分の名前で、許可を出してくれたのだ。

「あの2人を、無事連れて帰ってきなさい。いいわね」
不思議な表情でそう言った先生が何を考えていたのかは、あたしには分からなかった。

小気味いい動力音をさせている、連絡船に乗り込む。

「とりあえずケンディクまで行って、そこから船乗り換えてワサー
ルか。向こうは何時の船だ？」

「えっと……？」

あたしが考え込むと、イマドが呆れたような顔をした。

Episode:10

「とりあえずケンディクまで行って、そっから船乗り換えてワサールか。向こうは何時の船だ？」

「えっと……？」

あたしが考え込むと、イマドが呆れたような顔をした。

「お前、自分で切符取ったんじゃないのか？」

「そうだけど……ケンディクのロシュマーのみんなに、頼んだだけだから……」

ロシュマーというのは、シュマーの一族のうち、戦闘能力が一定水準に届かないグループだ。ただ人数は今は、こっちのほうが多い。能力の幅が広いから一概には言えないけど、だいたい後方支援を担当してる。

イマドがため息をついた。

「お前ときたら、連絡1本入れるだけで最新兵器まで、揃えられそ
うだな」

「うん」

「マジ？」

イマドは信じられないみたいだけど、あたしは嘘は言っていない。

やろつとは思わないけれど、あたしが連絡すればきつとあらゆる兵器が揃うはずだ。

けどこのくらいの機動性？がないと、シュマーの傭兵たちの要求には答えきれない。

なにしろシュマーは戦闘集団だから、国際情勢や各地の戦局に敏

感に反応する。そのうえ個人主義が行き届いていて、特別な命令がない限りは各人が勝手に突発的な動きをするのが普通だった。

実際ひたすら平穏なこのユリアス大陸はともかく、アヴァン大陸のそれなりに大きい町には必ず、ロシユマーのメンバーが数人から数十人駐在している。

「ロシユマーの連中に同情するぜ」

あたしの説明を聞いて、イマドがそんなことを言った。

「まあいいや。ともかくロデステイオまでは、押さえてあるんだよな？」

「うん」

話しながら連絡船に乗りこむ。

普段は見とれるほどの綺麗な景色も、今日は闇に沈んで判然としない。

スラムって、こんな感じなんだろうか？

ぼんやりとそう思った。

ベルデナードのスラム。シーモアとナティエスの育った場所。そしてあたしには……未知の場所だ。

学院へ来る以前はずいぶん戦場を渡り歩いたし、ベルデナードにも何度も行ったけれど、スラムにだけは足を踏み入れたことはない。どんな場所なのか見当もつかなかった。

でも一刻も早くたどり着いて、シーモアたちと無事に再会したい。そんなことを考えているうちに、連絡船が止まった。

「行くぞ」

「うん」

荷物を持って、別の埠頭へと急ぐ。

途中の約束の場所には、ちゃんと人影があつた。

「グレイス様、これがロデステイオまでの切符ですので」

駐在しているロシュマーの家族が出迎えてくれる。

「ありがとうございます。急に頼んだりして、ごめんなさい」

そついうと彼が笑つた。

「グレイス様はお優しいですね。

我々相手に気を遣つてくださなくてもいいのですよ」

「でも……」

いつもみんなよくしてくれるけれど、別にあたし自身が偉いわけじゃない。

Episode : 11

「さあ、もうそれはいいですから、船にお乗りください。」

ここまで来て乗り遅れてしまつては、話になりませんよ」

「え、あ、そうね……」

ひとりの男性 名前はドワルディ が先に立つて案内してくれた。

「こちらの部屋を、押さえたので」

「 個室の一等かよ。やっぱ半端じゃねえな」

イマドが驚いたような声を出す。

「え？ いつも……そうだけど？」

両親に連れられてあちこち渡り歩いていた頃から、船も列車もたいていは個室だった。

「金あるな」。

まあ……お前に不自由させたら、首が飛ぶんだろうけどよ」

「そんなひどいこと ！」

思わずそう言つと、ドワルディがまた笑った。

「それも確かにありますが、グレイス様のようにお優しいと、我々も一生懸命になりますよ。」

ところでロステイオの、どちらまでいらつしやるのですか？」

「ベルデナードのスラムなの。ただ、番地まではちよつと……」

だいたい子供たちから聞き出しているけれど、あの子たちも住所まではさすがに知らなかった。

「わかりました。ベルデナードの方にすぐ連絡して、詳しいものを待たせておくようにします。」

あと船内や車内での細かい事ですが……どうやらお友達がご存知のようです。

グレイス様をよろしくお願いします」

「あ、はい」

イマドが慌てて答えた。

ドウルディが一礼して出ていく。

「お前マジ、お嬢様なのな」

「そんなんじゃないわよ……」

だいたいこの世のどこに、戦場で太刀を振り回す深窓の令嬢がいるんだろう。

ため息をつきながら部屋のソファに腰掛けた。

イマドの方は、切符を見て時間を確かめている。

「ワサルに着くのが……やっぱ明日の2000か。けどベルデナード行きの最終に乗り継ぎできるから、ラッキーだな。

って、あの人がそんなヘマやるわけねえか」

なんかひとりで感心している。

「しっかしこれからしばらく、ひたすら乗るだけってか。ヒマだな」

「あ、あたし宿題、持ってきた」

「は？」

イマドが硬直した。

「んなもの……持ってきたのか？」

「うん。物理と数学と世界史、もう課題、出たし」

「いや、そりゃ確かに出たけどよ……普通持ってこねえぞ？」

「え？ そうなの？」

なんだか微妙に会話が食い違う。

「でも、せっかく課題、でたから……」

早くやらないと、出してくれた教官に悪い気がする。

けどどう見てもイマドは嫌がつていて、なんだかこっちにも悪いことをしてしまったみたいだった。

自分の気のまわらなさに、情けなくなる。

Episode:12

「ごめんね、あたし……」

「あ、こら、泣くな!」

うつむいたあたしが泣き出す前に、イマドが止めた。

「けど……」

「だから、いいんだって。」

どうせやらなきゃいけないんだ、ここで一緒にやっちゃおうぜ」
彼はいつも優しい。

「ごめん……」

「だ〜から、謝らなくていいって。」

ともかくまずは朝メシ食って、それからな。それでいいだろ?」

「あ、うん」

一方的に言い立てられて、思わずうなずいた。

だいいちイマドの言ってることは、別におかしくもない。

「よし、それで決まりな。んじゃさっさと食いにいくか」

「そうだね」

2人で部屋を出る。

食堂は2層ほど下で、取った部屋でだいたい座る場所が決まっていた。

どれにしよう?

メニューを見て、毎度のことながら考えこんでしまう。

書いてあることは読めるけど……どんな料理か分からなかった。

イマドのほうはすぐ決まったみたいで、もうウェイターを呼んで

頼んでいる。

「すみません、それをお願いします。」

あれ？ お前頼まないのか？」

「だって……」

そんなあたしをじつと見ていたイマドが、ふつと笑った。

「肉と魚、どっちがいいんだ？」

「え？ お魚、食べたいかな……？」

急に問いかけて、反射的に答える。

「そうか。そしたらすみません、これも追加してもらえますか？」

「かしこまりました」

気がつくといマドがあたしの分まで頼んでくれていた。

「ありがとう……」

「いいって。だいいちいつもだしな。」

にしてもこの程度かよ。んなの俺でも作れるつての」

まだメニューを眺めながらの彼の言葉に、思わず絶句する。

そりゃイマド、料理上手だけど。

でもいくら船内の食堂とはいえ、ちゃんとしたシェフが作っているはずだ。

なのにそれを「この程度」だなんて……。

「ねえ、イマドって……どうやって料理とか、覚えたの？」

いったいどこで覚えたのか、不思議になって尋ねる。

「ん？ まあいちおう、最初はお袋からな。」

あとは適当にそこらへんでか？」

「ふうん……」

きつとよっぽど家事が上手なお母さんだったんだろう。

あれ？

いちど納得してから、また不思議に思った。

「ねえ、イマドのお母さんって、だいぶ前に亡くなったって……？」

「ああ。3つの時な」

「……？ それでどうして……？」

たった3つくらいで、こんなに覚えられるものなんだろうか？
なんだかよく分からない。

Episode : 13

「ま、ワケはそのうちな。それよりメシ、来たみたいだぜ」
言われて辺りを見回す。

「どこ……？」

ずっと向こうの違うテーブルに、ウェイターがいるだけだ。

「あ、悪い。でももう来るって」

「？」

不思議に思う反面、たぶんそうなんだろう、とも思った。

イマドは時々、こういうことをする。見えない位置にいたはずなのに知ってたり、次に起こる事が分かっているように動くのだ。

そのせいでイマドが相手に模擬試合をすると、先読みされるしフエイントも見破られるしで、いつも大変だ。

正直言って、身体に刷り込まれた条件反射とスピードがなかったら、負けてると思う。

そんなことを考えてるうちに、イマドの言うとおり、すぐお皿が運ばれてきた。

早速彼が食べ始める。

「……何の香草だ？ 他にも変わったスパイス入れてんな」
食べながら、何を入れたか考えてるらしかった。

あたしも手を止めて、自分のお皿を見してみる。

これ、なんだろう？

魚なのは間違いないけど、分かるのはそれだけだ。
もっとも食べられるんだから、あとはなんでもいい気がする。

「　なんか初めて見る野菜だな？」

イマドは今度は、サラダをつつきながらぶつぶつ言っている。けど、あんな風に食べてて美味しいんだろうか……？

「なんだ？　どうかしたか？」

「え？　あ、なんでもない……」

ぼうつとしていたら、さすがに変に思われたみたいだった。

「どうでもいいけど早く食ったらどうだ？　冷めちまうぜ」

「　うん」

見ればイマドのほうはもう半分くらい片付いていた。あたしの倍以上頼んで、もうこれだけ食べてるんだから、かなりお腹が空いていたんだろう。

と、今度は彼が手を止めた。

「　どうしたの？」

「いや、ちよつと引つかかってさ」

「喉に？　でもお肉に骨つて……あつた？」

「　ちがうつて」

どうも「引つかかった」違いだったらしい。

ただイマドはそれ以上何も言わなかった。視線だけはあたしのほうを向いているけど、見ているものはまったく別のようだ。

「　ねえ？」

「　つたく、あのヤロ」

いったい何のことか、さっぱり分らない。

「ごめん、なにがどうなっちゃってるの？」

「ちよつと後でな」

そう言ってイマドが立ち上がった。

一瞬戸惑ったけれど、すぐにあたしも理由を悟る。

向こうのほうから怒声が聞こえていた。言葉から察するに、どうも密航した子供がいたらしい。

騒ぎがこつちへ近づいてくる。

食堂のドアを勢い良く開けて、追われている子供が駆けてきた。

あの子は！

間違いない。

あの子は昨日ケンディクで……。

Episode : 14

I m a d

ほどほどか？

そんなことを思いながら俺は、頼んだものを口に運んでいた。自分でも作れる程度のもんばっかだけど、時々変わった味付けしてる。

ちなみに向かいに座るルーフィアのヤツは、自分が何を食べてるかさえ、ほとんど分かってないっぽかった。

ってか、それ以前にメニュー見ても自分で頼めねえほど、こいつは食べ物に疎い。

ある意味立派といえは立派か？

こいつだったら間違いないく、毎食携行食でも飽きずに、「おいしい」って言いそうだな。

ただ今はなにを考えてんのか、メシが進んでなかった。

「どうでもいいけど早く食ったらどうだ？ 冷めちまうぜ」

「うん」

促すとやっと、慌てて食べ始める。

華奢な手。細い身体つき。しかもいくらも食わなくて、これよく持つと感心する。

けど、今度は俺が手を止める羽目になった。

「どうしたの？」

「いや、ちょっと引つかかって……」

「喉に？ でもお肉に骨ってあった？」

「ちがうって」

魚のホネじゃあるまいし……。
だいいちどうやったら、肉の骨が喉にひっかかんだか。
ただ、そう突っ込む余裕はなかった。

「つたく、あのヤロ」

昼だけじゃ飽き足らなくて、また騒ぎ起こしてやる。
まだ普通じゃ聞こえねえだろうけど、俺は船内の騒ぎを聞きつけた。

しかも幸か不幸か、こっちへ向かってる。

「ごめん、なにがどうなっちゃってるの？」

「ちよつと後でな」

言いながら立ち上がった。

騒ぎが近づいてくる。

さすがに今度はルーフィアのやつも、何が起こったのか分かったらしい。はっとした表情を見せた。

ガキが食堂のドア開けて、ひとり突っ込んでくる。

つたく、食ってるところで走るなつての。

俺の脇を通りぬけるタイミングを狙って足を出した。
それに見事に引っかかって、ガキが前につんのめる。

「なつ、何すんだよ……あ！」

「つたく、お前こそ何やってんだ。みんな心配するぞ」

走ってきたのは、昨日ケンディク駅で助けた(?)ガキのひとりだ。

「協力してもらって済まないね。さあキミ、切符を出してもらおうか」

こいつを追っかけてた船員が来て、険悪な表情でガキに迫る。

「イマド……」

「ちよい黙ってるな」

心配そうなルーフェイアをとりあえず黙らせると、俺は船員に向き直った。

Episode:15

「その、すみません。こいつ俺たち追っかけて、勝手に乗っちゃったみたいで」

「あん？」

それじゃ……キミの知り合いか？ あ、それとも弟か？」

勝手に誤解してやんの。

けど確かにこいつと俺、髪の色が割と似てる。

「俺らに置いてかれたのがやで、来ちゃったんだと思うんです。

お騒がせしました」

とりあえず謝ってみた。

誤解の方は、面倒だから解かない。

「なるほど。まあ気持ちはわからんでもないが……切符を持たないで乗るのはよくないな」

「すみません。

ただ思っんですけど、こいつ切符要るんですかね？」

幸いこのガキ、年より小さい。黙ってりやせいぜい、5つくらいにしか見えねえはずだ。

「ふむ、確かに……」

船員が言われて考えこんだ。

「そつだな。ひとりで乗ってたならともかく、連れがいるなら切符は要らんか」

っておい、いい大人がんな簡単に言いくるめられんなよ……。内心かなり呆れたけど、ともかく顔には出さないようにする。

「あとはちゃんと、俺たちで面倒みますから」

「そうしなさい。ところでキミたち、もしかして学院の生徒なのかい？ それに子供だけで、どこまで行くんだね？」

めんどくさい質問するなって。

けど答えないと、もっと面倒だろう。

「確かに俺たち、学院の生徒です。あ、このチビは違いますけど。で、ベルデナードーまで、ちょっと人に会いに……」

嘘は言ってない。

ただ無賃乗船の件が片付いて甘くなってきた船員、今度も勝手な解釈をした。

「そうか、あそこは孤児ばかりだと聞いていたが、君たちみたいに会いに行ける人がいる子もいるんだな。

ベルデナードーまではずいぶんかかるが、辛抱しなさい。それと何かあったら私に言うといい。ワサルまで、できる限りのことはするよ」

これでいいんだろか。

ガキだって時には爆弾抱えて突っ込んだりするんだし、もちっと他人を疑うってこと、覚えたほうがいいような。

ただ、面と向かってそうは言えない。

「すみません、ありがとうございます。」

俺たちも大人なしでベルデナードーまで行くのは初めてなんで、そうしてもらえると助かります」

神妙な顔して、嘘ストレスを言ってみる。

もっとも相手が、どう取るかは知らねえけど。

「そうかそうか。それにしても遠くまで大したもんだ。

ほら、立ってないで早く食べてしまいなさい。あとこの子にも、

ちゃんと食べさせてやるようにな
「はい」

結局船員は誤解しまくったまま、引き上げていった。
どうにか静かになったところで、食べるのを再開する。

Episode : 16

「兄ちゃん、ありがとう」

「ん？ 気にすんなって。だいいち途中で放り出されたらお前、どうにもならねえだろ。」

それよりとりあえず食べよ。何か頼んでさ」

さすがに神妙な顔で礼を言ってきたガキに、そう返す。

「オイラさ……」

「ねえ、どれにする？」

こいつが何か言いかけたけど、タイミングよくルーフェイアがメニューを出した。

「なんだこれ。これ見るとなんかあるのか？」

「え？ 何ってその、メニューだけど……」

「メニュー？」

会話が成り立ってない。

「えつとね、ここにその、いろいろ料理が書いてあって……ここから選んで、頼むの」

ルーフェイアにしちゃ珍しく、的を射た説明だ。ただ、その先は予想以上だった。

「そのさ、オイラ字読めねえから、姉ちゃん読んでくれよ」

「え？ あ、ごめんね！ ええと……」

ルーフェイアのやつがメニューを読み上げ始める。

「姉ちゃん、それってどんな食いモン？」

「え……？」

って、最悪の組み合わせか？

ルーフェイアの方が知ってりやまだともかく、双方で分かんねえからまさにお手上げた。このまま放っておいたら1日経ってもまだ、料理にありつけねえだろう。

「おい、適当に頼むぞ」

「あ、うん。兄ちゃんにまかせる」

さすがに見かねて、また俺が適当に頼む。

「イマド、ごめんね……」

「だから謝るなつて。別にお前が悪いわけじゃねえだろ。」

ほら、さつさと食っちまえよ」

面倒を見る人数が増えて、妙に忙しい。

「ほら、お前もそこに突っ立ってんじゃねー。つて、手汚ねえな。洗ってこいよ」

「え？　なんで手洗うのさ」
常識通じてねえし。

けど幸い、バタついたのはそこまでだった。手洗わせて座らせて、メシが運ばれてきたあとは、2人とも大人しく食べ終える。

「でさ、兄ちゃん、オイラ……」

「ストップ。部屋戻ってからな」

言つて俺は立ち上がった。

ただでさえさっきの騒ぎで注目浴びてるのに、んなヤバい話がこので出来る訳がない。

食べ終わった2人もついてくる。

にしてもこいつ、どうするかな。

もっともワサルまでは降ろすワケにいかねえから、問題はその後だ。

けどこの調子じゃ、ほっとくと何しでかすかわかんねえし……。
けっきょく最後まで連れてくしかないだろうと思いつつ、俺は部
屋へと向かった。

Episode:17

部屋の鍵を開けて、ガキを中へ入れる。

「すげえ部屋……」

育ったところがアレだから、こんなの見んの始めてなんだろう。つか、俺だつて見たことなかったし。

「けどイマド、どうしよう……?」

心配そうに言うルーフェイアに、俺は答えた。

「連れてこうぜ」

「え、でも、危ないんじゃない……」

ベルデナードに何が待ってるのか、さすがに分かってんだろう。心配性のコイツが、思ったとおりのことを言う。

「同じだつて」

答えると、不思議そうな表情になった。だから説明する。

「学院抜け出して来やがったんだ、返したところでまた逃げ出すのがオチだろ。」

「だつたら俺らで見張つてたほうがいいって」

「……そっか」

今回は俺らが居たからよかったけど、次はそうは行かない。うつかり無賃を咎められたら、大騒ぎだ。

それにこのガキは忘れてんのかもしんねえけど、昨日は襲われてたくらいだ。学院の外じゃどうやっても、安全とは言えなかった。

「オイラ、そんなチビ竜みたいに、ちょこまかしてないよ」

「十分してるつての」

なんか気に触ったのか、口を尖らせたコイツに言い返す。だいたいの勝手に抜け出しておいて、ずいぶん言い草だ。

「ともかく俺らと一緒にいろつて。ひとりでウロついてるとロクなことねえぞ」

「冗談じゃないって！ オイラ帰るんだ」

「だから、帰りゃいいだろ」

言ってから、気がつく。微妙に話が噛み合っていない。他の2人も気づいたらしくて、思わずみんなで沈黙する。

「あー、だからさ、俺らが行くのはお前がいたスラムなんだよ。だから一緒に来いっての」

「え、そうだったんだ！」

やっと話が繋がった。

けどこのガキが、急に警戒した表情になる。

「どうした？」

「なんで、そこ行くのさ」

俺らを「よそ者」として、疑ってる瞳をしゃがる。

まあ、しゃあねえか。

もともと俺ら、全くスラムには関係ねえし。

同じ事感じたんだろ、ルーフェイアのヤツが視線を落とした。

その瞳に、涙が浮かぶ。

「……いきなり泣かせてどーすんだよ」

「え、あ、その、えっと、オイラそいいうつもりじゃ……姉ちゃん、ごめんよ、ごめんったらー！」

生意気なこのガキも、これには驚いたんだろ、慌ててなだめた。てか、年下に慰められるって、なんか微妙に間違ってる。

「うっん、いいの。だってあたしたち……ほんとには関係ないから……」

部外者が乗り込むってことの意味を、意外にもルーフエイアのヤツ、分かってるらしい。それを指摘されたのと、でも行きたいのとで、板ばさみで泣いたっぽかった。

つかコイツ、言い返す代わりに泣くし。

「けど、けど……シーモアもナティエスも、友達だから……」

「姉ちゃん、オイラが悪かった。ごめん、謝る」

あっさり、ガキが謝った。もちつと生意気だと思ってたから、これには俺も驚く。

ルーフエイアのヤツも驚いたらしくて、泣くのを忘れてガキを見た。

Episode : 18

「その……んな理由でさ、それもスラムの外で育ったヤツが来てくれるなんて、オイラ考えたこともなかったんだ。

姉ちゃんたち、すっげえいい人なんだね」

「そんなことないわ」

間髪いれずにルーフェイアのヤツが否定したけど、説得力はゼロだ。俺はともかく、コイツの人の好さは並外れてる。

「ま、そゆやつもいるってことさ」

俺の言葉に、何度もガキが頷いた。

それから、いちばん肝心な事を思い出す。

「そついやお前、名前なんてんだ？」

「え？ あ、そか、言ってなかったっけ。オイラ、ウィンってんだ」
胸を張って答えたガキに、ルーフェイアのヤツが返す。

「いい、名前だね」

「え、それほど……」

耳まで赤くなってるあたり、ルーフェイアの美少女ぶりにアテられたんだろ。けっこうマセたガキだ。

「とりあえずお前、シャワーでも浴びてこいよ。その頭だと、ずっと身体洗ってねーだろ」

「え……」

ガキがあとずさった。

「オイラ、そういうのはさ、えーと別に、死なないからいいじゃん」

「入ってこい。じゃないと、甲板から海に捨てっぞ」

髪に虫でもつけてそんなヤツと、同室はさすがに願い下げだ。

「ウィンくん……入ったほうが、いいよ。」

んと、そしたらあたしが、洗って……あげようか？」

「いいっ！ オイラひとりで入るっ！」

ルーフェイアの「親切」に、ガキが身を翻してシャワー室へ駆け込んだ。さすがに素っ裸を女子に見せるのは、ヤなんだろう。

「他人が洗ったほうが、きれいになるのに……」

さすがにここまでくると、ガキが可哀想になる。

「やらせとけよ。つかさ、学院のガキならあの年なら、だいたいの事はひとりでやるぜ？」

「あ、そっか」

やっと納得したらしい。

俺はソファに腰掛けた。

「ともかく一段落だな。ったく朝っぱらから、大騒ぎだったぜ」

「そうだね」

コイツの相手しながら、さてどうしたもんかと考える。

ただあのウィンってガキ、やり方によっちゃ役に立つかもしれない。なんせ出身がスラムだ。これ以上の案内役はいねえだろう。

と、ここに襲った連中の仲間が居ないかって訊かれた気がして、俺は答えた。

「あ、それはねえと思うぜ。俺らがとっ捕まえた連中で、全部だったからな」

「え？」

ルーフェイアのヤツの、驚いた顔。

やべえ。

久しぶりに、血の気が引いた。

一部の家系には時々、念話が出るヤツが出る。で、詳しい事は分かんねえけど、俺のお袋がこの家系だったらしい。

それを継いじまったのか、俺も同じことが出来た。

っても、相手もそういうヤツじゃなきゃ話できねえし、ふだんも稀に、相手の考えてる事が聞こえるくらいだ。

ただ、この手の能力はものすごく嫌われる。

だからいつも、かなり気を付けてたワケだけど……ボケつとしてたせいでルーフェイアが「言ったこと」じゃなくて、「考えてる事」を聞いちまったっぽかった。

Episode:19

「いやその、なんとなくそう思ったただけだよ……」

「うそ」

珍しく、こいつが間髪入れず言い切る。

「読んだ……よね？」

ごまかそうかと思ったけど、こいつの瞳を見てムリだと悟った。
何が起こったかコイツ、ちゃんと分かってる。

なんか言おうと思ったけど、言葉が出て来なかった。

と、ルーフエアのヤツと瞳が合う。

どっか怯えた、泣き出しそうな表情。

そりゃそうだよな。

こんな薄気味悪いこと、受け入れられるほうがおかしい。

「その、イマド、ごめん……」

「ってだからなんでそこで、お前が謝って泣くんだよ」

いつもの事とはいえ、こういう状況でってのは予想外だ。

「ごめんなさい……」

聞こえてねえし。

「いやだから、別にお前悪くねえだろ」

「だって、あたし……イマドが、言われたくないこと……」

「はい？」

意味不明にもホドがある。

けど、表情見て気づいた。怯えてる理由は俺に読まれたことじゃなくて、「嫌われたかもしれない」ってほうだ。

なんでそうなるかなかなり謎だけど、俺が黙った事を、自分が悪かったと思い込んだらしい。

「言われたくねえってか、要するに俺の不注意だし。」

てかおまえ、なんですぐ分かった？ 普通じゃこれ、ヘンだとは思っても、何が起こったかはわかんねえぞ」

これも不思議だった。

じつ言えば、今みたいなうっかりは、何度かやったことある。ただ考えを読まれてるとか、たいていは考えつかねえから、テキストな言い訳で話はいつも終わってた。

「まさかおまえ、出来るとか言わねえよな？」

さすがにないだろうと思いつつ、言うだけ言ってみる。

ただルーフェアのヤツ、すぐ気がついただけあって、答えがもつと度外れてた。

「うっん、あたしは出来ないけど、母さんも姉さんもそうだから……」

「はい？」

さすがに聞き返すと、ルーフェアのヤツがたどたどしく、説明始める。

「えっと、だからその、うちって……アレでしょ。そのせいか、一族のかなりが、そういう人で……」

「……お前の家が並みじゃねえの、忘れてたぜ」

考えてみりゃ、あのシュマーだ。そんなもんが人並みなほうがかしい。俺のお袋の家系以上に、変わった連中が居てもいいくらいだ。

「要するにお前にしてみりゃ、当たり前ってことか」

「うん」

なんか力が抜けた。

氣い遣ってた自分が、妙に情けなくなる。

「ねえ……やっぱイマドも、母さんみたいに分かるの？」

「お前のお袋よく知らねえから、なんとも言えねえけど。」

けどなあ」

なんとなく頭を掻きながら、続ける。

「最初からそうと分かってりゃ、こんなに気なんか使わなかったぜ」

「ご、ごめん……」

「そこで泣くなって」

また泣き出したコイツに苦笑する。ホントに甘ったれで泣き虫だ。

「ま、俺の場合そゆこと。」

なるたけ使わないようには氣をつけてんだけどよ、隣の席の話が聞こえるのと一緒に……けっこ聞こえちまう時あってさ。

悪いいな。もしやな時は、はつきり言ってくれていいぜ」

肩の荷が下りた氣分で言う。やっぱ隠さないで済むってのは、楽だ。

ただ、返ってきた答えは予想外だった。

「あのね、いいよ。平氣」

「何がだ？」

一瞬だけ戸惑ったけど、すぐ理解する。

こいつは最初から、考えてる事を隠す気なんて、なかったんだろ
う。

「サンキュな」

「ううん。」

だって知られて困ること　ないもの」

何の気負いもなく微笑むこいつの頭を、俺はつい撫でた。

Episode : 20 古巣

N a t t i e s s

学院出てから7日目の朝イチ、あたしたちやつと古巣へ辿り着いたの。

けど久しぶりに来たスラム、変わってなかった。

お金ないから高速艇とか特急使えなくて、時間かかったけど、これだけでも来た甲斐あったかな？

あいかわらずきつたないなあ。

でもその薄汚れた街並み、キライじゃないの。

あの頃……悪ガキしてたあたしのこと受け入れてくれたの、ここだけだもん。

「なに考えてんのさ」

「ん？ 昔のこと」

訊いてきたシーモアにあたし、ちゃんとそう答えた。

だって別に、隠すようなことじゃないから。

なにしろシーモア、あたしのこと全部知ってる。

「なんだおめえら、しばらく見なかったなあ。お、シーモア、デカくなつたじゃねえか」

耳に馴染む、独特のスラング。

あたしってばそんなにここに長くないなかったから上手く使いこなせないけど、聞くほうは慣れてるのよね。

「おっさん、触るんじゃないよ。金取るぞ」

「ちっ、手厳しいなあ」

絡んできた知り合い って言っているのかな？

の酔っ払い

オヤジを、シーモアったら軽くかわすし。
ほかにも声をかけてくる人、何人かいたり。

スラムっていわゆる都会と違って、けっこう人の結びつきは強い
の。

みんな大変だけど、助け合ってやってる。
ワルさするのは多いけど、それは黙認。

だってこの街、正規軍の兵士やら警察なんかがウサ晴らしに、来
ては酷いことしてくんだもん。

もしなにかシテイで犯罪があつたら、必ずこの誰かが犯人に仕
立て上げられちゃうし。

そのうえこの住人だってわかるうもんなら、繁華街の店とかど
こも、売るの嫌がつたりするのよね。

けど、どこが違うのかな？

あたし別にこの生まれじゃないし、ここから他の町へ行つて成
功して、シテイで下にもおかない扱い受けてる人もいるし。

ホント、世の中ってどうかしてるよね。腹たつな。

大人っていったいどこ見てんだか、あたしにはちっともわかん
ない。

と、すれ違い様に誰かがぶつかってきた。

「つと、アンタらどこ見てんのさ！ こっちの上等な服が」

「あたしに向かってカモるなんざ、いい度胸じゃん、ミハーナ」
「え？」

「シーモア?!」

このスラムにはよくいるこの手合いだけど、彼女はシーモアの知

り合いだつたみたい。
ただ、あたしは知らなかった。

Episode : 21

「シーモア、誰？」

「あ、ナティは知らないっけね。」

パンテラって言うグループのミハーナ。ほら、目潰しのミハーナさ」

「ああ」

パンテラっていうのは、この街にたくさんある不良少女グループの中でも、最強チームの名前。で、シーモアったら今のグループに引き抜かれる前は、そこにいたって聞いたことあった。

その中でも目潰しのミハーナは、リーダーのティニと並んで、ここじゃ相当名が知られてる。

「ウワサじゃさ、太の男を5人もノしたっていうけど、あれホント？」

「あはは、ノしたってほどじゃないよ。あいつら分け前よこさない上にさ、ナイフなんか出しやがって。」

ハラたったからティニと2人して片っ端から役立たずにして、ついでに目潰してやったんだ」

「ふうん、ほんとだったんだ……」

シーモアから話は聞いてたけど、当人から聞くのって、やっぱり違うかも。

「それにしてもあんた、どのモンさ。あんま見かけないね」

仕方ないって分かってるけど、こう言われちゃうと、ちょっと寂しいかも。あだし、ここの言葉ヘタだから、丸分かりだし。

「言っの遅れたね。」

コイツはナティエスって、あたしのダチさ。ガルシィンとこで、前にいっしょに世話になってた」

「へえ……そりゃ驚いた」

ミハーナが、ちよつと見下した顔になって。

「いつからガルシィンとこは、お嬢さんを飾るようになったんだい？」

ちなみにあたしたちのグループは、名なしなの。というか、もう「ガルシィのとこ」って言えば通じちゃうほど有名。

もひとつ言うとおあたしたちのとこは、普通？の不良とは一味違って、強盗なんて絶対やらない。

普段はたいてい誰かの依頼　店主どうしの嫌がらせ試合みたいなものもあるけど　で、ボディーガードまがいをしてるの。後はあたしたちより上になる大人のグループに頼まれて、兵隊やったり。

手っ取り早く言えば、お金で力売るってとこなのかな？　どっちにしてもこの辺は、学院の傭兵隊と大差はないのかも。

レベルはかなり違うけど。

あたしとシーモアが学院にいる理由も、その辺にあったりするし。

シーモアが続ける。

「まあ、そう思うのは分かるけどね。

けどナティ、腕はいいよ。確かに引つ張り込んだのはあたしだけど、ガルシィンとこはそんだけじゃ、居られないの知ってるだろ」

「そりゃそうだけど……あっ！」

あたしが手にしてる財布見て、ミハーナ、さすがに声あげたの。

「あたいの財布、いつのまに！」

「んーと、今話してる間？」

隙だらけだったし。

でも彼女は、そういうつもりじゃなかったみたい。

「こんなみごとに拘られたのは、初めてだよ。」

「アンタただのお嬢さんかと思ったら、見かけによらないじゃん」

「えへへ」

「ちょっと嬉しかったり。」

「それにしてもシーモア、アンタが学院入学したってホントなのかい？」

「確かにしばらく姿、見なかったけどさ」

「ああ、ホントさ」

「ミハーナの言葉にあっさりシーモアが答えて。」

「いいね、なんだかあつちじゃ、きつちりメシまで面倒見てくれるって？」

「うーん、いって言うのかなあ？」

「訊かれてちよつと、答えに困っちゃった。」

「確かに学院ってご飯も服もお小遣いもくれるけど、スラムにいたときみたいな『わくわく』はないんだもん。」

「あれ、そんなもんかい？」

「ま、どつちでもいいや。あとでヒマ見て、うちのリーダーにも挨拶してきなよ」

「ああ、そうするよ」

「あ、その時あたしも行つていい？」

「シーモアが昔いたってグループ、興味あるもん。」

「そしたらあたいから、ティニにそう言つとくよ。んじゃね」

「言いざまミハーナったら駆け出して。きつとあれ、その辺の繁華街で誰か力モるんだろうな。」

「やれやれ、いつもながら忙しいやつだよ。さて、さっさと行こうか？」

「そだね」

まだ確かに朝だけど、アジトつくまでにお昼になったら笑い物。だからあたしたち、急ぎ足で歩き出したの。

Episode : 22

R u f e i r

まだ朝のうちに、列車は終点の駅　ベルデナードに到着した。

「やつと着いたな」

「うん」

ケンデイクを出てから、もう6日目になる。

構内をぬけて自走階段を登っていくと、整然とした街並みが見えてきた。

ベルデナード　既知世界最大の都市。

ただ、都市自体の歴史はさほど長くはなかった。そもそもロデステイオという国自体が、出来てからせいぜい150年だ。

この大陸は古くから、神聖アヴァン帝国が巨大な版図を誇っていた。だが千年王国とまで称された帝国も、200年ほど前にはすっかり衰えて、地方の領主が次々と独立を宣言した。

ロデステイオも、その中のひとつだ。そして独立後、この地にあった小さな街へ遷都、ベルデナードと名前を変えて大規模な開発が行われて今の形になった。

その後は貿易と農業で、この国は生き延びてきた。

大戦までは。

もともと王政だったロデステイオは、30年ほど前に軍を中心とした革命が起こり、軍制が敷かれた。

当初は激しい内戦になると予想されていたけれど、意外にも政府軍は巧妙で、またたく間に国内を制圧してしまった。

けど、問題はそのあとだ。

優秀な將軍を擁した政府軍は、そのまま肥沃な土地を擁する隣国マハイスへ侵攻。あつという間に併合したのだ。しかも勢いは止まらず、次々と隣国を支配下に収めてしまった。

当然だけどこれは他国の反感を買って、ロデステイオ打倒の機運が高まり、戦争が始まった。

でも戦局はいろいろあったものの、総じて一進一退だったらしい。連合国側が内部で足を引っ張り合って、足並みが揃わなかったことも大きかった。

加えてロデステイオが、さらに西方の大国エバスと同盟を組んだため、文字通り大国を二分する大戦に発展。出口の見えない状態になってしまった。

けっきょくこれといった成果がないまま、財政的な面で行き詰まって、ロデステイオ・エバス同盟と連合軍は、停戦条約を結んだ。そして今もこの国は、軍が実権を握ったままだ。まっすぐ向こうに有名な、凱旋の塔が見える。

征服の証し。

どれだけの血の上に、あれは建てられたんだろう？

そう思うと整然とした街並みが、ひどく空虚なものに見えた。

「おい、ルーフェイア」

「なに？」

イマドが声をかけてくる。

「いや、ケンディクで切符くれたあの人……迎えがどうか言っ
てなかったか？」

「え？ あっ！」

言われてやつと、ドウルディに言われたことを思い出した。そういえば彼、『スラムに詳しいものを待たせておく』と言っていたはずだ。

「けどよ、それらしいやつ見あたらねえぜ？」

「えっと……」

ざっと周囲を見まわしてみたけれど、あたしたち以外立ち止まってる人は見あたらない。

だいいち家の者は全員、あたしの顔だけは知っている。万が一あたしの方がわからなくても、必ず声をかけてくれるはずだ。

なのに、誰も見当たらないということは……。

Episode : 23

「いないみたい」

「いないって……珍しい話があったもんだな」

彼が驚く。

でも確かに珍しい話だった。なにか途中で手違いがあったのだからけれど、こういうことは初めてだ。

「どうしよう。待ってたほうがいいのかな……？」

「んな時間ねえぜ？」

「そうだね……」

イマドの言うとおりだった。

最初からシーモアたちには、1日以上出遅れている。ここでまた時間を取られたら、もしかしたら間に合わないかもしれない。

「ねえちゃんたち、なに困ってんだよ。オイラちゃんと案内できるぜ」

後ろで得意げにウインがはしゃいだ。

「さすがにシティゼンぶはムリだけどさ、スラムだったら庭だもん」
「そりゃそうだろうな」

少年の言葉にイマドが笑った。

「よし、案内してくれ。ルーフェイア、行くぞ」

「あ、ちよつと待って」

あたしは急いで近くの端末に駆け寄って、表示されていた掲示板に伝言を書きこんだ。

もし迎えと入れ違いになったら、家が大騒ぎになる。最悪、捜索隊まで 母さんそういう人だ 出されかねない。

「これでよし、と。ごめんね、もう行けるから」
ベルデナードのような大都市ともなると、駅の伝言板も端末内に設けられた掲示板になっている。
ここに書きこんでおけば万が一すれ違いになっても、すぐメッセー
ジが伝わるはずだ。

「ねえちゃんも大変だなあ。どうか行くのにいちいち知らせんのか」
ウィンが妙なことで感心する。

「こいつんちはいろいろあるからな。で、とりあえずはバスでいい
のか？」
「うん」

答えたウィンはそのまま階段を降り、下のロータリーに並ぶ幾つ
ものバス停のうちの一つに並んだ。
表示を見ると「ショッピングモール行き」となっている。

「ショッピングモールって……いちばんの繁華街よね？　そうする
とウィンのいたスラムって、ファーストの方なの？」
「だよ」

どうやらあたし、勘違いをしてたらしい。

ベルデナードという町はほぼ円形を形作っている。

そしてその円を南北に中央通りが貫いて町を2つに分断し、西側
は高級住宅地と役所などの機関、東側は巨大なショッピングモール
とアパート群が立ち並ぶ構造になっていた。

ただこの巨大な繁華街は、20年程前に旧繁華街が移設されて出
来たもので、町全体に比べると歴史は浅い。

そして再開発されるはずだった旧市街のほうは、その後大戦で計

画が中止され、そのままスラムになってしまった。

これが俗に「ファースト」と呼ばれるシティ内のスラムで、治安が悪いことで有名だ。

ただ規模のほうでは、シティ外にあるもののほうがずっと大きく、ただ単にベルデナードのスラムというところらを差す。

Episode : 24

「スラムって言うからあたし、ついシティ外の方だと……」

ちなみにこのシティ外のスラムは町の西南、線路の両脇にずっと広がっている。ロデステイオ国内の困窮者や、征服された近隣諸国からの難民。そういった人が線路際に住みついて、出来たものだ。

「ごめんよ、ねえちゃん。でもさ、そうはいはい言うのもヤバいかなって」

「あ、そうだね……」

確かにこの名前を聞いたら、大抵の人は眉をひそめるだろう。

「ったく、まさかそっちの出だとはな。どつりであいつらも肝が据わってるわけだぜ」

イマドの言う「あいつら」は、たぶんシーモアとナティエスのことだ。けど確かにあの2人、ちょっと考えられないほど非常時に落ちついている。たまたま戦場で育って慣れてしまったあたしはともかく、普通じゃあんな風にはなれないはずだ。

逆に言えばそれだけ……凄いとこなんだろう。

「ほらねえちゃん、急いで乗らないと」

「あ、ごめんね」

ウインにうながされて、慌てて来たバスに乗った。

朝のラッシュはもう終わっているらしく、意外に空いている。

それにしても。

大きな街だった。

学院のあるケンディクはもちろん、イグニールさえも遙かに上回

るだろう。

大きな公園がいくつもあるし、きちんと街路樹も植えられて、この冬の最中に綺麗な緑色を保っていた。

歩道も全域で完備、しかもなめらかな石畳だ。とうぜん車道はどこも舗装されている。

そういえば以前来た時も、夜になっても街中が明るいままだった。ただこの国ではなぜか、その街並みが住んでいる人の豊かさにながっていない。

そうやってぼんやりと眺めているうちに、あたしは気付いた。

「ねえ、ウイン。近いうちに何かあるの？」

新年が近いからというだけでなく、町全体がどこかお祭りムードだ。

「何って……あの大統領の記念日だよ」

「記念日……？」

必死に記憶を探る。

なにしろ小さい頃からあちこちの国を渡り歩いていたから、各国の記念日が頭の中でごちゃごちゃだ。

けど終戦記念はもっと後だし、建国記念はこの間のアヴァンだし……。

「んとさ、オイラもよく知らないけどさ、あの大統領が大統領になった日だって」

「あ、就任記念日」
ようやく思い出す。

革命後、一気に軍事大国化したこの国は、それに少し遅れて軍部出身の今の大統領が就任した。

そしてそのあとは、専制政治を引いている。なにしろ「終身」大統領というのだから、完全に専制君主だ。

「就任記念なあ？」

「けどよ、あの大統領が死んだ日の方がよっぽど」

「イマドっ！」

「思わず遮る。」

「あ、悪い」

このシティ内で、こんなことを口に出して憲兵にでも聞かれたら、生きて帰れる保証さえない。

「ここはそういう国だ。」

でも上手い具合に、誰も聞いてなかったようだった。

「あ、ねえちゃんたち、次だかね？」

「うん」

ウィンがそう言ったのを幸い、3人で急いでバスを降りる。

Episode : 25

「ねえ、ほんとにここがそうなの？」

降りたところで、あたしはワインに尋ねた。

なにしろ予想と違って、そこはちょっとごみごみはしているけど、どうみてもふつつの繁華街だ。

「あ、ここは大通りに近いからさ、けっこう賑わってんだ。

オイラたちがいるのは、この奥ってやつ」

言ってこの子が歩き出した。あたしとイマドも後ろへ続く。

そしてそのまま裏通りに入り、細い道をいくつも曲がると、だんだん街並みが変わってきた。

これが……。

想像以上の場所だった。

お世辞にも綺麗とは言いがたい町並み。住めるのかと心配になるような建物。

先日行ったアヴァンの貴族社会とは全く正反対なことを、肌で思い知る。

周囲の視線も突き刺さるようで、万が一目が合っても、みんな視線を逸らしてしまう。

明らかにあたしたちは　よそ者なのだ。

ただ居心地の悪さは感じたものの、それ以上はなにもなかった。ワインと一緒にいてくれたおかげだろう。

「ねえ、どこまで行くの？」

「ごめん、ねえちゃん。ちょっと歩くんだ」

なんでもシーモアたちが居着いている場所は、このスラムの方にある廃ビルなのだという。

ウインは今までとうってかわって、元氣そのものだった。やっぱりこの子には、ここが故郷なんだろう。

あたしが知らないその言葉に、少しだけ羨ましくなる。

あたしに故郷はない。

各地にシュマー家が所有している「ファクトリー」と呼ばれる施設には、確かに自室もあるけれど、普段使うことはなかった。

それ以外に覚えているのは、殺戮の渦巻く戦場だけだ。
あるいはそれを、故郷と呼ぶべきなんだろうか……。
何も無い自分に悲しくなる。

「 気にすんなよ」

「 え？」

「 無なけりや作ればいいだろ」
そう言ってイマドが笑った。

「 ありがと」

「 いいって」

「 ねえちゃんたち、何やってんのさ？」
見ればウインが、きよんとした顔をしている。

「 なんかいきなり、意味不明の会話してさ」

「 えっと……」

訊かれて説明に困る。

あたしは母さんや姉さんがそうだったから慣れてしまっているけれど、知らない人から見ればイマドの言動は、明らかに奇妙だろう。

「気が向いたら教えてやるよ」

それ以上は取り合わない、そんな雰囲気でイマドが話を打ち切った。

「……？ んじやさ、あとで教えてくれるって約束してくれる？」

「気が向いたらな」

「なんだよ、それ……」。

あ、ねえちゃんたち、あそこ！」

とつぜんこの子が駆け出した。あたしたちも慌てて追いかける。ウインが飛びこんだ廃ビルは、だけどよく手入れされていた。人が住んでいる気配がある。

それもけっこう大勢。

「ねえ、ここ確か廃ビルなのよね？」

「うん。でもさ、ちゃんと管理人がいて電気も通ってるぜ？」

「どういうこと？」

Episode : 26

よく話を聞いてみると確かにここは廃ビルなもののまだしつかりしているため、勝手に「管理人」と称する人が住みついた拳句、格安で部屋を貸し出していると言う話だった。

「ここらじゃけっこういい方なんだぜ？ 管理人に言えばさ、水道とかも直してもらえるし」

この過酷なはずのスラムで、でも住人は遅しく暮らしているようだ。

さすがに昇降台は動かなくて、階段を使って3階まで上がる。奥のほうから何か、声が聞こえてきた。

「だからちよつとだけ、ほんとちよつとでいいんだ」

「るせえ、てめえみてえなやつに、話すことなんてねえよ！」

いちばん奥で男の人が2人、言い争っている。

「ウイン、あれは……？」

「あ、ほつといていいつて。ここんとこいつもだからさ」

「いつも？」

なんでもこの男の人はジャーナリストで、このところ取材を依頼しに日参ているのだと言う。

「メーワクなんだよな。」

ケインに「いちゃん、取りこみ中悪いんだけどさ、ちょいいい？」

「え？ 今忙し　って、ウインか？　どうやって帰ってきたんだ？！」

ケインと呼ばれた、ジャーナリストを追い返そうとしていた男の人が驚く。

「このねえちゃんたちが、連れてきてくれたんだ。すつげえ強いんだぜ」

「だからって……。まあいい、ともかく入れ。君たちもとりあえず、入るといい。」

つと、あんたはダメだ！」

一緒に入ろうとしたジャーナリストの人が、引きとめられる。それを気にしながらも奥へ行くと、部屋の中に見慣れた姿があった。

「シーモア、ナティエス！」

「ルーフェイア？」

思わず呼ぶと、不思議そうに2人が振り向く。

「あんた、なんだってここに……？　そうか、ウインのやつか」
彼女があたしたちを一瞥した。

鋭い瞳。

「シーモア？」

「あのね、ルーフェイア。ここへ来てもらっても困るの」
睨まれてすくんでいるあたしに、そうナティエスが説明する。

「でも、だって……」

言葉に詰まった。

このままじゃ大変なことになるのは分かっているのに、止められそうにない。

「あんたのことだ。話し聞いてすつとんで来たんだろうね。」

ただね、これはあたしらでカタつける話さ。部外者が出る幕じゃないんだ。

悪いけど帰つとくれ」

にべもない返事。

「けど……」

けど放っておいたら、シーモアたちが死んでしまいかもしれない。それなのに……。

「けど、もしも、もしも……シーモアたちが……」

もう誰にも死んでほしくなかった。

戦場で次々と死んでいった人たちの顔が浮かぶ。

さっきまで一緒に笑っていたのに、次に会った時はもう冷たくな
っていて……。

それにあたしは、ムアカ先生と約束したのだ。

必ず連れ帰ると。

何もできない自分が悔しくて、涙がこぼれる。

「わかった。帰るわけにはいかないけど、そのワケ話すよ。」

ともかくそれで勘弁してもらえないか？」

「理由……？」

真剣なシーモアの口調に、あたしは驚いて顔を上げた。

Episode : 27

Seamore

ったく、まいったね。

正直それが、いちばんの感想だ。

まさかチビどもとすれ違った挙句に、この騒ぎをルーフェイアに知られちまうなんて。

ルーフェイアは優しい。そのうえ人のこととなると、自分のことなんざお構いなしに助けに入る性格だ。

だから何も言わずにおいたつてのに、偶然チビどもを保護したのがこいつだったもんだから、いろいろ知られちまった。

で、この騒ぎだ。

なんせ海越えて大陸を半分横断して、追いかけてくるってんだからハンパじゃない。お人好しにもホドがある。

「けど、もしも、もしも……シーモアたちが……」

ここまで来た上、そう言っただけで目の前でぼろぼろ涙こぼして泣いてちゃあ、さすがに冷たくできなかった。

成り行きとはいえ、2人をアジトに入れたケインに、文句言いたいところだ。

「わかった。帰るわけにはいかないけど、そのワケ話すよ。

ともかくそれで勘弁してもらえないか？」

ついそんな言葉が口をついちまう。ホントは部外者にこういうこと言うのはご法度だけど、まあ理由が理由だから、リーダーのガルシイも許してくれるだろう。

「理由……？」

びっくりしたのか、ルーフェイアのやつが顔を上げた。

「ああ。」

ただ約束してくれないか？　これ聞いたあとは、あたしらに干渉しないってね」

「……………」

あゝ、そんな顔するなって！

困り果てた上目使いされちゃ、自分がエラく悪いことしてる気分になっちまう。

けど幸いこの子が尋ねた先は別で、一緒に来たイマドの方を振り向いた。

ルーフェイアの視線を受けた彼氏が頷くのを見て、マジでほっとする。大人しい性格のルーフェイアは、イマドの言うことに逆らったりしない。

「O・K・分かったみたいだし、話すよ。」

ま、そうは言ってもざっとだけどさ。そもそも言うこと自体、綻破りだしね」

そう言っであたしは話し出した。

このシティ内のスラムは、なにせ治安が悪いので有名だ。だから当然、国だかが勝手に決めた法律なんざ、守られちゃいない。

ただ、完全な無法地帯ってわけじゃなかった。なんにも知らない外の連中はそんなこと言ってるけど、スラムにはスラムのキマリってのがある。

例えば上下関係なんかは、外の連中が思う以上にしっかりしてる。まずクリアゾンって呼ばれる大人の一団があって、その下にあた

しらみみたいな未成年の集団、さらに下にチビガキの集団。かなりの数のグループがあるけど、専門にしているコトなんかで、ぜんぶ細かく立ち位置やナワバリが決まっていた。

他にもいろいろ、細かい「暗黙の了解」ってやつもある。

あたしらのところは本職は殺しだけど、依頼が来ないかぎりは手出さないし、関係ないやつは絶対に巻き込まない。かっぱらいやつてるようなグループならともかく、ある程度以上はみんな、一定の不文律を守ってる。

逆に言えばこうだからこそ、あたしらも追い出されたりチクられたりせずに、ここに腰を据えてられるってワケだ。

とは言え、普通じゃ信じられないような話も、ここにや多いけど。

Episode : 28

「で、今回の話はその中でも、どうやっても見過ごせない類なのさ」
「見過ごせない……？」

スラムの事情には疎いルーフェイアが、不思議そうな顔になった。
この子にやこんな場所で何が起るかなんて、想像もつかないんだ
ろっ。

それはいいことかもしれない、そう思いながら説明する。

「チームのガキが殺られたんだよ。シマ争いの腹いせにね」

「そんな　！」

「事実さ」

もっともこういう話自体は、そう珍しいことじゃない。競合の少
ないうちは滅多にナワバリ争いしないけど、数が多い盗み専門のチ
ームなんかは、よく他とぶつかって血みどろの騒ぎをやらかしてる。

「で、仕返してワケか」

なんの感情もない静かな声で、イマドのヤツが確認してきた。

「そうなるかな。まあどっちにしたって、これを放っておくわけに
はいかないしね」

「でも、何も……」

抗争までやらなくていい、ルーフェイアのヤツはそう言いたいん
だろう。滅多やたらに強いくせに、この子は争いごとは大っ嫌いだ。
けどその言い分は、ここじゃ通らない。

「自分でオトシマエつけられないようなヤツは、ここじゃ暮らして

けないんだよ」

どれだけきつちりカタをつけられるか。それがこのスラムでの価値だ。

ルーフェイアは黙ったままだった。多分どうしていいか、わかんなくなってるんだろう。

「さて、約束だよ。理由話したんだから帰ってもらおう」
こういうとまたこの子、泣き出しそうになった。

「そんな顔しなさんなって。
全部片付いたら、ちゃんと帰るさ」

「そうそう。だいいちあたしたち、学院生なのよ？
ちよつとやさつとじゃケガもしないもん。だから安心して待って
てね」

ナティのやつが上手く言葉を添える。

「シーモア、ナティエス……」

ルーフェイアの瞳から、また涙がこぼれた。

「おい、とりあえず行くぞ」

泣いてるこの子を、意外にもイマドがうながす。

「でも……」

「しゃあねえだろ、約束なんだし」

ルーフェイアはイマドには逆らわないから、しぶしぶながらも従った。

ドアを開けて2人を送り出す。

「悪いねイマド、この子頼むよ。」

それとウィン、この2人をちゃんと外まで送ってやんな」

「おっけー」

ドアのところで、ルーフェイアが立ち止まった。半泣きの顔で訴えてくる。

けど今度も、イマドがその背を押した。

「ほら、行くぞ。」

「じゃあな、シーモア」

ウィンに続いて、あっさりと2人も出て行く。

って、やけに素直じゃん。

見かけによらず食わせもののイマドが、すんなり帰ったのが気にはなったけど、その時はあたしはそれ以上考えなかった。

Episode : 29

I m a d

背後で、アジトのドアが閉まる。けどそんなのはお構いなしに、中の様子が手に入るみたいに分かった。

便利だな、これ。

一気に視界が広がった感じた。

俺がいろいろ読めるのがルーフエアにバレたあと、あいつはこの力について、知ってる事を話してくれた。

なんでもシューマージャ、この手の力をかなり上手く使ってるらしい。訓練して通話石の代わりにしたり、ふだんの情報収集に使ったりしてるっていう。

まあよく考えてみりゃ、通話石自体がこの手の能力を真似たって言うから、ちゃんとやれば出来て当たり前だ。

あとほかにも日常的に、視力だの聴力だのと同じ感覚で、みんなふつうに利用してるんだとか。

トラブルの元につきやならない、気ばっか疲れるだけの能力だと思ってたけど、使いようってことだろう。

で、ルーフエアの説明 当人使えねえからの射てなかったけど もとに、試行錯誤の最中だった。

そして真っ先に出来るようになったのが、前からなんとなく出来てた、「読み」だ。

ただ、思ってたほどいいモンじゃなかった。下手にやると、周り人ぜんぶの考え事が聞こえちまって、頭がガンガンする。雑踏なんか完全にお手上げた。

その上細かいことまでは分かんなかったり、低リターン高リスクときてる。

それでもさつきはガマンして、アジトの連中から、最低限の情報は拾い出せた。

「イマド……だいじょうぶ？　なんか、辛そう」

まだにじむ涙拭きながら、ルーフェイアのヤツが言う。

「裏技で聞いてたら酔った」

「あ、それで……」

これだけで通じるから、ルーフェイアがこういうのが分かるヤツだったのは、本気で助かる。

「ねえちゃんたち、ごめんよ。無駄足になっちゃってさ」

「いや、それでもねえよ」

すまながるウインに、俺は答えた。

なにせ相手のチームの名前も祭りの日も、きっちり覚えてる。これを知ってるだけでも相当違うはずだ。

「けどさ、これからどうすんの？」

「そだな、パターンどおりなら、ルーフェイアの迎えと合流して、別の手を考えるってとこか？」

「でも、その前に、イマド休んだほうが……」

横から口挟むルーフェイアのヤツに、大丈夫だと手を振る。

「合流してから休んだって、同じだろ」

どっちしても地理やら情勢やらに明るくない俺らじゃ、ヘタに動けねえし。

「ルーフェイア、どうやったら迎えのヤツと連絡できる？」

「えっと……でも多分、駅で誰か待ってると思う」

ずっと誰か待ってるなんざ、さすがお嬢様だ。

「そか。そんなら考えなくて済むな」

俺がそう言う横で、ルーフェイアのヤツがため息をついた。シーモアたちを連れ帰れなかったことが、やっぱシヨックだったんだろ
う。

これであいつらになんかあったら、マジでヤベえな。
ともかくこいつは優しすぎる。

イザとなつたら力ずくでも、抗争をどうにかするしかねえだろう。
ルーフェイアの望みってなら、シュマーの連中も動くはずだ。
そんなこと考えながら、少し歩いた時だった。

「君たち……」

「はい？」

後ろから声をかけられる。

振り向くと、さっき追い返されてたジャーナリストの人がいた。

Episode : 30

「なんか用です？」

「君たち、あそこの子たちと知り合いなのかい？」

俺たちは顔を見合わせた。

「そりゃオイラ、あそこに住んでるけどさ」

「あたしたちも確かに、友達ですけど……」

「でも、きつちり追い返されましたからね」

ウィンとルーフェイアの、言葉の後を引き継ぐ。ここでこんなやつに、関わり合いになるのはゴメンだ。

けどめんどくさいことに、向こうはそう思ってくれなかったらしい。

「俺はこういうものなんだがね」

俺らにむけて名刺を差出す。

表には「フリージャーナリスト、ゼロール・アレイ」って書いてあった。

「すまないが、話をさせてくれないか？」

「だから俺らは……え？」

今この人、話を「聞かせて」「じゃなくて」「させて」「って言ったよな？」

とつさにこの人を真っ直ぐ見る。

焦りが伝わってきた

なんかあるな。

原因は……例の祭りだ。

「どんな話なんです？」

「ここじゃまずいな。」

スラムの外れに俺の知り合いの店があるから、そこまでいいかい？」

「わかりました」

一瞬どつかやばい場所かと思ったけど、この人が行くところとしては割合まともな店だ。

場所がわかんねえけど。

しょうがないから俺ら3人、そろそろ後ろをくつついてく。

ただ結局その店へは、たどりつかなかった。

「やめとくれ、その子は関係ないだろうっ！」

「黙れよ、このアマ。そう言うんだったら出すもん出せってんだ」
言い争う声が聞こえる。

気配を探ると、すぐ先の路地で2人の女性　親子らしい　が、
数人の若いヤツに囲まれてるのがわかった。

まあケンディクじゃともかく、このスラムだったらよくある風景
だろう。

っ
っておい！

ほんの一瞬の間に、ルーフェイアが飛び出した。
真っ直ぐ声がした路地のほうへと駆け抜けて行く。

「ルーフェイア、待てっ！」

とはいえ、あいつが待つわきゃねえけど。

それにしても、ルーフェイアのやつは足が速い。

すぐに追いかけたものの一瞬の差がものを言って、引き離されなようにするのが精一杯だ。

ほんの僅かに遅れて俺が路地へ飛び込んだときには、ルーフェイアは野次馬を潜り抜けて、男たちに向かって行ってやがった。

「何をしてるの！」

いいざま柄での鋭い突きを、若い女の人の腕を掴んでた、男の手首に食らわす。

痛めつけられて、思わず男が手を離れた。

「下がってて！」

母娘を背後にかばうようにして、ルーフェイアが間に立ちはたかる。

Episode : 31

「このやろぅ、ガキのクセして……」

けどあいつが怯む様子は当然なかった。

なんせルーフェイアときたら、戦場育ちだ。この程度のコロツキなんかじゃ、腕慣らしにもならないだろう。

「お嬢ちゃん、そんな物騒なもん振りまわしたら、ケガするぜ」

「」

ルーフェイアのやつが、無言でコロツキを睨みつけた。

こいつ、守るものと性格が一変する。自分のことだとただ泣くだけなのに、他人のこととなると梃子でも動かなくなるからたいたもんだ。

ま、そこがいいんだけど。

とりあえず俺もただ見てるわけにゃいかねえから、野次馬をかき分けてルーフェイアの隣に並ぶ。

って待てよ、この母娘……。

なんとなく読み取ってたなかから、とびっきりの情報を俺は拾い出した。

この2人、例の祭りやらの話を知ってる。どうも知り合いが関係者らしい。

人が困つてると見境なく助けに行くルーフェイアの性格が、功を奏したってやつだ。

「ほう、お嬢ちゃんだけかと思ったら、いちおう彼氏づれかい。こりゃたいしたもんだな」

ゴロツキ連中が汚い笑いを浮かべたけど、幸いルーフェイアヤツは、意味が分かってない。

ともかく一步も引こうとしないこいつに、連中のひとりが進み出た。

「さあ、ケガしたくなかったらそこどきな」

俺らはまた無言だ。ってえか、こんなやつらとは口もききたくない。

「ガキのくせにずいぶん生意気だな」

黙ってるのが気に入らなかったんだろう、ナイフをちらつかせた。

「そついうのは、少し『教育』してやらねえとな」

「ざけんな」

隙だらけでナイフを振りかぶったゴロツキに、俺は容赦なく下段から切りつけた。

がら空きだった脚を大きく切り裂かれて、男が転倒する。

「こつ、このヤロウ……！」

いきりたったゴロツキ連中が、一斉に武器を構えた。周囲の野次馬が、蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。

ルーフェイアが太刀を抜いた。

俺ももう一度剣を構える。

けど、それ以上の乱闘にはならなかった。

「おめえら、ちょっと待て」

緊迫しているところへ、のんびりした声がかかる。

どっからともなく、また男がひとり出てきた。

あ、こいつは少しマシか？

昔軍隊でも鍛えられたのか、そこそこデキそうなヤツだ。
別段構えもせずにこっちへ来る。

「とりあえずお嬢ちゃんたち、こっちの話しも聞いてくれや」
妙に馴れ馴れしい。

しかも様子見で俺らが黙っていると、お構いなしに喋り出しやがった。

「お嬢ちゃんたちそいつらかばってるけど、なんでこうなったか教えてやっから。」

その親子な、金払ってねえんだ」

「お金？」

金に困った経験なんぞないルーフェイアが、不思議そうに返す。

Episode : 32

「そ。なにせそいつら、借金しててね。

こつちだって商売だから、そーゆーヤツには別の形で払ってもら
うしかないワケ」

「だからって、乱暴しなくても！」

「それは謝る。ケガの分は治療費も出すさ。

けどキマリはキマリ、借りたものは返さなくちゃな。それがダメ
なら差し押さえってのは、ちゃんと法律で決まってるんだ」

こいつ、慣れてるな。

こつ言われたら手の出しようがないの、ちゃんと知ってやがる。
力任せに押すだけの手下連中とは、さすがに器が違った。

「そういうわけだからお嬢ちゃんたち、帰ってもらえるかい？」

さすがにどうしたもんか考えあぐねる。

けどそれより早く、ルーフェイアのヤツが口を開いた。

「
いくらなの」

「は？」

突拍子もない台詞に、一瞬場に居合わせた人間 俺も が全

員黙る。

「だから、払えばいいんでしょう？ いくらなの？」

「おいおい、冗談キツいぜ。お嬢ちゃんの小遣いで払えるような額
じゃないんだ」

まあ普通そう思うだろうな。

ただ相手が違う。

「　　いくらか訊いてるの」

「んじゃ参考までに教えるけど、7千ルルシにもなるぞ?」

そりやまた溜めたな。

それだけの額があつたら普通の家族なら、2ヶ月以上暮らせるだろう。

もつともこいつの場合、その程度じゃびくともしない。

「じゃあ、これで足りるでしょう?」

いつもつけてるウエストポーチから無造作に取り出したのは、磨き上げられた紅玉だった。それも親指くらいの大きさの、どうみたってかなりの値打ちモンだ。

取りたて屋があんぐり口をあける。

「足りるの、足りないの」

「あのなルーフェア、足りるところじゃねえって。これならお釣りが来るぞ」

分かってないこいつに、思わず俺は説明した。

「そうなの?」

「多分な」

やっぱり分かってねえの。

けどこいつは分かってないなりに分かった?らしくて、男のほうに向き直った。

「これで清算してあげて。残りはそつちで……」

「　　釣りはもらえよ」

また思わず突っ込んだ。

どうもこいつ、一般常識がない。というか、そもそも他人の借金

を払おうって時点で、かなり常識外れだろう。

けどなあ。

こいつの場合、それ言ってもまあムダだろうし。だいいちルーフ
エイアときたら、こういうことになるかと頑として言うこと聞きや
ない。

振り向くと予想外の展開に、当の親子が困惑しきってた。

「あんたたち……？」

「すいません。あいつ、そういうヤツなんで」
とりあえず、親子にそう説明する。

いいか悪いかは別として、これはルーフエイアにとっちゃ、ごく
あたりまえの範疇に入る話だ。

なにせ人が困ってるのを見たが最後、息するのと同じ調子で助け
に入るんだから、凄いとしか言いようがない。

Episode : 33

「お嬢ちゃん、正気か？」

取り立て屋の男も呆れかえってる。

けどルーフェイアの方は真剣だ。

「正気よ。さあ、どうなの」

あの調子だと「ダメだ」なんて言おうもんなら、即座に切りかかりそうだ。

しばしの間。

「ふう、やっと追い付いた」

「あ、ゼロールさん」

「　　妙なところで出てこないでくださいよ」

ジャーナリストのゼロールさんが、ぜえぜえ言いながら今ごろ現れた。

「そうは言ってもみんなめちゃくちゃ足速くてな……運動不足にやキツイよ」

「あの、大丈夫ですか？」

「年だとか」

ルーフェイアのやつは単純に心配してるけど、俺はそこまで素直じゃない。だいいちまだオヤジってわけでもないのにこれじゃ、はつきり言っただけないってやつだ。

「ガキのくせに生意気だな」

「オヤジになると、みんなそう言いますよ」

「君なあ……」

俺に切り返されて、この人が困って頭を掻く。

「イマド、そんなこと言ったら……」
と、別のほうからも声がかかった。

「おい、もしもし？」

「へ？」

あ、すみません」

そういや借金取りと、やりあってる最中だったな。
見れば連中、会話から取り残されて困りきった顔をしてる。

「えーと、なんの話でしたっけ」

「立てかえる話だったかな？」

「あ、それぞれ」

ようやく話が元へ戻った。

「なんの話なんだ？」

そこへまたゼロールさんが口を挟む。

「あとで説明します。話がこじれるから、黙っててもらえませんか？」

って言うか、もう十分こじれてる気はするんだよね……。

でもとりあえず、この人が黙ってくれた。

「ともかく、この紅玉でどうにかしてもらえますよね？」

借金取りに確認する。

「ああ。こっちだってまあ、とりあえずお金が入りやいいわけだしな。

おい、おめえら、戻るぞ」

取り立て屋が引き上げて、周囲の空気が緩んだ。

「やれやれ、これで一段落だな」

「みんな、ごめんね。寄り道しちゃって……」

「……そう来るか」

ある程度ズレた台詞が来るのは予想はしてたけど、まさか「寄り道」って言うとは思わなかった。

「ねえちゃん、マジ金持ち？」

いつの間にやらそばへ来たウインが、呆然とつぶやく。

「いわゆる金持ちとは、ちょっと違うけどな」

「ちよつともなにも、金持ちに種類なんてあるのかい？」

ワケわかないツッコミを、ゼロールさんがする。

Episode : 34

「もう、そんなのどうだっていいでしょ……」

ルーフェイアの方は、心底嫌そうな調子だ。なにせこいつ、自分の家をけっして好いちやいない。

ともかくその辺は終わりにして、例の母娘の方へ向き直ろうとした時だ。

「ちょっと、あんたたち！」

やっぱこう来たか。

俺としてはうまいこと丸く収めて、この母娘が持つてる「とびっきりの情報」をどうにかしたかったのに、そうは問屋がおりさなかった。

「なんだい、何さまのつもりだい！ あたしら確かに貧しいけどね、物乞いじゃないんだ！」

ルーフェイアのヤツがはつとした顔になる。

「まあまあまあ。とりあえずケガもなかったんだからいいじゃないか」

事態が分かってるんだか分かってないんだか、ゼロールさんがなだめた。

ただ、ムダだと思うんだよなあ……。

「部外者は黙つといで！」

案の定一喝されて、この人が黙った。

大人のくせにしょうがねえな。

世の中頼りになるやつなんざ、案外ないもんだ。
で、そのままおぼちゃんの独壇場になる。

「金持ちがここへ何しに来たかは知らないけどね、あたしらに恵んで、いい気になってるんじゃないよ!」

「ごっつ、ごめんなさい!」

一方的に言いたてられて、ルーフェアがまた謝った。

「なに謝ってんのさ! だいいち謝るってことはやっぱあたしらダシにして、自分に酔ってただけって証拠だろ」

「ごめんなさい……」

ルーフェアがうつむいて、さらに謝る。

「しゃあねえな。」

場を収めようと俺が口を開きかけた時だ。

「おばちゃん、みつともねえぞ!」

意外にもウインのやつが、この中年? 女性に噛み付いた。

「みつともないとはなんだいウイン、あたしゃ間違ったことなんか言っていないよ!」

「うそつけっ!」

どうも知り合いらしいこの2人、親子もかくやって勢いでケンカを始めやがる。

「ウソとはなんだい、どこがウソだったのさ!」

「全部そうだろ!」

なんだよ、自分の借金払ってもらってお礼も言わねえし、だいいちねえちゃんたちが来なかったら、どうなったと思ってるんだよ!」

「それは……」

へえ。

ウインのヤツ、けっこう言うな。

「あの騒ぎだもん、どうせ借金のカタに、そのオリアねえちゃん取られるとこだったんだろ。」

「なのになんだよ、お礼のひとつも言ったらどうだよ!」

「だからって金持ちの道楽なんぞに……」

「道楽なんかじゃないやつ!」

このねえちゃんたち、友達心配でわざわざケンディクからここまで来たんだかな! それにオイラまで助けてくれたんだ!」

こいつがまくし立てた。

「ウイン、もう……いいの。あたしが、悪いんだから……」

「ねえちゃん、ちつとも悪かないだろ!」

「でも……」

ルーフェイアはルーフェイアで、ひたすら自分が悪いと思ってるし。

ともかくこのままじゃ、收拾がつかねえだろう。

Episode : 35

「すみません、気に障ったんなら謝ります。

ただこいつ、別にそういうつもりじゃないんですよ。性格なんです」

「性格？」

俺の言葉に、おばちゃんは訝しむような視線だ。

「人が困つてると見ると命懸けだろうがなんだろうが、後先考えずに飛びこんじゃうんですよ、こいつ」

「ホントだぜ！ オイラがケンデイクの駅で撃たれそうになった時も、ねえちゃんたちが身体張って助けてくれたんだ。

あ、おばちゃん疑ってんな！」

「いや、あんたの言うこと疑ったりはしないけどさ……」
と言いつつ、どうも信じらんないらしい。

「だいいち今だって、ねえちゃん命懸けで助けてくれたじゃないか！」

「そりゃ、まあ……」

おばちゃんがだいぶ、トーンダウンしてくる。

もつとも命懸けとは思えねえけど。

けどここでそれ言っただけをぶち壊すほど、俺も馬鹿じゃない。

「とりあえず、許してやってもらえませんか？」

どうやらこのおばちゃんが落ちついたらしいのを見て、そう切り出す。

しかもいいタイミングで、ルーフェイアのやつが予想通りのことを言った。

「イマド、いいの。あたしが……悪かったんだもの」
そう言うこのいつの瞳から涙がこぼれる。
ただそれでも気丈に？向き直って、謝るのだけは忘れなかった。

「出過ぎたことをして……もうしわけありませんでした……」
「いや、その、わかりやいいのさ」

泣きながらのルーフェイアの言葉には、さすがのおばちゃんもしどろもどろだ。

「あ、ねえちゃん泣かした」
すかさずウインが突っ込む。

「うるさいねっ！」
おばちゃん、ウインを怒鳴りつけてから、泣いてるこのいつの顔を覗きこんだ。

「こっちもまあ、いきなり怒鳴ったりして悪かったよ。
ああもう、大きいナリしていつまで泣いてんだい！」

さっきまで怒ってたのはどこへやら、もともと世話好きらしいこのおばちゃん、完全に涙に引つかかってやがる。

泣いてる美少女は強えな。

ある意味太刀振りまわすより、攻撃力ありそうだ。

「う、ごめんなさい……」

「あやまることないだろ。ほら、こっちおいで。
まったく、これじゃうちのチビのほうがマシだよ。はい、涙拭いて！」

とはいえ泣くことに関しちゃ、筋金入りのルーフェイアだ。当然この程度じゃ泣きやまない。

必死に唇を噛んで泣くまいとはしてるけど、相変わらず涙がこぼ

れてる。

「やれやれ、ほんとに泣き虫だね。呆れたもんだ」

あ、俺知らねっと。

ここでこれ言つとどうなるか、おばちゃん分かってない。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

案の定ルーフェイアのヤツが、謝りながらもっと泣き出した。
しかもこの騒ぎに、一度散つてた野次馬が戻ってくる。

「なんでえ、ジャス。助けてくれたお嬢ちゃん泣かしちまったのか？」

「べ、別に泣かせようと思って……」

「けど泣いてるぜ？」

こうなると分^ぶは完全にルーフェイアだ。

なにせこいつ、戦闘さえなければひたすら華奢で儂げ、ついでに泣いてる姿ときたら、かばわなきゃいけない気にさせられる。

まあ、例外もいるけどな。

でもここには幸い、その「例外」はいないし。

Episode : 36

「ひでえなあ。なにも泣かすことないだろうに」

「だから違うつて言つてんだろ！」

「たたく、ほらあんた、ちよつとこつちへおいで！」

野次馬たちに騒がれて、さしものおばちゃんもキマリ悪くなったらしい。

「往来の真ん中で泣かれてちゃ、あたしが悪いみたいでたまんないじゃないか」

「おばちゃんが悪いんだろ？」

ウィン、ナイス突っ込み。

おばちゃんが一瞬黙る。

「分かった、分かったよ。あたしが悪かった！」

ともかくあんた、そのまま泣いてるわけにいかないだろ。とりあえずうち来て、落ちついてからお帰り。いいね？」

俺がさして口を差し挟まないうちに、狙いどおりの方向へ事態が転がった。

「さ、おいで」

「あ、はい……」

言われてまだ泣いてるものの、ルーフェイアのやつが素直にうなずく。

おばちゃんがルーフェイアの腕を掴んで歩き出して、オリアと呼ばれた女性 たぶん10代後半 がすぐ後ろからついていった。

「お、おい、話が違つぞ？」

ゼロールさんが慌てる。

まあ俺らをどっかの店へ連れてって深刻な話するつもりだったわけだから、しょうがないんだろっけど。

「俺はあいつと一緒にいます。それにこのほうが、早く事態が片付きますから」

「？　　？　　？　　どういうことだ？」

「知りたかったら、一緒に来たらどうです？」

俺の言葉に一瞬だけこの人は考えて、ついてきた。いくらか距離のあいたルーフェイアたちを、追いかける。

おぼちゃんの家とやはらはすぐそこだった。半分壊れかけたアパートの、3階のすみっこだ。

気配を察したのか、隣近所のドアが開く。

「あんた、大丈夫だったのかい？　外で騒いでたみたいだけどさ」

「ああ、この子たちがちよいと助けてくれてね」

「ほらっ、預かってた子たち返すよ」

ぞろぞろとガキが出てきた。全部おぼちゃんの子供らしい。

って、ずいぶんいるな。

あのオリアって人もいれると、8人兄弟ってことになるだろう。

「狭くて悪いけどね。まあ通りの真ん中よりマシだろうよ」

「すみません……」

まだ泣きながらルーフェイアのやつが謝る。

「いや……いいのさ」

不意におぼちゃんのトーンが、もう一段下がった。

自宅のドアを開けて中を見る。

「 そうだね。あんたが助けてくれなきゃ、サイアクこの部屋へ
だつて戻れなかったんだ」

どうも戻ってきて事態を実感したらしい。
最初っから気がつけて気もするけど。

「 さっきは頭に血が上つてたから、怒鳴りつけたりしたけど……お
嬢ちゃん、ありがとう」

「 いえ……」

ルーフェイアがやつと顔を上げた。

Episode : 37

「悪かったね、泣かせて。」

お金のほうはどうにかして少しづつ返すから、すまないけど待つてくれるかい？」

「いえ、あたしそんなつもりじゃ……」

ま、こいつじゃ「返してもらおう」なんてこたあ、まるっきり考えてないだろうな。

けどしおらしくそんなこと言われたもんだから、おばちゃんおさら、こいつに参っちまったみたいだった。

「ほんといい子だねえ。うちの子供らに、爪の垢でも煎じて飲ませたいよ」

さっきまでの剣幕はどこへやら、だ。

「あの子はこんな風だったんだけどねえ……」

「え？」

涙に濡れた顔で不思議そうになったルーフェイアに、おばちゃんが寂しく笑いかけた。

「ひとり、死んじまってね。」

助かるんだったらなんとしても思っ借金までしたけど、ダメだったのさ」

「そんな……」

ルーフェイアの瞳に、また涙が浮かんだ。

「いいんだよ、もう済んだことさ。」

それよりそんなに泣いちゃ、せつかくの可愛い顔が台無しだよ。向こうで洗っておいで」

とん、と背中を押されて、狭く苦しい洗面所へあいつの姿が消えた。

「さ、あんたたちも上がりな。なんにもないけど、まあ休めるだろうからね」

「すみません」

俺たちもあがらせてもらう。

けど、マジで狭い部屋だった。

食堂と兼用のさほど広くない居間がひとつ、他にはガキどもの寝室が1つと仕事場兼大人の寝室、台所、それにサニタリーだけだ。

ここに一家9人じゃ、どうやったって狭いだろう。

「適当にそこら座っていいよ。あたしは仕事しちまうから」

あの騒ぎで遅くなっちまった。そう言いながらおばちゃんが奥へ移動しかける。

「ああそうだ。オリア、悪いけどチビたちに昼メシ、作ってくれるかい」

「ちよつと母さん、あたしだって仕事あるんだよ！」

どうも伝わってくるイメージからすると、買出し行った帰りに、連中と鉢合わせしたらしい。で、予定外に遅くなつて昼メシが押せ押せになつたんだろう。

「よかつたら俺作りますよ」

どっちも嫌がつてるの見て、俺はそう言った。

もちろんだ心があつたりする。ここで上手く立ち回れば、思ったより早く、コトの中心部へたどり着けるってやつだ。

「あんたが？」

おばちゃんが、信じらんないような顔になった。

「あ、おばちゃん、この兄ちゃんすっげえ上手いぜ、メシ作るの。オイラ食わしてもらったもん」

「へえ、そいつは楽しみだな」

なんかこのジャーナリストおやじも、ちゃっかり食べる気にいるらしい。

「そうかい、じゃあ悪いけど頼もうかね？」

なにせ今日納める仕事で、まだ残っててね。とてもじゃないけど時間がなくてさ。通りすがりの人間に頼んだりして、申し訳ないけど……」

「別にいいですよ。俺、料理そんな嫌いじゃないですし」

人に言えねえ理由 知られたらバカにされること請け合い

で手に入れた特技だけど、けっこうこれ、あっちこっちで役に立つ。

「使っていい材料、どれです？」

いいながら俺は、昼メシ作りに取りかかった。

どうやらツキがこっちにあるらしいことを、確信しながら。

Episode : 38

D i a t h S i d e

男性がひとり、真昼のスラムを歩いていた。年齢は30代後半と
いった雰囲気、ごく淡い金髪に薄い灰色の瞳をしている。

顔立ちは……かなりの美男子で通るだろう。

当然周囲が振り返って興味を示す。が、当人は知らん顔だ。

「なにさ、お高くとまっちゃって！」

誘いこむのに　まだ明るいと言うのに　失敗して、悪態をつ
いてみせる女性までいたが、やはり気を惹かれた様子はなかった。
もつとも彼の場合、別段女性に興味がないというわけではない。
ただ単に件の女性が、趣味ではなかったというだけだ。

彼はここに慣れている様子だった。

「おう、ディアスじゃねえか。ずいぶん久しぶりだな」

たまたまビルから出てきた中年の男性が、気さくな調子で声をか
ける。

ディアスと呼ばれた彼は、軽く頭を下げて応えた。

「レニーさんとこか？　帰りはこっち寄ってけや」

それにうなずいて、また彼は歩を進めた。

同じスラムでもこのあたりはまだ入り口のほうで、わけのわから
ない飲食店やなにかがひしめいている。

と、その一角へ彼の身体が沈んだ。

地下へと続く階段に足を踏み入れたのだ。

降り切った先の薄暗い廊下を抜けると、小さなバーがあった。
時間が時間なので開いているわけではないのだが、男性はためらい

もなくドアを開ける。

「ディアス？」

扉が開いた音に振りかえったこの店の女主人が、驚いたような声をあげた。

「いったいどういう風の吹き回しよ？ まあいいわ、とりあえずかけたら」

うながされてディアスが、カウンターにかけた。
なにも言わないうちに飲み物が出される。

「で、なに？」

あなたがわざわざ出向くからには、なにかあるんでしょ」

「金髪の少女の話の聞かなかったか。太刀を持っている」
初めて彼が声を出した。低く落ちついた声だ。

「太刀持った金髪の女の子？ それ多分、セジのとその連中と、やりあってた子じゃないかしら」

偶然通りかかったと、女主人が言う。

「ともかく凄かったわよ。割って入ったと思ったら、あつという間に柄の一撃で、オリアちゃん助け出してね。」

たまたまリードが来たから丸く収まったけど、そうじゃなかったらもうひとりの男の子と一緒に、あの連中叩きのめしてたんじゃないかしら？」

「今の居場所？」

愛想の欠片もないような訊き方だったが、この女性が気にした様子はない。

「ジャスおばさんのところへ、上がりこんだみたいね。というより、あんまり泣くんで連れていかれた、って言うほうが正解かしら？
ともかくそこからは、動いてないみたいよ」

そこまで聞くと、ディアスが立ち上がった。

「あんもつ、つれないわねえ。しばらくここにいてよ」
女性が彼の手を掴んで引き止める。

「そうすれば取っておきのこと、教えるわ」
一瞬ディアスが困ったような表情になった。

「悩む事ないじゃない。あなたなにも損しないもの」

「時間がない。明日の祭りに用がある」

「あら……」

女性は一瞬驚きの表情を見せたが、すぐにもとの落ちついた様子に戻る。

「それもそうよね。あなたじゃ」

なにか思い当たったのだろう、さもおりなんと言わんばかりの顔だ。

「ひとつ聞くが、なぜクリアゾンは動かない？」

「それどころじゃないのよ」

そう言って彼女が肩をすくめる。

「ここんどこ　　って言ってもそろそろ3ヶ月になるけど、あつちこつちの下っ端が、身内やら堅気の連中にクスリばらまいちゃっておかげで組織はガタガタよ。だいぶお互いに、殺りあってもいるしね。」

とてもじゃないけど、ちびちゃんたちの仲裁してる余裕なんかないわ」

この言葉にディアスが考えこんだ。

「それになにしろ、今回の話は根が深いのよ。」

両方のチームが腹いせに相手のとこの子供殺してるから、ちよっ

「とやそつとじゃ収まりそうにないの」

言って女性が、また肩をすくめてため息をつく。

「あの連中がまさかそんな真似するなんて、思わなかったんだけど。けどあなたが来たなら、どうにかなるかもね」

ほんとならクリアゾンの仕事だけだね、と呟きながら彼女がもうひとつグラスを差し出した。

「これ、イけるわよ」

中身を見たディアスの表情が、微妙に変わる。

「急ぐのは分かるけど……少しは時間あるでしょ？」

彼女が意味ありげな視線を向け、ディアスが立ち上がった。

Episode : 39

Natties

「ねえ、シーモア。ウィン遅くない？」

「きつと、どうか寄り道でもしてんじゃないのかい」

鈍いんだか鋭いんだかわかんないルーフェアを、あたしたちが
追いついたあとの話。

「うーん、やっぱりそうかな？」

でもウィンが拾われたのって、あたしたちが学院行くちょこつと
前だから、いまいちよく知らなかったり。

「きつとそうだと思うね。けどまあ、ルーフェアたちが帰ってよ
かったよ」

「そっかなあ……？」

シーモアはそう言うけど、あたしはなんか腑に落ちなくて。

だって、絶対おかしいもの。

見かけはともかく、イマドって中身は思いつきり食えないヤツ。

あの好青年ぶりに騙されたら最後、ヒドイめに会うの間違いなし
なもの。

「あいつがあんなにあっさり引き下がるなんて、絶対裏になんかあ
りそうじゃない？」

「そう言われると、そんな気もするけどね。

でもあいつだって、ルーフェアを巻き込みたくはないと思うよ」
「それもどうかなあ……？」

確かにイマドは巻きこみたくないだろうけど、なにセルフィーアだもん。

あれで案外あの子、強情だったりするし。なんかいろいろ、ワケわかんない関係者いるらしいし。

あの子のこと、あたしたちいまでも、あんまりよく知らない。でもアヴァンへ任務で行った時も、山ほどドレス用意したり、ともかく半端じゃないのよね。

「まあどうだっていいさ。ここでやめるわけにはいかないんだ」
「そうだね」

伝言には詳しいことは書いてなかったんだけど、来てみてわかったの。

あたしたちも知ってるチームの小さい子、殺されちゃってた。

許せないな！

殺ったのがどこかはわかってた。

こことテリトリーが重なるチーム。

それで今度祭り　　ようは戦争のことなんだけど　　するのに手不足で、あたしたちまで呼ばれたのよね。

「けどさあ、久しぶりだよね」

「ああ。ちよつとワクワクするかな？」

学院ってば傭兵学校だけど、けっこう大人しいの。

そりゃもちろん普段の実地訓練なんかは厳しいけど、こんな風に血みどろになったりはしないもん。

「明日でいいんでしょう？」

「明日のちようどお昼だね」

見ると部屋の中、みんな思い思いに武器の手入れとかしてるし。昔とかわんない光景に、ちょっとほっとしたりして。そうしてあたし、思いついたの。

「ねえ、シーモア、街へ出ようよ！」

「街へ？」

「うん。せつかくだもん、ちょっとお金稼いでさ、今晚くらいみんなであつとやらない？」

あたしがそう言つと、シーモアも乗ってきて。

「いいね、それ。んじゃ行こうか……つてあんた、腕なまってんじやないかい？」

なにせ学院行つてからは、掏る機会もなかったろ？」

「だいじょうぶ、ちゃんと訓練はしてたの。それに今つて記念日前でしょ？ みんな気が緩んでるし。」

あと内緒だけどね 時々やってた」

学院に知れたらおおごとだけど。でもちゃんと、全部返してる。

「よし、あんたがそういうならだいじょぶだろうしね。久しぶりにやるか」

「うん。」

そうそう、ついでにルーフェイアたちがどうしたか、探つてこようよ。それと連中のこともいっしょに」

「そうだね」

これで話しはキマリ。

リーダーのガルシィに断つてあたしたち、久しぶりに街へと出だしたの。

Episode : 40 団欒

R u f e i r

向こうの部屋から、縫製機の音が聞こえる。

なんでもここのおばさんとお姉さんが2人がかりで服を縫って、そのお金で家族みんなが暮らしているんだそうだ。

けど多分……それでも楽しやないんだろう。狭い家と質素な室内を見れば、おおよそのことはわかる。

ただおばさんは、とてもいい人だった。

あたしがあれほどのことをしたっていうのに、親切に家へあげてくれて、昼食までご馳走してくれたのだから。

でも昼食そのものは、いつのまにかイマドが作ったらしい。

イマドって、どうしてこうそつがないんだろう？

彼は誰とでも上手にやれる。

今ももう、おばさんやこのお姉さんの信頼を勝ち取ってしまったようだった。

「ホント、すまないね、洗い物までしてもらっちゃって。

けどなんだってあんたたち、ここへ来たんだい？」

一段落してその辺に座っているイマドに、ジャスおばさんが尋ねる。

ちらつとこつちを見た彼に、あたしはうなずいた。こういう込み入った話は、イマドのほうがずっと上手い。

「さつきもウインがちょっと言ってましたけど、友達追っかけてきたんですよ」

「俺は取材中に、この子たちと一緒にになったもんですから」

イマドに次いで答えたゼロールさんの言葉に、おばさんの顔が陰しくなった。

「取材ならお断りだよ」

「いや、俺が用事なのは、この子たちですから。用が済んだら帰りますよ」

「そうかい、それならいいけどね……」

おばさんが納得（？）する。

ゼロールさんがなにも聞こうとしなかったから、信用したのかも知らない。

「ともかくあんた、ヘンなマネはするんじゃないよ。

で、お嬢ちゃんたち、友達ってのは誰なんだい？」

一瞬イマドが黙った。どう言えばいちばんいいのか、考えているんだらう。

「ここじゃ有名かもしれませんね。

まあ友達です。ただ今度祭りがどうとかってここへ戻ったもんだから、さすがに心配で」

何か意図があるんだらう、シーモアたちの名前は出さない。

ただ、それだけでおばさんは、およその事はわかったみたいだった。

「祭りって……そうか、そういうことなのかい。それにしても驚いたね、あいつらに絡もうなんて」

「ほんと、それ命知らずって言うよ」

お姉さんまでがそう言う。

「でも、友達だから……」

気が付いた時にはあたし、もうそう言っていた。

危険なのは、さすがのあたしでも分かる。けどだからこそ、放つてなんかおけなかった。

こらえようと思ったけれどやっぱりだめで、また涙があふれてくる。

「大事な、友達なんです……」

しん、と部屋が静まり返った。小さな子供たちまでが口をつぐむ。

「世の中、まだあんたみたいな子もいるんだねえ」

おばさんの大きな手が、あたしの頭を撫でた。

「ほら、そんなに泣くんじゃないよ。」

それとその話だったらね、あたしも心当たりがある。夜まで待てるかい？」

「え？ あ、はい……」

別になにか予定があるわけじゃない。

いちおうイマドの方を見たけれど、彼も別に止めない。

あたしはうなずいた。

Episode : 41

「そうかい。じゃあ夜まで待ってもらうよ。ただ、狭いのはガマンしとくれ」

「すみません。ありがとうございます」

結局この家に、しばらくいさせてもらうことにする。

「そうそう、それとあたしはお陰で一通り仕事が片付いたんでね、ちよつと納めてくるよ。」

何かわかんなかったら、オリアにでも訊いとくれ」

「あ、はい」

おばさんが箱を抱えて出ていく。

イマドはもうすっかり台所を占拠していて、居間と向こうとを、行ったり来たりしていた。どうも特技を生かして、今度は夕食に取りかかってるらしい。

ウインはウインで、たちまちこの家の子たちと仲良くなって、一緒に遊んでいる。

ただあたしのほうは、居場所がなかった。

イマドのように家事ができるわけでもないし、もちろんおばさんたちの仕事も手伝えない。

あたしって、ダメだな。

落ちこみながら、丁寧に繕ってあるソファの隅に座りこむ。

けど、この家の人たちを見ているのは楽しかった。

狭い部屋にひしめく子供たちが、喧嘩をしたり笑い転げたりしている。

羨ましかった。

あたしは一人っ子で、あとは年の離れた従兄妹しかいない。その上戦場で育ってしまったから、こんな経験はしたことがなかった。と、隣にゼロールさんが来た。

「あんたの連れ、変わってるな。またメシ作ってる」

「イマド、家事が上手ですから」

「なんだそりゃ？」

なんだって言われても……。

上手く答えられなくて、あたしは黙ってしまった。会話が続かない。

どうしよう。

なにか話さなければいけない気がして、必死に話題を探す。そして、思い出した。

「ゼロールさん、さっき確か……話があるって、仰ってませんでしたか？」

「ん？ あ、あの話か」

あたしに言われて初めて、ゼロールさんは思い出したみたいだった。

「よろしければ、教えてもらえませんか？」

「ああ。さて、どこから話すかな……」

快くゼロールさんが、承諾してくれる。

「明日ここの連中が言う『祭り』　つまりは抗争なんだが、それがあるのは知ってるだろう？」

「はい」

知らないわけがなかった。

それがあるからこそ、シーモアたちもあたしたちも、ここへ来たのだから。

「俺はずっと、このスラムを取材してるんだ。なにせ同じシティに住んでながら、スラムの外の人間は、ここをないものとして扱ってるからね」

「そうなんですか……？」

あたしはベルデナードには、時々ホテルを使って滞在した程度だから、そのあたりの事情は全く知らなかった。

「自分の汚いところを見せつけられるみたいで、嫌なんだろうな。ともかく俺は、そんなのがまた嫌で、何年もここを取材してるんだ」

そのせいで、所属していた新聞社を辞めさせられて、今はフリーなんだという。

「だからこの抗争の話も、わりと早くから耳にはしてたんだよ。で、すぐに聞き込んだりしてみてね」

そこでゼロールさんは一回言葉を切った。

「そうしてるうちに、妙な話が聞こえてきたんだ」

「妙な話、ですか……？」

わざわざこう言うからには、よほどなんだろうけど、見当がつかない。

Episode : 42

「その、どんな……？」

「双方のチームの子供がそれぞれ殺されてるんだが、それをやったのが中年の男性だって話でね。

でもどっちのチームにも、せいぜい20歳前後までしかいないんだよ」

「え？」

どちらのチームにも該当者がいないのなら、その中年男性は、全く関係ない人ということになる。

「それじゃ、さっき聞いた『縄張り争いの腹いせ』っていうのは……？」

「まあシマ争い自体はあったんだろうけどね。

ただ子供が あ、すまない」

話の途中でゼロールさんが立ち上がって、ここの家の子に席を譲った。

「お姉ちゃんも、ちょっといい？」

「ごめんね」

慌ててあたしもソファから立ち上がる。

どいた後へはこの子たち あたしより年上の人もいる が
数人、教科書とノートを広げて座りこんで、話が打ち切りになった。

「宿題……？」

「ああ」

後ろから見みると、歴史だった。

あ、この問題。

シユマーの人間が絡んだ戦争だから、かなり詳しく聞かされるところだ。

けどあたしよりは2つくらい上の男の子は、歴史が苦手みたいで考えこんでいる。

「そうだ、おじさん教えてくれよ」

「へ？ 俺？

ダメっ、俺はダメ！ 勉強は苦手だ！」

ゼロールさんはそう言いながら、台所へ逃げて行ってしまった。

「ちえっ、頼りないおっさんだな。しゃあねえ、適当に書いとくか」
舌打ちしながらこの人が、ペンを握りなおす。

けどこれじゃ、ぜんぜん違う答え……。

差し出がましいとは思ったけれど、横から話しかける。

「あの……この年代はこの事件があったから、これに繋がる話を選べば……」

「え？ あ、そうか。

けど待てよ、お前、俺より年下だよな？」

「あ、はい。たぶん……」

多分というか、間違いなくあたしのほうが年下だろう。

「それでもう、こんなの分かるのか」

「いえ、行ってる学校がペース早くて……だから……」

まさか家が傭兵集団だから歴史に詳しいとは言えなくて、そう言い訳する。

ただこの言い訳も嘘じゃなかった。

学院は英才教育で知られている。当然学科の進度も早くて、あた

私たちの学年でも一般校に比べて2年は進んでいた。

「ふうん。凄いところあるんだな。」

そしたらこっちは分かるか？」

「すみません、数学はちよつと……」

数学は授業についていくだけで精一杯で、その先まではとても分からない。

「そっか、お前も苦手なんだ。んじゃ頑張って解くしかねえな。」

ってお前、名前は？」

「え、あ！ すみません、家へ上がらせていただいてるのに、名乗ってもいなくて」

成り行き任せの済し崩しで、自己紹介さえしていないのを思い出す。

Episode : 43

「えっと……ルーフェイア「グレイスです。それといま……向こうで料理してるのが、イマドです」

「へえ、ルーフェイアか。なんかいい名前じゃん。

俺はベック。それからカーツにエバンにシヨーンにドレアにマリ、あとあっちの赤ん坊がアニタで、向こうの姉貴が……」

一瞬で混乱する。

「ごめんなさい、もう1回……」

そうは言っただけけど、もう1回訊いても覚えられる自信はなかった。

「あ、わりいわりい。覚えられるわきゃねえよな。とりあえず俺がベックな」

「あたしシヨーン！

おねえちゃん、こっちも教えて！」

綺麗な亜麻色の髪をした女の子が、勢い良く声を上げる。

「算数？ ちょっと自信ないけど……」

けど幸い問題を見ると、教えて上げられそうだった。

「これは、ここをこうすれば……」

「そっかぁ。おねえちゃんすごい」

「そんなこと、ないわ。習ったところだもの」

そうしているうちに、次々と声がかかる。

「ねえねえ、こっちも教えて！」

「これ？ これは……こういう風に線を引けばわかるでしょ？」

「僕も教えて〜！」

「ごめんね、ちょっと待って」

声をかけられるのは嬉しいけれど、そんなに一度には見られない。

「順番にみてあげるから……」

どう説明したらいいか考えながら、ひとつひとつ宿題に付き合った。

自分に兄弟がないせい、こんな風にまとわりつかれるのが、とても楽しい。

「なんだ、ずいぶん馴染んだじゃねえか」

一段落したのか、イマドとゼロールさんが戻ってきた。

「もう、終わったの？」

「ああ、下ごしらえは終わったかな。あとは直前で間に合うし。

お、懐かしい問題やつてるじゃねえか」

イマドも一緒に宿題を見始めた。苦手な理系を任せられるから、これだとずいぶん楽だ。

ちなみにゼロールさんは、今度は仕事部屋へ逃げて行ってしまった。

「やたつ、今日は早く終わった！ お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがと！」

「あたしもおわり どうもありがと」

「どういたしまして」

いちどに倍の人数が見られるようになったおかげで、ほどなくみんなの宿題が片付き始める。

「今日はかあちゃんに怒られなくて済みそうだぜ」

「何が怒られないんだい？」

できあがった仕事を納めに行っていたおばさんも、戻ってきた。

「おかえりなさい」

「あ、おかえりっ！」

かあちゃん、宿題終わったから遊んでいいだろ！」

「ホントかい？」

半信半疑のおばさんに、ベックさんに続いて、小さい子たちもノットを見せた。

Episode : 44

「ホントだよ、ほら！ このおねえちゃんが、教えてくれたんだ」
「俺も終わった」

「へえ、驚いたね。ちゃんとやってあるじゃないか。このお嬢ちゃんに、しっかりお礼言ったかい？」

「うん！」

あたしが見たことのない、家族のやり取り。

「そうかい、じゃあ夕ご飯にしようか。すぐ作るからちよっと待って……」

「あ、オイラ帰る」

急にウインが立ち上がった。

「どうしたの？」

「だってオイラ、つい長居しちゃってさ。みんな呆れかえってると思うし」

「あ……」

確かにウインは、あたしたちをスラムの外へ送るために、ついてきただけだ。なのにこんな時間に時間がかかってたら、普通は心配するだろう。

「ねえ、ひとりで大丈夫？ もう暗くなって……」

「平気平気。だいいちオイラ、ここ育ちだぜ？」

おばちゃん、サンキュ。ねえちゃん、にいちゃん、またな！」

弾けるようにウインが出て行った。

その後ろ姿に、イマドが苦笑する。

「あのバカ、もう出来てんだから、食ってきやいいのによ」

「出来てってあんた　夕食までやってくれたのかい？」

今度はおばさんが呆れ顔になった。

「すいません。つい」

「いや、それはいいんだけどさ……大変だったろう？」

「そうでもないです。けっこう寮なんかで、みんなに作らされてますから」

思わず可笑しくなる。

イマドが料理上手なのは、学院では有名だ。何かあるたびに食事は彼が作らされているし、それ以外にも、よくあたしに作ってくれる。

「あんた、いい嫁さんに……あ、いや、そうじゃないか。

ともかくもうひとり帰ってくるから、そうしたらありがたく、夕飯いただきかね」

「もうひとり……ご主人ですか？」

そう言うとおばさんが、手をひらひら振って笑った。

「ダンナなんてちゃんとしたもの、いるわけないだろ。いちばん上の子だよ。いつもは家に寄り付かないのに、今夜は帰るって連絡があってね。

ほら、噂をすればだ」

言っているうちにドアが開いて、20歳くらいの男の人が入ってきた。

身長はタシユア先輩と同じかそれ以上で、身体つきはもつとがっしりしている。髪は栗色で、瞳は青灰色。ただ肌は、ずいぶん日に

焼けていた。

「なんだ、お客がいるのか」
瞬間はつとする。

この人、並じゃない。

ちよつと見ただけじゃ分からないけれど、視線の配りかたや動きかたが、普通じゃなかった。

これは……いつも人を殺している人間の動きだ。

（イマド……）

隣にいたイマドに思わず囁く。

（心配すんな。最初っから、俺の目当てはこいつだ）
例によつてなにもかも見透かしてるらしい彼が、やっぱり囁き声で返してきた。

ただそうは言われても、落着かない。なにしろこれだけの人だ。きつとすぐ、あたしたちの素性に気がつくだろう。

「ずいぶん可愛い子だな。誰の友達」
思ったとおり、言葉の途中でこの人が、あたしの太刀に目を留めた。

瞬間、ナイフが抜かれて殺気がほとばしる。
あたしも思わず身構えた。

Episode : 45

「お前ら、連中の回しモンかつ！ 人んちあがりこみやがって、ぶつ殺してやるぜ」

室内に緊張が走る。

けどどうかなるより早く、おばさんが怒鳴りつけた。

「こらっ、帰ってくるなり何考えてんだい！ この家のなかで、そんな騒ぎは許さないよ！」

言いながらおばさん、容赦なく男の人の頭を殴る。

「つてえなあ！ けどそう言うけどお袋、もしこいつが連中の殺し屋だったら、どうするんだ」

「んなわけないだろ。もしこの子たちがその気なら、とつくに殺されてるさ」

信じられない言葉が飛び交う親子喧嘩に、呆然とするしかなかった。

「ごめんね。うちのアニキ、ちょっとイカれちゃってさ」

あたしのように気付いたのか、オリアというお姉さんが話しかけてくる。

「グループのアタマって気取ってるけど、ようは悪さばかり。

こっちは迷惑でしょうがないよ」

何も返せなかった。

兄弟や家族っていうのは、もっと違うものだと思ってたのに……。

「ほらアニキ、いい加減にしなよ。この子がびっくりしてるじゃないのさ」

「オリア、お前まで甘つちよろいこと……」

「なに言っただよ、どうかしてるのはアニキだろ。この子に手を出したら、俺だって黙っちゃいけないからな」

「ベック、さては惚れたか？」

計10人もの家族　赤ちゃんまでが泣き出してしまった　が
騒ぎ始めて、なにがなんだか分からなくなってくる。

「イマド、どうしよう……」

「ほっとけよ。そのうちどうにかなるって
相変わらずイマドはマイペースだ。

「なんだ、ずいぶん騒がしくなったな」

奥の部屋からひよこつと、ゼロールさんが顔を出す。

「あの、ゼロールさん、止めてください！」

「放っておけば、そのうち止まるんじゃないか？」

「……………」

イマドとまるつきり同じことを言う。

でも2人の言葉通り、数分もしないうちに、丸く？収まったよう
だった。

「分かったね。あんたがバカやってほつつきあるってる間に、この
子が借金立て替えてくれたんだ。

「ちゃんとお礼でも言いな！」

おばさんが一喝する。

「そりゃどうも。

けどホントに、連中の回しモンじゃねえんだな」

「ダチですけどね」

お兄さんの言葉に、さらりとイマドが答える。

「　ダチ？　誰のだ」

「それは言えません。言ったらそいつら、どうなるか分かりませんから」

また雰囲気が険悪になる。

「そんなに信用できねえんなら、さっさと出てったらどうだ」

「はいはい、そこまで」

どうしたらいいか困っていると、ゼロールさんがのんびりした調子で、間に入ってくれた。

「ダグくん、そんなじゃ女の子にモテないぞ」

「るせえな！」

「って、なんであんたまでいるんだ！」

「どうやらゼロールさん、この男の人と顔見知りだったらしい。」

Episode : 46

「いやまさか、ここが君の自宅とはね。

知らずにあがらせてもらったけど、おかげで事態が変えられそうだよ」

「あんたと話すことなんざねえっ！」

なにがどうなってるんだろう？

イマドもゼロールさんも、何か考えがあるらしいけど、それが何なのかがまったく分からない。そもそも、こんな騒ぎになってしまった原因さえ、分からないくらいだ。

かといってこんなに取りこんでたら、聞こうにも聞けないし……。

「なに考えこんでんの？」

「あ、オリアさん」

またお姉さんが気が付いて、声をかけてくれた。

「その、どうしてみんなが騒いでるか、分からなくて……」

「へ？」

お姉さんがおかしな声を出す。

「あんたさ、なんにも知らなかったの？」

まさか、兄貴が誰かもしらないとか？」

「はい」

オリアさんが頭をかかえた。

どうもあたし、またおかしなことを言ったらしい。

「あの、大丈夫ですか？」

「あ、うん、大丈夫大丈夫。」

兄貴兄貴、ストップ。この子ね、兄貴が誰か知らないんだって「は？」

こんどはお兄さんが、おかしな声を出して動かなくなった。

「マジかよ」

「マジらしいよ」

そのまま沈黙が降りる。

少しあつて、お兄さんがやっと口を開いた。

「ホントに知らないんだな？」

「あの……記憶違いじゃなければ、お名前もつかがってないんですけど……」

再び沈黙が降りる。

おばさんがひとり爆笑した。

「ほらみる、だから言っただろう？ この子はそんな悪い子じゃないよ」

「みてえだな」

頭をかきながら、お兄さんも座りこむ。

「まあなんだ、その……ようは俺は、殺し専門のチームのトップなんだ」

「そうなんですか」

よくわからないけれど、トップと言うことは……。

「偉いんですね」

「おい、それは違うだろ……」

「そうなの？」

なにかのグループとかのトップっていうのは、偉くないんだろ
うか？

首をかしげていると、ゼロールさんが真ん中へ出てきた。

「ようするに、ここにいる彼が、祭りの片方のトップなんだよ」

「じゃあ、シーモアたちが戦おうとしてる……相手、なんですか？」
「そういうこと」

この言葉にやつと納得する。

抗争を控えたチームのトップなら、自分だけじゃなくて、家族まで巻き込まれる可能性がある。

だから見知らぬあたしたちがあがりこんでるのを見て、とっさにあんなことになってしまったんだろう。

「すみません。そんなこと知らずに、上がりこんだりして……すぐ
帰りますから」

「え？ あ、いや、もう今更だからかまわねえよ。

ほら、座んな」

帰りかけたあたしを、お兄さんが引き止めてくれた。

Episode : 47

「すみません……」

「気にすんなって。こつちも濡れ衣着せたしな」

「あ！」

お兄さんが言った『濡れ衣』で思い出す。

「ゼロールさん、さっきの話……」

「ああ、そうだったな」

そつえば、と言う調子でゼロールさんが顔をあげた。

まさかとは思うけど、忘れてたんだろっか？

「ダグくん、これは何度か君のところを訪ねたのと、関係あるんだが……」

一瞬覚えてないんじゃないかと不安になったけど、ゼロールさんは無事話し出す。

「どうも今回の子供殺しの件、裏がありそうな気がするんだ」

「ハッ。言つに事欠いてそれとはな。」

ウラもなにも、あいつの傍には連中が使つてるナイフが落ちてた。それに見てたやつだっているんだぜ？」

「その目撃者が誰かは知らないが……本当に見たのかい？」

ゼロールさんの言葉に、思わずイマドと顔を見合わせる。

「……どういう意味だよ」

ダグさんも同じことを思ったみたいで、鋭い声で訊き返した。

「例えば、なんだがね。」

その目撃者が、嘘を言つてたとしたら？」

「嘘……？」

みんなの困惑を無視して、ゼロールさんが続ける。

「たまたま現場近くで寝てたっていう、ホームレスから俺が聞き出したのじゃ、君のところの子供を殺したのは、中年の男なんだそうだ。」

ただ報復が怖くて、人には言えなかった　そう言っただよ」

「信じらんねえな」

ダグさんが一蹴した。

確かに「聞いた」という以外に、なんの証拠も無いから、そう言われても仕方がないだろう。

けど、いったいどれが本当なんだろう？

シーモアたちは、『縄張り争いの腹いせに殺された』と言っただけで疑われてるダグさんの方も、誰か子供が殺されてるらしい。そして、シーモアたちの仲間がやったと思っている。

しかもゼロールさんは、ぜんぜん関係ない第三者がやったと言っ
ていて……。

ここまで状況が揃うと、なんとなくゼロールさんの話が正しそうだ。けどそうすると今度は、「どうして」というのが分からなくなる。

「すみません、ヘンなこと聞きますけど……今まで何人殺されたんです？」

やっぱり腑に落ちないような顔をしながら、イマドが訊いた。

「人数か？」

幸いひとりだけだ。たまたま、ひとりで出てったところ……」

「あっ！」

はっとして大きな声をあげてしまったあたしに、みんなの視線が集まる。

「どうした？」

そうか、まずいな。行くぞ！」

それ以上あたしが言わないうちに、意味を悟ったイマドが、武器を手に立ち上がった。

Episode : 48

「おい、いったいなんなんだ？」

「ウインです。」

ダグさんと入れ違いに帰ったんですけど、向こうのチームの子で、ひとりで帰って……」

要領を得ない説明だったけれど、ダグさんもゼロールさんも、これだけで意味は察してくれた。

「そうか、あの子がチームの子なのは知られてる。もしかしたら、狙われるかもしれない。」

ダグくん、スラムを案内してくれないか？」

「冗談言つな。向こうのガキがどうなろうと、俺の知ったこっちゃねえ」

「報酬を出してもいい。ともかく頼む！」

ゼロールさんが食い下がったけれど、お兄さんは知らん顔だった。

「俺は金で買われるほど、安かねえよ」

どうしよう。

ここに住んでいないあたしただけじゃ、どの道がどこへつながつているかもよく分からない。

けど、早くしないと……」

「おい、ルーフェイア、いいから行くぞ！」

「でも！」

と、おばさんが動いた。

いきなりごちつと音がするほどの勢いで、またお兄さんの頭を殴りつける。

「このバカつたれ！　ちゃっちゃと行ってあの子助けといで！！」
「けどよ、お袋……」

「けどもくそもあるかい！　あたしゃんな子に育てた覚えはないよ。
ここで行かないってんだったら、さっさとこの家も出ていきなっ
！」

すごい剣幕で叱りつける。

これにはお兄さんも、逆らえないみたいだった。

「ちっ、わかったよ」

ダグさんと、ゼロールさんも立ち上がる。

あたしもすぐ後ろについた。

「いいかい、ダグ。手抜いたらタメシ抜きだかんね！」

「でもルーちゃんたちのご飯は、とつとくからね」

声援（？）が後ろから聞こえる。

「どんくらい前の話だ？」

「ほんとにダグさんが、帰ってくる直前で……」

アパートの階段を降りながら答えた。

「真っ直ぐ帰ってればともかく、寄り道でもしてたらやばいぞ」

「ともかく、探さない！」

「つても、どこを探せばいいんだ？」

ゼロールさんが考え込む。

「ダグさん、分かりませんか？」

「ムチャ言っな。よそのガキがどこ歩くかなんぞ、天気予報より難
しいぜ」

「そうですけど……」

でも早くしないと、何が起こるか分からない。

その時、なぜかやり取りに加わってなかったイマドが、悔しそうに言った。

「ちきしょう、居場所はわかったけど場所がわかんねえ！」

「イマド？」

どこかあたしたちとは違う彼は、ウインのいる場所がわかってるみたいだった。

Episode : 49

「分かったの？」

「それがわかんねえんだって！ なにせこの辺知らねえから、どっちの方角も見当つかねえんだよ！」

「え？」

この言い方……。

急いで記憶を探って思い出す。

そう、確か母さんが時々、こういう言い方をしてて……。

「ねえ、何か目印になりそうなもの、ない？」

よくこうして地図とつき合わせて、位置を割り出していたはずだ。

「目印？ そう言われても……待てよ、ジャンク屋があるな。掘って立て小屋みてえので、裏手にジャンク品が山積みになって……」

「そりゃダルんとこだ。そのガキ、やっぱ寄り道しやがったな。」

ついて来い、こっちに抜け道がある」

急に右に折れたダグさんに続いて、慌ててみんなで進路変更する。

「あそこから連中のアジトまでは、使う道はひとつだ。これ以上は道草もしねえだろうし、間違いなくどっかで捕まえられるぞ」

場所さえ分かかってしまえばあとはダグさんの独壇場で、細い抜け道を迷うことなく選んで行く。

「あつ、ごめんね！」

転がされているごみバケツを飛び越えようとして、餌を探していた野良犬を蹴飛ばしかけた。

「お前、イヌに謝るなよ」

「でも、邪魔しちゃったもの……」

それ以外にもいろいろ障害物があつたり塀の隙間を抜けたり、拳
句に右左と折れていくから、学院のランニングよりよっぽどハード
だ。

「ここ曲がりや、あとはいっぽんだ」

先頭のダグさんがそう言って、スピードを上げる。

けどそれを上回ってスピードを上げたのがイマドだ。

「いたぞ！」

「ほんとに?!」

あたしも並んでスピードを上げる。

「おい、いくらなんでも……」

後ろからゼロールさんが何か言っているのが聞こえたけど、気に
してる暇がなかった。

「そこを道なりに右だ！」

「うん」

これなら何かある前に、ウインのところへ着けるだろう。
そう思った矢先だった。

殺気！

ごく微かだけど、感じる。

「イマド、ごめんね、先に行くわ！」

「なっ……!!」

呆れるイマドの前で、あたしは自分に防御魔法と、高速魔法をか
けた。

もう一段スピードが上がる。

角を曲がると、ウインの後姿が見えた。

だけど同時に、殺気がふくれあがる。

Episode : 50

ふわりと通りの右から出てきた男が、隠すようにして短剣を構えているのが、なぜか分かった。

魔法でどうにかしたいけれど、それが出来ない。通常魔法は指向性がないから、これだけ2人の距離が近いと、間違いなくウインまで巻き添えになってしまう。

男が動く。

短剣が振り上げられた。

「ウインっ！」

とっさに突っ込んで、男に体当たりする。

「痛つてえ！」

切っ先がウインの腕をかすめたけれど、それだけで済んだ。けど別の男が出てきて、またウインへと刃を向ける。

「ウイン、動けるんなら逃げてっ！」

振り下ろされる剣を、鞘にはいったままの太刀で受けとめて、牽制に軽く炎魔法を放った。

顔面に熱を受けて男が怯む。

「ね、ねえちゃん?!」

いけない!

ウインの後ろに、もうひとり。

やむを得ず、小太刀のほうを抜いて投げつける。刃が宙を飛んで、狙いたがわずその男の首に突き立った。

この隙にあの子が上手く逃げてくれれば……。

「ウインっ、早くっ！」

だけどウインはすくんでしまったのか逃げようとせず、最初に体当たりして体勢を崩させた男が、またこの子を狙う。

しかもあたしの後ろから、別の男が切りかかってきた。

「命の穂刈りし乙女たちよ、その者に安らかなる慈悲を乞う　グ
リム・エンブレイスっ！」

あたしへ来た男には呪文を唱えておいて　抵抗しきつたにしても、すこしは時間が稼げる　ウインのほうへ向かう。

「ウインっ!!！」

「うわぁっ!!！」

ようやく事態に気が付いて、逃げようとしたこの子の肩が、ざくりと切れた。

倒れたウインにとどめを刺そうと、男が短剣を翳す。

させないっ！

大きく踏みこみながら、男の腕めがけて太刀を振り上げる。
でも刃が達する前に、男がくずおれた。男が持っていた短剣が石畳に落ちて、乾いた音を立てる。

背に、ナイフが突き立っていた。

残る男たちも、ひとり死の呪文で、もうひとはあたしの小太刀で絶命している。

あたし、また……。

「ルーフェイアっ!!！」

そこへやっと　と言っても最初から数えてもほんのわずかいマドが来る。

「大丈夫か？」

「うん。片付いたわ。」

ウィン、大丈夫？」

たぶんさほどではないと思うけれど、心配だった。

「ちきしょく、いてえ……」

痛がるウィンに急いで駆け寄って、傷を診る。

よかった。

逃げようとしていて、まともに切られなかったのがよかったのか、命に関わるような傷じゃない。

Episode : 51

「ちょっと動かないでね」

回復魔法を唱えると、流れていた血が止まった。

ついでに持ち合わせの痛み止めを打ってあげて、応急手当の代わりにする。

「あとは魔法で治すより、病院へ行つたほうが……」

魔法は便利だけど、本来の治療能力を強引に高めているに過ぎない。戦場のような緊急事態ならともかく、普段はなるべく使わないほうが良かった。

「俺、もうダメ、息、あがつた」

ダグさんにさらに遅れて、ゼロールさんがここへ来る。

「あの、おふたりとも、大丈夫ですか？」

「あんにそう訊かれちゃ、かたなしだよな……」

ダグさんが苦笑いした。

「にしてもこのナイフ、誰が投げたんだ？」

向こうではイマドが、倒れた男の人の背を見て、不思議がっている。

「かなりのウデだぜ、これ投げたの」

「そうだね」

ウインをゼロールさんに預けて、あたしも見てみた。

投擲専用の物が、正確に背中から心臓を突き刺して、男は即死だ。

でも、このナイフ……？

精緻な彫刻が刃の付け根に施されているけど、それに見覚えがあ

る。もし、記憶違いじゃなければ……。

「私だ」

路地の奥から声がした。

予想どおり、聞き覚えがある声だ。

「父さん？」

そう呼ぶと、見慣れた姿が現れた。

「え、ディアスさん?!」

「誰かと思えばディアスじゃないか」

「あ、ルーフェイアの親父さん」

他の3人からも一斉に声が上がって、思わずあたしたちは顔を見合わせた。

「その、父さんをご存知なんですか？」

「お前の親父、顔広いな」

「父さんって……まさか娘さん?!」

「お前、娘がいたのか。けど確かに似てるな」

嘘みたいだけど、みんな父さんと面識があつたみたいだ。

「娘のお前が知らねえわけねえけど、ダグさんとゼロールさんは、なんで知ってんです？」

イマドが訊く。

「俺は戦場で。もう10年以上も前に、俺が取材で同行したとき、その部隊に彼がいてね。」

で、なんとなく気が合って、そのまま今まで付き合ってるんだ」
ウインを抱いたままゼロールさんが、そう答えた。見かけによらずこの人、すごい場所まで取材しているらしい。

「なる……。んじゃダグさんは？」

「俺らのチームの大先輩だよ、ディアスさんは」

「え……？」

初耳だった。

けどチームの先輩って言うことは……。

「父さん、このスラムの出身だったの？」

びっくりして尋ねると、父さんがすました顔でうなずく。

「それより、医者だろう」

「え？ あ、うん」

痛み止めのせいで、ウィンが痛がらないからうつかりしていたけれど、早く診てもらうにこしたことはない。

「えっと、ここからいちばん近い病院って……？」

「俺が連れて行こう。スタッフにも知り合いが多いから、何かと便利だろうし」

悩んでいると、ゼロールさんが引き受けてくれた。

「2丁目の病院に行くから、この子の仲間にそう言ってやってくれ」

「はい、分かりました」

ウインを今度は背負って、ゼロールさんが宵闇に消えた。

Episode:52

「こいつら調べりゃ、どこの誰が襲ったか分かりそうだな」

相変わらず死体を覗きこみながら、イマドが面白そうに言う。

「生きてりゃもうちよつと、楽に分かんだけどな。けどまあ、死体でも少しは……」

「イマド、下がって!」

嫌な気配を感じて、あたしは叫んだ。

同時にイマドに、防御魔法をかける。

「へ？」

「つとやべえ!」

割合近くに倒れていた2つの遺体と、その周囲がいきなり燃え上がる。

かなりの高熱だ。

でも下がるのが早かったのと、魔法が間に合ったので、イマドにはケガがなくて済んだ。

「つたく危ねえなあ。どういう仕掛けだよ!」

炎が収まるのを待って、もう一度近づいた彼が毒づく。

「たぶん……誰か他に、仲間がいたんだと思う」

あるいは、監視役か。

「そうなのかい？」

にしても、一発でこの有様とは……やっぱり魔法かなにかか？」

「はい」

不思議そうなゼロールさんに答える。取材には慣れてても、戦闘

は本業じゃないから、よく分からないんだろう。

「炎系魔法の、上位だと思います。最上位だと、もうちょっと効果範囲が広いので。」

両方の遺体の内よりに1回づつと、中央狙って1回の合計3回で

「

解説、またあとでな」

イマドに遮られる。

「あ、ごめん……」

どうもあたし、ことが魔法となると、いろいろ言ってしまうみたいだ。

「これで手がかりは無しか」

やっぱり遺体をみてた父さんが、ぼそつとつぶやいた。
なにしろ着ていたものさえ、もう分からない。

「どっちにしてもシーモアたちに知らせねえと。それにこれ、もしかするとダグさんのチームと……あと家族もヤバいんじゃない？」

「あつ……！」

イマドが何気なく言った言葉に、思わずあたしは声をあげた。

「やべえ、早く仲間集めて……お袋たちも移動させないと……」

ダグさんも心なしに青ざめる。

「俺が家のほう、行きましようか？ で、ダグさんが仲間集めれば早いですよ。」

ルーフェイア、お前シーモアたちとこ知らせて来い」

「あ、うん。そしたら、行ってくるね」

あたしは太刀を持ちなおして走り出して 父さんに襟首を掴まれた。

「父さん、放して……」

これじゃまるで子猫だ。

けど放してもらえず、結局そのまま引き止められる。

「ダグ、仲間を集める。イマド、この子と一緒に行ってくれ」

「あ、わかりました。でもそうすると、俺の家族は？」

ダグさんが心配そうな表情を見せる。

「俺が行く」

同時にいきなり襟首を放されて、あやうく前へ転びかけた。

「父さん、ひどい……」

なのに抗議して振り向いた時には、もう父さんは背中を向けて歩き出した後だ。

「お前んち、お袋さんめちゃくちゃだけど、親父さんも相当だな」

「それ、言わないで……」

呆れるイマドに返す言葉がない。

「まあいいや、とにかく行こうぜ。ダグさん、それじゃまた後で」

「ああ。」

そうだ、集合場所はレニーサさんの店にしてくれ。場所は町の誰かに聞けば分かる」

「了解です」

答えて、あたしたちは左右に別れた。

Episode : 53

Caleana

「どこいっちゃったのかしらねえ？」

久々のスラム。時は夕暮れ過ぎ。

もうそろそろ、その辺の家じゃ夕食の時間かしら？

けどここ……。

迷うって言うほどには変わっちゃないけど、やっぱりどつか馴染まないのよね。だいいちあたし、ディアスと違ってこの育ちじゃないし。

それになにより独りだと、ちっとも進めないのが困りもの。

「よお、何か探しもんかい」

ずっとこの調子なのねえ。

「人を探してるのよ。金髪で太刀持った美少女、見なかったかしら？
じゃなきゃバスタードソード持った、淡い金髪の美丈夫でもいいわ」

「どっちも見なかったなあ。」

けどよ、金髪で太刀持った美女ならみたぜ」

あら。

この男、ちよつとは頭が回る？

「ふうん、どこで？」

おもしろそうだから乗ってみる。

「そりゃ決まってるだろう。ここです」

わかりきった答えだけど、まあ合格かしら？

さて、次はどう来るかしらねえ

「とりあえずその辺入らねえか？　今夜は冷えそうだしな」

「そおねえ、どうしようかしら？」

ちよつと迷ったフリして、からかつてみたりして。

「いいじゃねえか。その尋ね人は、うちの連中にでも探させっからさ」

「あら、あなた偉いのね？」

案外、上手いのが引つかかったのかも。

けど、何者かしら？

なにせあたしはスラムには疎いから、ぱつと見ただけじゃどこの誰だかわかんなくて困るわ。

しょうがないから意識を凝らして、この男を探してみる。

実言えばあたし、気合入れれば人の考えてることをある程度まあ漠然としたイメージ程度だけど　は読めるくらいの力は、あったりする。

もつともこれって珍しい話じゃなくて、シユマーの家にはあたしを上回る連中がごろごろしてるし、それ以外にも幾つものこの手の血筋はあるし。

つて、ちよつと待ちなさいよ……。

「ねえ、もう1回聞けど……本当に金髪の美少女、知らないのね？」

「ああ。見たこともねえなあ」
なるほど、こう来るわけね。

「おかしいわねえ。確かにここへ来たはずなんだけど。それになん

たつて、すぐ噂になる子だし」

さてこの男、あたしの表情が変わったのに気が付いたかしら？

「まあいいじゃねえか。そのうち見つかるさ」

「そのうちじゃ遅いのよ」

言いながらあたし、手にした太刀を半分抜いて見せた。

「物騒だなあ。」

けどスラムつたつて広いんだ。そう簡単には見つからねえことくらい、あんただって分かるだろ？」

「普通ならね」

同時に一閃。

男の前髪がひと房宙に舞う。

「さあ、白状してもらいましょうか？ 昼間あの子に会ったわね」
太刀を付きつける。

Episode : 54

「な……」

ふふ、慌ててるわね。

こつちも無造作に片手で構えてるだけだけど、この男自分がそこそこ出来るだけあって、すくみ上がってる。

「あたしね、嘘はキライなのよ」

会ったんなら会ったってちゃんと書いてくれば、考えなくもなかったんだけどね。

「い、いや、そりゃ確かに……けど、あんたの言ってる子かどうか分からんし……」

「金髪碧眼の太刀持った美少女で、通りすがりのもめごとに頭突っ込んで、拳句に借金をいきなり肩代わりするような子は、あたしの娘くらいよ」

「む、娘っ！」

あらなによ。

あたしに娘がいちゃ、おかしいみたいな言い方じゃない。

「ともかく会った場所まで案内してもらっわ。

それとそうね、他にも何か役に立ってくれたら、命だけは助けてあげる」

「ひでえ……」

チンピラ束ねてる割には情けない声、この男ってば出すし。やっぱり前言撤回、失格だわ。

「あら、別にいいのよ。別にここで殺してあげたって。
嘘ついたんだもの、そのくらいしてもいいわよねえ？」
そう言って、頬に紅い線を引いてあげる。

「あたしのお願ひ、聞いてくれるかしら？」

「……は、はい」

「よろしい」

とりあえずこの男を連れてれば、ヘンなのに煩わされることも、
なさそうだしね

あ、そうだと。

「そうそう、うちの娘があなたに渡した紅玉、返してもらえるかしら？」

こういったらこの男、子供みたいに泣き出しそうな顔になっちゃった。

「別にタダでは言わないわ。ちゃんとその分は払うわよ。」

7000ルルシ……だったわよね？」

あのねえ、露骨にほっとした顔しないの。情けないったらありやしない。

「さ、出してもらえる？」

「これです……」

内ポケットから男が、指先ほどもある紅玉を出して見せた。
受けとってよく眺める。

「本物みたいね」

この紅玉、あの子けっこう気に入ってたのよね。
にしてもいくら人のためだとは言え、それをあっさり差し出しちゃうんだから、あの子っいたらいいしたもんだわね。

「あの、すみません、お金は……」

「あのねえ、何言ってるのよ。ちゃんと案内してから。いいわね？」
「げ……」

なんだかカエルが絞め殺されたみたいな声。

「もう、さっきから情けない声出して、みっともないわよ。
ところであなた、名前は？」

さすがに名前がわかんないと、不便だし。

「え？ あ、リードって言いますが……」

「あ、そ。あたしはカレアナ。呼び捨てで構わないから。
さ、どっち？」

リードとか言うチンピラを先に立たせて、歩き出す。

場所は、ここからそんなには遠くないんだそう。

Episode : 55

「その、その近くに住む家族が借金返してきませんで、俺が取りたてに行つたつてワケで」

「ふうん」

ここじゃよくある話なんだろうけど。

でもそんなに必死に取りたてなくなつて、自分が困るわけじゃないのにねえ？

「そしたら娘さんが割つて入つて、代わりに払つてくださったんです」

すっかり子分みたいな調子で、この男が弁解する。

やっぱりみつともないわ。

もつとも嘘ついたまま知らん顔してるつても、腹立つんだけど。

「あ、ここいらあたりです」

割合広めの路地で、レードが立ち止まった。

「いないじゃない」

「そりゃそうスよ。もう何時間も前の話ですから」

「それじゃ話にならないでしょ。どこ行つたか聞いてらっしゃい」

「はあ……」

彼が渋る。

「あら、いいわよ。じゃあお金払わないもの」

「そ、それだけは勘弁してください！ んなことになったら、社長になんて言われるか……」

根性なし。

ここまで情けないと、もう形容詞がなくなってくるわ。

「はいはい、分かったらさっさと聞いてくるの。10分以内に帰ってこないと、あと知らないわよ」

「ひええ……」

なんだかぼやきながら、それでも彼が聞きに行つた。

で、立つて待つてるのも面倒だから、その辺の階段に座りこんじやう。

けどせっかく座つてたら、家の人が帰ってきちゃうし。

「ちよいとあんた、うちの玄関の前に座つて、何か用かい？」

「あらごめんなさい。ちよっと人探してて、疲れたもんだから。」

そうだ、うちの子見なかった？ 金髪に碧い瞳の可愛い女の子で、太刀持つてるんだけど」

このおばさんが、まじまじとあたしの顔を見る。

あんまり美人だから、見惚れたかしら？

「ふうん……なるほどね、あんたがあの子の親かい。確かに、言われてみれば似てるかね」

「でしょでしょ」

なんだってあたしの自慢の娘だもの。

でもあの子目立つから、やっぱりちゃんと見られてみたいね。

「それで、どこへ行つたか分かる？」

「昼間のあの子がそうなら、ジャスンとこに上がりこんだよ。なんだか泣いてたっけね」

あらま。何で泣いたか知らないけど、ちよっと見たかったなあ。

でもとりあえずはあの子探さないと、見るも見えないもないわけで。

「そしたらそのお宅、どこかしら？」

「そのアパートの、2階のいちばん奥だよ」

「ありがと、助かったわ　あ、これ、少ないけど取っというて。娘
見つけてくれたお礼よ」

そんなやりとりしてたら、レードが戻ってきた。

「お嬢さんの居場所、わかりましたぜ」

「ジャスさんって方のお宅に、上がりこんだみたいね」

「なんで知ってるんです……」

可笑しくなるくらい、レードががっかり肩を落とす。

「ま、人徳ね。行きましょ」

何か言いたそうな彼は無視して、あたしは教えられた部屋のドア
を叩いた。

中からまさに「お袋さん」って感じの人が顔を出す。

Episode : 56

「なんだい？」

「忙しいとこ悪いんだけど、うちの娘のルーフェア、お邪魔してないかしら？」

「あ、あの子の親御さんかい。」

「いや、あの子にはすっかり世話になっちまってねえ。ほんとだったら……」

長くなりそう。

しょうがないからこっちで遮る。

「ごめんなさい、あの子、いるのかしら？」

時間のある時だったら、いくらだって井戸端会議に付き合っただけど。

「あ、すまないね。」

それがあの子たち、うちの息子と一緒に飛び出しちゃったんだよ。知ってる子が危ないと言ってさ」

「そう……」

あの子「たち」って言うからには、イマドも一緒ってわけね。

あれで案外、ルーフェアって鉄砲玉。特に何か人が危ないって言うと、それが片付くまではなし崩しに関わっちゃう子だし。

「まあ待つてりゃそのうち戻るだろうから、上がっていきなよ」

「ごめんなさい、そうもいかなそう。」

もしうちの子がここへ戻ってきたら、あたしが来たって伝えてくれるかしら？」

「そうかい？　じゃあそう伝えるよ」

世話好きらしいこの人が、ちょっと残念そうな顔になる。

「落ちついたら、親子で寄らせてもらうわね」

ジャスさんにはそう言って、この部屋を後にした。

「さ、リード、どつか心当たり思い出してちょうだい」

「そんなムチャな……」

「つべこべ言わないの。ここは詳しいんでしょ。」

「だいいち最初なんて、『手下に探させる』なんて勇ましいこと言
つてたじゃない」

「なんでンなこと、覚えてるんすか……」

失礼ね。

あたしこれでも、記憶力は悪くないんだから。

「ともかくそう言ったからには、責任取りなさいね。はい、急いで
急いで」

「だからムチャですよ。」

時間もらえるんなら、絶対探し出してみせますけど」

「あらそうなの？」

今度は彼、けっこう自信ありげ。

「そりや間違いないですって。だから時間もらえませんか？」

「それならあげてもいいけど……ここで待つのはやよ」

何が悲しくて、こんな寒空の下で待たなきゃいけないんだか。

「そりやまあ……んじゃ、知り合いの店でいいスか？」

「ヘンなとこじゃないでしょうね？」

思わず勘ぐったりして。

もっともそうなら、営業できないようにするだけだけどね。

「いや、感じのいいバーですから。

ね、カレアナの姐さん、それで手うつてくれませんか？」

「そうねえ……」

ちよつと考えこんでみせる。

やたら不安そうなリードの面白いことつたら。

「姐さん、頼みますよお」

「じゃあこうしましょ。あたしの飲み代をあなたがおごる、これで
どお？」

「オ……」

もちろんこの眩き、聞き逃したりなんてしない。

「あら、そんなこと言うんだ？」

じゃあうちの娘に手を出してくれた分、命で払ってもらってもいいのよ？」

「わ、分かりました分かりました、それでいいです！」

で、商談成立

案内してくれるリードにくつついて、そのバーとやらへ向かう。
久々に、美味しいお酒が飲めそうだわ。

Episode:57

Seamore

「　　」

向こうのほうでハミングしながら、ナティエスのやつが何やら作ってた。

あいつが機嫌がいい理由は、単純だ。街へ繰り出してみたら案の定、みんな気が緩んで、まさに掘り放題ってやつだった。

「さあみんな、出来たよ」

高価な魚介を山ほど放りこんだスープを、ナティが持ってくる。

「へえ、美味しそうじゃないのさ」

「でもごめんね、あとはパンとサラダだけ。あ、けどミルクとチーズはあるから」

「いいっていいって。明日祭りがあるのに、そんなに大食らいするわけにやいかねえからな」

「ホント。だいいちこんな高価いモンけっこう久しぶりだし、これで十分だよ」

そんなことを言いながら、チームの連中がそろそろ集まってきた。

「おい、もう食っていいんだろ？」

言うが早いか手が出る。

「あ、ちよっと！ 分けて上げるから、待ちなさいってば！」

ナティのやつが容赦なく声をあげた。

「まったくもう、意地汚いんだから。だいいちこれ、あたしが用意したのよ」

「分かってる分かってる」

昔から、なんやかやと賄いやつてたナティは、こーゆーことなら発言力がある。年上だろぅがなんだろぅが、お構いなしってやつだ。

「にしても、よくこんなに買えたな」

「だから言っただしよ、掏り放題だったって。」

もうみんなバカよね。明後日の記念日に浮かれちゃって、懐なかまるつきりお留守だもん」

もっともそれを差し引いたって、こいつの腕はたいしたもんだろぅけど。

ついでに言うとナティのやつ、財布をまるごと取って来ない。札束のなかからちょこつと抜いて、場合によっちゃ「落ちました」って返すんだから、たいした度胸だ。

当人曰く、「そのほうが怪しまれない」ってんだけどね。

ただもしかすると、単純に掏るのが楽しいってやつかもしれない。ともかくそれを、場所変えながら繰り返してこれだけの額集めたんだから、もうプロって言っても通用するだろぅ。

「はいどうぞ。熱いから気をつけてね？」

スーブをよそり終えたナティの言葉を合図に、今度こそ一斉に手が伸びる。

「どお？ 美味しい？」

「ああ。明日があるから、おなかいっぱい食べられないのが、残念だね」

そう答えると、ナティが明るく笑った。

「明日は明日で、ご馳走にすればいいじゃない？」

あれならいつくらだって掏れるもの、ちよつと多めに取ればすぐ

貯まるよ」

「言っじゃないか。頼りにしてるよ」

昔ここにいたころと、変わらない会話。

「どしたの？　なにが可笑しいの？」

あたしが苦笑したのに気付いて、こいつが不思議そうに訊いてきた。

「いやさ、けつきよくあたしは、ここから離れられないなと思って学院はスラムに比べりゃ天国だけど、やっぱりここのほうがいい。」

「じゃあさ、学院辞めちゃえば？　あたしはどっちだっていいもん」

「そつもないだろ？」

あたしとナティが学院へ入学したのには、それなりのわけがあった。だからおいそれと、辞めるわけにやいかない。

「傭兵隊かあ。めんどくさいな」

「そう言いつつちゃんとAクラスにいるの、どこのどなただい？」

「シーモアが頑張るんだもん」

ちよつとはにかみながら笑って、ナティがまたスープに口をつけた。

あたしも食べるほうに専念する。

なにせこの人数の上に、ほとんどが男子だ。うかうかしているとあつというまに食うものがなくなっちまう。

その時、呼び鈴が鳴った。

「なんでえ。せつかくメシ食ってるつてのによ」

当番のケインがしぶしぶ立ち上がって、玄関のほうへ行く。

「こんな時間に誰だろうね？」

「さあ。まあおかた、誰か戻ってきたんじゃないか」

今日は家に泊まりとか言いながら、戻ってくるやつも時にはいるもんだ。

けどケインの言葉は、もっと意外だった。

「おい、どうする？ さっきのガキどもがまた来たぜ」

合言葉を言う前に、一応のぞき窓から確かめたら、部外者だったってことらしい。

「さっきのガキって……ルーフェイアとイマド？」

「名前はしらねえけど、金髪で太刀持ったとびっきりの美少女と、その連れだよ」

「んじゃ間違いないね」

あいつら2人、追いついたのに性懲りもなく、舞い戻ってきたらしい。

「ガルシイ、どうする？」

みんなが一斉にリーダーのガルシイを見た。

「まったく、お前に似てダチつてのも、懲りないやつらしいな。まあ放っとけ。そのうち諦めて帰るだろう。」

シーモア、ナティエス、それでいいな？」

「ああ」

「しょうがないもんね」

明日祭りだつてのに、部外者を入れておくわけにはいかない。

あいつら2人には可哀想だけど、無視するしかないってやつだ。

「どうせすぐ諦めるさ。さ、早く食っちゃまおうぜ」

「うん」

じつ言つたこのときあたしとナティは、ルーフェイアがどれほど強情か、きっちり忘れきつてた。

Episode : 58 交渉

I m a d

「開かない……ね」

「ああ」

ともかくここまで来たものの、シーモアたちのアジト？の扉は開きそうになかった。

カギ、強引に開けてやろうか。

思わずそんなこと思っちまう。

けどルーフェイアのほうは律儀に、また呼び鈴を鳴らした。

何度か間を置きながらの5回目くらいで、さすがにドア越しに声が返ってくる。

「帰れ」

「その、ウインが……ケガをしたんです」

ぶつきらばうな言葉にも負けず、こいつが必死に訴えたけど、返事はにべもなかった。

「見え透いた嘘言っんじゃないやねえ。帰れ」

「嘘じゃないです！　だってウイン、こちらへ、戻ってない……ですよね？」

どうにかしなきゃって思いがあるんだろう、こいつも引き下がない。

「寄り道するから遅くなるって、連絡あったからな。

さ、帰ってくれ」

それっきり声は聞こえなくなった。

「まるつきり俺らに会うつもり、ねえみてえだな」

「そうだね……」

ルーフェイアのやつが、困り果てた表情になる。

中にはちゃんと人がいる。その辺はルーフェイアのヤツだつて、十分気配を捉えてるはずだ。俺なんかは、誰がいるかまできっちり分かるし。

ついでに中の連中の感情まで見事に伝わってくるから、向こうさんが何考えてるかまで筒抜けに近い。

「どうする、ルーフェイア。一旦戻つか？」

こいつが黙った。他のみんながやってることと引き比べて、自分がどうするか考えこんでるらしい。

ただ今回は珍しく、悩んでる時間が短かった。

「待つわ」

「そう言つと思つたぜ」

じつ言えば最初っから、こう来るだろうと予想はしてた。なんせルーフェイアだ。

こいつは人のこととなると、諦めるって言葉を知らない。

「んじゃこの辺で待つか？」

「この辺でつて……イマド、先に帰つてて。寒い……嫌いでしょう？」

座りこもつとした俺に、こいつがそう言ってきた。

「バカ言え。お前だけ置いて帰れつかよ。」

だいいちなこととした日にゃ、お前の親父に何されっか、わかんねえだろ」

なんにも言いやしなかったけど、あの親父さんルーフエアになんかあったりしたら、間違いなく関係者皆殺しってやつだ。

「それは……そうだけど……」

さすが娘なだけあって、こいつも親のことはよく分かってるらしい。

「それに俺だつて、帰ってもすることねえしな。

てかお前こそ、そんな薄着で大丈夫なのか？」

「あ、うん、大丈夫。あたしのは冬用の戦闘服だから」

なるほど。

今まで見てて、ルーフエアのやつはだいたいが寒さに強い。

そこへ戦闘集団だつて言う実家??で使う、戦闘服着てちゃ、寒いなんてこたえないだろう。

「ごめん……つきあわせちゃって」

「だからいいって」

いつものやりとりしながら、結局2人で座りこむ。

って、ちよつと待てっ！

何を思ったのかルーフエアのやつが、俺にくつついてきやがった。

Episode : 59

「なっ、こっ、おい！」

「……どうしたの？」

どうしたの、じゃねえだろ……。

けどマジでこいつ、何にも分かってなかった。

「このほうが、寒くないでしょ？」

「いや、そりゃそうだけどよ……」

そう言う問題じゃないだろうが。

ただこいつ、そういうのはどっかに落としてきてっからなあ。

今だって頭のとっぺんからつま先まで、全部まとめて「寒いといけない」だけで埋まりきってるし。

と、ぽつりとこいつがつぶやいた。

「思い出すな……」

「何がだ？」

珍しくこいつから、安心しきった雰囲気伝わってくる。

いつも不安げにしているルーフェイア。

それが今は、ない。

「よくね、戦場において野宿の時とか、母さんにこうしてもらったの。

あつたかくて好きだったな」

「へえ……」

人一倍脆いこいつがどうして戦場で正気でいられたのか、答えが分かった気がした。

「戦場、大っ嫌いだけど……学院来てからさみしかった……」
ルーフェイアの瞳から、一筋涙がこぼれる。

こんなのタシユア先輩あたりが見た日にゃ、きつと「甘ったれ」
とかなんとか言って突っ込むだろう。

とりあえずこいつがいちばん望んでる通りに頭を撫でてやると、
そのまま小さい子供みたいに目を閉じちゃった。

この状況で度胸あることに、眠くなったらしい。

ま、いいか。

戦場育ちのせいで、寝られそうな時に寝ちまうだけかもしれない。
し。

「なんかあつたら起こしてやるよ」

「うん……」

言うのが早いが、たちまち寝入っちゃった。あとはどれだけシーモ
アたちと根競べできるか、だ。

でも幸いこいつが　ルーフェイアはかなり体温が高い　くっ
ついてるお陰で、寒さは感じない。

こいつの様子を見ながら、俺は待つことにした。

それから多分、１時間くらい過ぎた頃だ。

「イマドっ！　あんたがついててなにやってんのさっ！」

「お、やっと開ける気になったか」

とうとう根負けしたシーモアたちがドアを開けた。

「『開ける気になったか』じゃないよっ！

ほらっ、ガルシィに許可もらったから、早く入りな!!」

「りょーかいっ」と

ただそうは言っても、すぐには動けねえわけで。

「ルーフェイア、起きろって」

まず寄りかかってるこいつを起こさないことにや、俺も身動きできない。

ってあれ？

嘘みてえだけどルーフェイアのヤツ、熟睡してやがる。

いつも気配だけで目を覚ますこいつがこれは、かなり珍しい。

Episode : 60

「まさか、ルーフェイアってば寝ちゃってるの？」

「ああ。気持ち良さそうに熟睡してるな」

もつとも危険がせまりや、瞬時に目を覚まして太刀を構えるんだろうけど。

けどほかの連中は、違う意味に取っただらしい。

「おいっ、誰か来い！」

少し奥にいたリーダーの人が、慌てた調子で仲間を呼んでる。

「？ 何慌ててんです？」

「なにのんきなこと言ってるんだ！ ほらっ、お嬢ちゃん！」

「あ、だめです、ンなことしたら……」

俺が言い終えるより早く、びくりと身をすくませてルーフェイアが目を覚ました。

その手が太刀を抜きかける。

「落ちつけ、ルーフェイア！ シーモアたちだ！」

「え……？ あ」

一瞬のタイムラグを置いて、ルーフェイアのやつが状況を理解した顔になった。

「おはよう、シーモア」

思わずそこにいた全員が石化する。

「『おはよう』じゃねえだろ……」

「え？」

こいつ珍しく熟睡しきってたせいか、どうも寝ばけてたらしい。

「えっと……？」

「ルーフェイア、なんでもないのねっ？！」

「え？ うん……」

血相変えてるシーモアたちと、ぼーっとしてるルーフェイアの対比がめっちゃくちゃ笑えた。

「まったく何考えてんのさ！」

ここはケンディクじゃないんだ。この時期に外で寝てたりしたら、凍死するっつの！」

「凍死……？ あったかかったけど……？」

あ、それで慌ててたのか。

もつとも気温の割に、こいつはぬくぬくしてたけど。

その上俺にくつついたりしたもんだから、ついそのまま眠り込んだってところだろう。

「ああもう、まったくわかってんのかい！」

「分かってねえって」

ボケてるルーフェイアと言い、分かってないシーモアとナティエスと言い、もう笑うしかない。

そこへゼロールさんに付き添われて、ウィンが戻ってきた。

「あれっ、みんな廊下でなにしてんの？」

「あ、ウィン」

わけがわからないって顔してるウィンに、シーモアのやつが事情を説明する。

「それで入れずにいたら、この通りストライキしてくれたってわけさ」

「ストライキって……ねえちゃんたち、オイラのこと言わなかった

のかい？」

マヌケだといわんばかりの顔をこいつがする。

「言っただ。でも信じてくれなくてな」

「マジ？」

「じゃなきゃ、こんなところいるかよ」

はつきり言っ、俺はこんな寒い場所より部屋の中がいい。

「んじゃもしかして、みんなが信じなかったとか？」

「だからそう言っただ」

「ひっで〜！」

ウインのヤツが素っ頓狂な声をあげた。

「ったく、ウルサイね。もう暗いつてのにデカイ声で騒ぐんじゃないよ」

「そゆ問題じゃないだろ？！」

「だいたいオイラ」

こいつが事の顛末を話して、みんなの顔色が変わった。

「そりゃ、ほんとなのか？」

「ホントだよ。だいいちこんなことでウソ言っただ、オイラちつとも得しないじゃん」

言いながらウインが、巻かれた包帯を見せる。

「こりゃひどいね」

「でも、あんまし痛くないんだ。お医者さんもさ、手当てがよかつたって言っただし。」

「ねえちゃん、ありがと」

「うっん。よかったね」

ルーフェイアのヤツは締め出されてたことも忘れて、にこにこ顔

だ。

「ともかく、中入ろうよ。スープとかもまだ、ちゃんが残ってるから」

へえ、ナティエスの手料理か。

こいつはルーフェイアと違って、こういうのはけっこう上手い。

どっちにしても今晚は、手っ取り早く夕食にありつけそうだ。

ってそう言えば、ジャスおばさんちの夕食どうなったんだろうな

……？

Episode : 61

R u f e i r

シーモアたちのアジトに入れてもらえたのは、尋ねてから1時間ほどしてからだった。

「まったく呆れたもんだよ。この寒空の下に座りこんで、ずっと待ってるなんざ」

「ほんとほんと。普通じゃ考えられない」
シーモアとナティエスが呆れ顔だ。

「その、あったかかったから……」

「だからルーフェイア、さっきも言ったけどさ、ここらじゃ外に寝てたやつが、凍死することだってあるんだ」

「でも……」

確かに気温は低かったけど、冬の戦闘服だったのとイマドとくっついていたので、さほど寒さは感じなかった。

むしろあったかくて心地よくて、そのままつい眠ってしまったと言ったほうが正しいだろう。

「ああもう、わかってんのかい！」

「だから分かってねえって」

見るとあたしが座らされてたソファの後ろで、イマドが可笑しくてたまらないという風だった。

「こいつにとつちゃ、あんなこと朝メシ前なんだっての。」

だいいちお前らだって、こいつの性格は知ってんだろ？ だって最初っから開けてやれって」

「だからって……」。

ともかくルーフェイア、冷えちゃったでしょう？　これ食べて」
ナティエスが湯気の立ったスープ　貝とお野菜と魚の身？が入
ってる　を、あたしたちに差出してくれた。

「あ、美味しい」

「ほんと？　よかった」

口をついた言葉に、彼女が嬉しそうになる。

「俺にもくれないかね？」

匂いに誘われたんだろ、後から来たゼロールさんもせがんだ。

「えゝ、どうしょ？」

「とびつきり可愛いお嬢ちゃん、そんないぢわる言わないで、おじ
さんにも１杯、な？」

「やだもつ、ルーフェイアの前でそんなこといわれると、イヤミに
しか聞こえないじゃない！」

褒められて何が嫌味なのか分からないけど、それでもナティエス、
まんざらでもないらしい。ゼロールさんにも、スープの入った器を
差し出す。

「　お前、サラの花入れ忘れたろ」

「やっぱり一口食べたイマドが、なにかよく分からないことを突っ
込んだ。」

「うるさいなあ、もう！　高いから入れなかったのよ！」

「ベリルだけでも入れりゃ、もうちょい落ちつくのにな」

「もうやだ！　イマドってば男子のくせに、どうしてそう料理細か
いのよ！」

気が付いたときには、言い合いが始まってしまっていた。
当たり前だけれどこの変わった光景に、ここの人たちもみんな呆

然としている。

「ナティ、とりあえずその話、あとじゃダメかい？」
シーモアが仲裁に入る。

「え、あ、ごめん」

「あとでもう1回、教えてやろうか？」

「イマド、あなたねえ！」

「イマド！」

面白がって茶々を入れる彼に、あたしとナティエスの言葉が重なった。

「イマド、食べさせてもらったのにそんなこと……言ったらダメだよ……」

きつとナティエスだって、一生懸命作ったはずだ。

一瞬イマドと視線が合う。

もしかして、怒っちゃっただろうか？

Episode : 62

「そうだな。ナティ、悪かった」

でもあたしの心配をよそに、イマドがあっさり頭を下げた。

「あ、そんな別に、謝ってもらわなくてもいいんだけど……」

よかった。

2人が仲直りしてほつとする。

周囲の人たちもほつとしたんだろうか？ みんななんだか笑っていて、いい雰囲気になっていた。

「やれやれ。」

それでルーフェア、座りこんでまで何を言いに来たのさ」

「えっ？」

呆れて入れてくれただけだと思っていたから、この言葉は意外だった。

「聞いて……くれるの？」

またみんなが笑う。

「まったく、あれだけのことでくれちゃ、聞かないわけにいかないだろ？」

「ほんと。ルーフェアがまさか、あんなに強情だなんて思わなかった」

「ごめんなさい、そういうつもりじゃ……」

またあたし、あと先考えないで、みんなに迷惑をかけちゃったみたいだ。

自分が情けなくて涙が出てくる。

「あゝ、違う違う違う！」

ね、泣かないで？ ほら、だから何でここへ来たの？」

「えっと……」

言わなきゃならないことはたくさんあるのに、どれから話せばいいのかわからなかった。

「えっと、だから……小さい子が殺されて……」

「ようはその話、裏があるんじゃないかねえかってことなんだ」

イマドが口添えしてくれて、ようやくまともな言葉になる。

「裏？ どこをどうやったらそんな話になるんだい」

「でも……」

またさつきと同じで、信じてもらえないのかと思うと悲しくて、また涙が出てくる。

「うあ！ ルーフエイア、泣くんじゃないよ。」

ともかくガルシイ呼んでくるから、ストップストップ」

「あ、あたし行ってくる」

慌てたシーモアをナティエスが止めて、彼女の姿が奥に消えた。ふっと部屋の中が静まり返る。

そして……シーモアが口を開いた。

「ルーフエイア」

「なに……？」

彼女が一呼吸だけおく。

「どうしてわざわざ、ここまで来たんだい？」

「え？」

でも、友達だから……」

シーモアがあたしの瞳を覗き込んだ。

どこか新緑にも似た、鮮やかな翠色の 真剣な瞳。

「マジでそれだけなのかい？」

「それじゃ、ダメなの……？」

もしかしてあたし、いちばん最初を間違えてしまったんだろうか？
まっすぐシーモアがあたしを見る。

「ダメじゃないさ。 ありがとう」

言葉を聞いた瞬間、胸が詰まって、あたしはまた泣き出してしまった。
った。

そのあたしの頭を、シーモアが撫でる。

Episode : 63

「あたしらみたいな連中にここまでしてくれて……あんだ、最高の
ダチだよ」

「ううん、ううん……だって、だって友達……」

「うん、分かってる」

それ以上、シーモアはなにも言わなかった。

イマドもなにも言わない。

すごく……すごく、静かで……。

「お待たせ」。

あれ？ シーモアったら泣かしちゃったの？」

少し経って、2人の男の人といっしょに戻ってきたナティエスが、
開口いちばんそう言った。

「ち、ちがうの。あたしが勝手に泣いちゃって……」

くるりとナティエスが、あたしたちを見る。

「なんかよくわかんないけど、まあいいかな。」

ルーフェイア、イマド、この2人がうちのリーダーとサブね」

「あの、初めまして……ルーフェイア」グレイスです……」

おそろおそろ名乗る。

「イマド」ザニエスです。もうシーモアとナティエスから、聞いて
るでしょうけど」

イマドのほうは平然としたものだ。

「俺は……」

ゼロールさんも自己紹介しかけたけど、これは見事に無視されて

しまう。

「俺がここのトップやってる、ガルシイだ」

向こうチームのトップ、力で攻めるタイプのダグさんと比べて、ガルシイさんは切れ者という感じだった。

黒い髪と浅黒い肌なのに、なぜか水色の瞳。体格も細身で、なんとなく猫科の猛獣を思わせる。

「話のさわりはナティエスから聞いた。細かい話は出来るか？」

あたしは困ってイマドを見た。

なにしろ「細かい」と言ってもほとんどは憶測で、証拠があるわけじゃない。

「申し訳ないですけど、ナティエスが言った以上のことは、俺らもよく知らないんです。

はつきりわかってるのは、ウインを襲ったのは向こうのチームじゃないってことくらいですね」

「間違いないのか？」

見透かすような鋭さを含んだ、ガルシイさんの言葉。

「間違いないです」

でもそれをものともせず、イマドはきっぱりと答えた。

「俺ら、あの時ダグさんと一緒にしたし、その襲ってきた連中はどう見たって中年でしたから。

あと詳しいことは、ゼロールさんがそこそこ知ってると思いますけど」

「そう言われても、俺のほうも証拠はないんだが……」

どうやったら上手く信じてもらえるか考えている調子で、ゼロールさんもさっきの、『ホームレスの人が別の犯人を見た』という話

を繰り返す。

「別に偏見を言うつもりはないが、ホームレスのオヤジさんが小銭欲しさにでっち上げたって可能性も、否定は出来ない。

ただあの怯えぶりからすると、多分本当じゃないかと思うんだ」

「だったらその話で、こっちの濡れ衣は晴れたことになる。それとウインの件に関しては、向こうが関係ないのを認める。

ただそれ以前のことに関しちゃ、向こうがやったってのは否定出来ないな」

これだけの話を聞いても、ガルシィさんは冷静だった。

Episode : 64

「向こうがやってないのを証明できなければ、こっちとしては許すわけにはいかない」

「そんな……」

ここでは「疑わしきは罰せず」という原則が、通用しないのだとあたしは気付いた。

でも……。

本当にどちらも相手チームの子供を殺していないのなら、抗争はやるだけ無意味だ。

「ほんの2、3日でいい。祭りの延期は出来ないか？」

「こっちとしてはする気はない。ただ、向こうの出方次第では考えてもいい」

ゼロールさんの懇願にも、ガルシイさんが冷徹に言い放つ。

ともかく歩み寄る気配はなかった。

どうやったら上手くいくのか、必死に考える。

そうだ。

「あの、ガルシイさん……。ダグさんと会っていただけませんか？」

「冗談を言うな」

「ルーフェイア、そいつはムチャってもんさ」

「もう、ルーフェイアったらおめでたいなあ」

もし直接話が出来れば、なにか変えられるかもしれない。そう思っ
て言った言葉に、ガルシイさんどころか、シーモアやナティエス

までが反対した。

「でも、会ってみれば……」

「会ってどうなる」

にべもない返事。

自分に力がないのが、悲しくてたまらなかった。

「でも、でも、殺し合いなんて……」

そんなの、いらない。

嫌と言っほど見た。あの戦場で。

誰も死にたいなんて思ってないのに、殺し合わなければいけない場所。

生き延びる唯一の方法が、人の命を絶つこと。

地獄よりもまだ、地獄に近い場所……。

「ルーフエイア、もう考えんな。お前のせいでそうなったわけじゃ、ねえだろ」

しゃがみこんでしまったあたしの頭を、今度はイマドが撫でた。そして彼が言う。

あたしの、代わりに。

「ともかくガルシイさん、ゼロールさんの言っとおりほんの2、3日、延ばせませんか？」

ケリつけたい気持ちはわかりますけど、ここは戦場じゃない。

今なんとしても相手を殺さなきゃ生きていけない　そういう場所じゃないはずです」

「それでもダメだ」

もう、どうすることも出来なかった。

所詮部外者でしかないあたしたちじゃ、何も変えられない。

悔しくて哀しくて、また涙がこぼれた。

泣いてどうなるものじゃないと分かっている、泣かすには無理ない。

「どうして、どうして……」

「ごめんよ、ルーフェイア」

シーモアとナティエスが、すまなそうに謝る。

その時、表のほうから誰かが騒ぐ声が聞こえた。

Episode : 65

「そのつ、ガルシイは今、ちょっと人と会ってて……」
「かまわん」

え？

聞き覚えのある声に、驚いて顔を上げる。
イマドも気が付いたんだろう。半分確信したような声で訊いてきた。

「おい、今の」
「うん」

あの声の主を、あたしが間違えるはずもない。
少し待ってると思ったとおり、「その人」が入ってきた。

「父さん、ダグさんのご家族、もう大丈夫なの？」
訊くと父さんは、自信たっぷりにうなずいた。

こういうところ、どうして母さんと似てるんだろう。
困った意味で、似た者夫婦だと思う。

「ちょっと待て、『父さん』だと……?!」
そうすると君は、ディアスさんの娘なのか？」
「え？　じゃあガルシイさんも、父さんご存知なんですか？」
どうも父さん、このスラムじゃよほどの有名人らしい。さっきのダグさんと、似たようなやり取りになる。

「ガルシイ、まさか『ディアス』って、この人あのディアスさんなのか？」
「うそ、信じらんない……」

しかもどういうわけか、シーモアとナティエスまでが驚いた顔になった。

確かにこのアジト？へ簡単に入れてもらってるんだから、この中に知り合いはいるんだろうけど……。

「あの、すみません、父さんとどういうお知り合いなんですか？」

きっと父さんに訊いてもごまかされてしまっただろうから、思い切ってガルシイさんにあたしは訊ねた。

一瞬の間。

「俺たちのチームの、昔のリーダーだ」

「え？」

今聞いた言葉を、もう一度頭の中で繰り返す。

つまり父さんは昔、このチームのリーダーをやつてて……なのに
もうひとつのチームの、ダグさんの大先輩で……？
よく分からない。

「ガルシイ、話はもう聞いたな」

悩むあたしを無視して、父さんが話を切り出した。

「はい。もっとも、信じられませんが」

「それはどうでもいい。」

ともかく聞いたなら、これからレニーサのところへ来られるか？

この話、彼女も裏があると言っている」

その言葉を聞いた途端、ガルシイさんの表情が明らかな驚きへと変わった。

「あの人が……？」

レニーサという名前には、あたしも聞き覚えがある。たしかさつ

き、ダグさんが落ち合う場所に決めたお店　　というか、その名前だ。

けどあたしが思っていたような、単純な名前と場所ではないらしかった。

「　クリアゾン　？」

よほど驚いたのか、ここの人たちが使う言葉がスラングへと変わる。

「クリアゾン　　レニーサ　　」

父さんもそれに、同じスラングで答えた。こうなると共通語しか知らないあたしには、断片的な単語しか聞き取れなくなる。

Episode : 66

「イマド、分かる……？」

念話の能力が高い人だと、言葉がわからなくても意味を読み取るのを思い出して、彼に訊いてみる。

「話が込み入ってて、なんだかわかんねえ」

「そっか……」

ある程度の意味は分かっても背景が分からないから、結局全体の意味は分からない、ということらしい。

こうなると、誰かに説明してもらうしかなさそうだった。

だけど誰かに聞こうにも、父さんはもちろんシーモアもナティエスも、なんだか早口で話に加わってしまっている。

「ま、ひとくぎりつけば誰か教えてくれるだろ」

「そうだね」

待つよりほかなさそうだった。

部屋の隅に座りこんで、あたしの知らない言葉を話しているみんなを、ぼんやりと眺める。

不思議な感じだった。

こういう風に相手の言葉が分からないというのは ほとんど初めての経験だ。

小さい頃から両親に連れられて世界各地を転々としていたおかげで、あたしが話せる言葉は多い。おもだったものは全部読み書きできるし、通常は知られていないヴァサーナ語も、日常会話程度ならどうにかこなせる。

ほかにもシュマー内の公用語が古代ローム語の変形だから、ロー

ム語と古代ローム語の両方も出来た。

でもシーモアや父さんたちが使っているスラングは、単語の使い方さえ違っていて、ロステイオ語が出来ても理解できない。よく知っているはずのみんなが、今だけ遠く見えた。

戦争って、こういうところから始まるのかな。
ふと、そう思う。

今のあたしみたいに、どこかの誰かが何故か遠く見えて……相手の言っていることも考えていることも分からなくて、まるで魔物みたいに覚えてしまうのかもしれない。
そうやっていろいろと思いをめぐらしているうちに、ガルシイさんが立ち上がった。

「どうやら、話がまとまったみてえだな」
「うん」

あたしたちも立ち上がる。
ガルシイさんがこっちへと視線を向けた。

「レニーサ 2人」
「え？」

困ってイマドのほうを見る。

「今、なんて……？」
「一緒に来いってさ」
彼があつさりと通訳してくれた。今度は内容が単純だったから、読み取れたんだろう。
ガルシイさんがはっとした顔になる。

「客がいるのに、つい仲間内の言葉になってたみたいだな」

「いえ、あの、大丈夫ですから……」

慌ててそう答える。

だいいち、特に困ったわけでもない。

「それで、どこへ行かれるんですか？」

行き先が知りたくて、あたしはガルシィさんに尋ねた。

イマドが隣で呆れた顔をする。

「『レニーサの店』だって」

「そうなの？」

確かに会話の中には、何度もその名前が出てたけど……。

Episode : 67

「ああそつか、すまねえ。まるつきりお前、分かんなかったんだもんな」

「いや、我々のミスだな」

ガルシイさんがそう言うってくれて、さらに補足してくれた。

「ディアスさんからの話じゃ、今回の話にウラがあるのは確実らしい。それもどうやら、俺たちの単なる抗争を超えたヤツだ。

だからその店へ行つて、真相を聞かせてもらう」

「はい！」

自分の声が、思わずはずむのが分かった。

ガルシイさんは一言も「ダグさんと会う」とは言っていない。けど同じ場所へ足を向ければ、会わないわけにいかない。

そして会えば、なにか少しは変わるはずだ。

(カッコつけねえで、最初っから『会う』って言やぁいいのによ)
(イマド！)

隣でこっそり毒を吐く彼を、慌てて止める。こんなことで、せつかくの成り行きが台無しになったら大変だ。

でも幸い、ほかの人には聞こえなかったみたいだった。

「ディアスさんから訊いたがお前たち、どうせその店へ行くんだろっ？ ついでに案内してやる」

「ありがとうございます」

また何か言いかけたイマドは、でも視線が合うと黙ってくれて、あたしはガルシイさんに頭を下げた。

「ディアスさんはどうするんです?」

「一緒に行かせてもらう」

このままどこかへ行くんじゃないかと思った父さんも、ついてくるみたいだった。

「店までは少し距離がある。急ぐぞ」

「ガルシイ、あたしたちも行ったらダメ?」

部屋を出かけたところで、ナティエスも同行を申し出た。

「来てどうするんだ」

「どうもしないけど、面白そうだし、ルーフェイアったらあたしたちの友達だし」

にこにこ言い放つ。

それにしてもシーモアでさえ一目置いてるらしいこのリーダーに、ナティエスはぜんぜん臆した様子がない。

人はみかけじゃ分からないって言うけど。

ナティエスも意外と、そういうタイプらしい。

「あたしたち追いかけてわざわざケンディクから来てくれたんだもん、あたしたちがついていかなくちゃ」

「まあいいだろう」

一瞬苦笑めいたものを浮かべて、それでもガルシイさんは、ナティエスたちがついてくるのを許した。

「つたくガルシイ、ほんとナティにゃ甘いんだからさ」

「え、そうなの?」

「ああ、そうだよ」

そういうことなら納得がいく。

「どうでもいいだろう。」

それより、行くなら急げ」

「あ、俺も行つていいか？」

ジャーナリストとしては逃したくないのか、ゼロールさんも立ち上がる。

ガルシイさんも、今度は断らなかった。いちおうゼロールさんは、真相に近い情報を持っている人だから、来てもらったほうがいいと思つてゐるんだろう。

「行きたいやつはこれで全部だな？」

あとダリード、一緒に来てくれ。それからケイン、留守を頼む」

ときはきと指示が下して、ガルシイさんがさっさと部屋を出ていった。

あたしたちも慌てて後に行く。

少し後には、あたし、イマド、シーモア、ナティエス、ガルシイさん、ダリードさん（ここのサブリーダーのひとりだそうだ）、それにゼロールさんと父さんの総勢8人が、完全に暗くなったスラムの道を歩いていた。

Episode : 68

Caleana

リードがあたしを連れてったのは、確かに感じのいいバーだった。入り口はちよつと分かりにくいけど、中へ入っちゃうと案外広いし落ちついてるし。

で、ここに放り出されてから、かれこれ2時間ちよつと。

ったく、いつまでかかるのよ。

いくら飲み代がタダだったって、退屈したらありやしない。しょうがないからこの女主人と喋って、時間つぶしてる。

ちなみに彼女、薄い茶色の髪に透き通った若葉色の瞳。しかもバ―の女主人つてのがしっくりくる雰囲気。

「でさ、その偉いさんときたらね」

「うんうん」

あたしの話ってどういうわけか、どこ行ってもウケるのよね。今もこの人、けっこう面白がって聞いているし。

「それにしても、その年で現役の傭兵なんて凄いじゃない？」

「そんなことないわよ。うちじゃあたりまえなもの」

だいたいがうちの一族の食いぶちは、これと研究成果の専売とで稼ぎだしてる。

けどこの人 名前はレニーサって言うそう ほんと話してて

楽しい。

もつとも見かけはけっこう大人しそうだけど中身は……ってやつね。そんなのは見てれば分かる。

ま、その手の人間ときたら、うちのサリーアにかなうのは、いないだろうけど。

「それにしても、リードつたらいったい誰を探してるの？」

「あたしの娘」

一瞬店の中が静まり返る。

「娘……??」

「言つとくけど、すごい美少女なんだから
再び沈黙。」

いつものこととは言え、どうしてあたしがこう言つと、毎度周囲が沈黙するのかしらね？

「ま、まあ、あなたが言うんだからそうなんだろうけど……」

「あ、信用してないでしょ。」

「ともかく嘘じゃないわよ。あれを美少女といわずして
信じてくれないもんだから、思わず力が入っちゃう。」

「わかった、わかったわ。」

「けど今日は、人探しが流行る日ね」

「はい？」

彼女が言つた言葉が一瞬飲み込めなくて、思考停止する。
ちよつと待つてね、ちゃんと考えるから……。

「もしかして他にも、誰か尋ね人してたわけ？」

「ディアスが　って、久しぶりに来た昔馴染みだけど、彼も女の子を捜してたわね。」

「会えたかどうかは分からないけど」

えーと、彼がわざわざここへ顔を出したって言うことは。

「ここつて、ディアスのねぐらだつ たんだ」

「そんなとこね。それよりあなた、彼を知ってるの？」

「知ってるもなにも。」

「けどレニーサ、ディアスってばいいでしょ」

とたんに店の中が、深夜の僻地みたいに静まり返る。

そのあときっかり二呼吸は間を空けて、彼女がようやく声を出した。

「そりゃ、悪いとは言わないけど」。

「じゃなくて、あなたディアスとどういう関係？」

レニーサの視線が、極地の雪原みたいに冷たい。

「うーん、また誤解されちゃったかしらね？」

とりあえずそのまま放つとくのもなんだから、説明することに。

「あたしね、いちおうディアスのダメ女房」

彼女が目と口を丸くした。

次いで、やおらグラスを磨きはじめる。

「ああもう！ どうりで居着かないわけよねっ！！」

あたし、なんか悪いこと言ったかしらね？

ともかく彼女、親の敵みたいにグラスをこすってる。

「……そんなに力入れたら、グラス割れるわよ？」

「2つ3つ割らなきゃ気が済まないわ！」

「もったいないじゃない……」

せつかくいいグラスなのに。

Episode : 69

「ともかくやめなさいって。割るんだったらあたしが持って帰るわ」

「あなた、意外とみみっちいのね」

「みみっちいって……」

もったいないものは、もったいないと思うんだけど。
というか、それより。

「よかつたらディアス、貸すわよ？」

「お金じゃあるまいし。」

だいいちいくらあたしだって、人様のものに手をつけるほど、あさましくないわよ」

「あ、気兼ねしなくていいのよ。」

どうせあたしら、2人で好き勝手やってるんだもん」

「どういう夫婦よ」

これ、よく言われるけど……なんでかしらね？

「ま、気にしないで」

それからあたし、ちよつと真剣になつて彼女に訊いた。

「ねえ、このスラムで近々、なにかあるの？」

実はここへ来ることになったのは、ディアスが言い出したから。

あの子がスラムに来るって話を聞いたロシュマーの連中が人を用意しようとしてたんだけど、そこに珍しく横槍入れて、彼って来たのよね。

そりゃ、ルーフェイアが心配なのはわかる。

でもロシュマー連中の洗い出したここの情報見て飛び出したから、それだけじゃないはず。

「ちびちゃんたちの抗争があるのは、あたしも一応聞いてるけど、それだけじゃないんでしょ？」

こう言つとレニーサが躊躇った。

「ちよつと部外者に言つわけにはね……」

「お願い、教えて。」

うちの娘と、その友達が絡んでるのよ」

「娘さんが？」

一瞬だけ、レニーサが間をあけた。

そしておもむろに口を開く。

「まあ、あたしもそれほど細かいこと、知ってるわけじゃないのよね」

「それでいいわ」

なんにも状況がわかんないのに比べれば、ずっとマシだろうし。わかった、と言ってレニーサが話し始める。

「祭りがあるのは知ってるって言ったわよね。そうしたら 原因、聞いてる？」

「ぜんぜん」

やあね、そんな呆れた顔しなくたっていいじゃない。

ともかくレニーサったらひとつ溜息ついてから、気を取りなおしたみたいに話を続ける。

「双方のチームのちっちゃい子を、互いに殺っちゃったのが原因なのよね」

「ちっちゃい子って、まさかよちよち歩きの子？」

「もうちよつと大きいけど、どっちも５歳くらいじゃないかしら」

気が滅入るような話。

世の中何がイヤって、子供が死ぬのくらい嫌なものってないもの。

「　　ここもシビアなのね」

「そう言うのかしら？」

でもともと、このスラムじゃこういうことはご法度だし、だいたい普段はちゃんとしてるあの子たちがどうしてそんなことしたのか、まるつきり見当つかないんだけど……」

「じゃあ何？　なんの怨みか知らないけど、双方でご法度破ってやりあってるわけ？」

「そうなのちゃうわね」

なんてことかしら。

そりゃ怨みが嵩じてやりあうっていうのは、古今東西ありきたりなパターンだろうけど……。

Episode:70

「自分たちだけにしておけないのかしらね？」

「そこ、あたしも腑に落ちないのよ。それでいろいろ、探ってみたんだけど……やっぱり裏がありそうなのよね」

「どうやら、思ってたより状況が複雑みたい。」

「ただあの子たち、もともと仲は良くないのよ。というか、『悪い』って言ったほうが正解ね」

「なるほどね……まんまと乗せられたんだ」

確かに最初からチーム同士が仲が悪かった場合は、そこに人間はどうしたって無条件で相手を嫌うようになる。で、みごとにそこを突かれた、ってことみたい。

「こつこつ、人間の性癖、なのかしらね？」

「だいたい戦争だって、誤情報に尾鰭がついて、敵国の人間を人扱い出来なくなっちゃうことも多いし。」

「しかもこれがどういうわけか、実際に戦争してる人間たちより銃後の人間に多く見られるから、世の中って不思議。」

「まあ、見えない分簡単に誤解できるんだらうけど。」

「実言えね、あの2つのチームって昔はひとつだったのよ。だから余計何かと目の敵にする傾向があるの」

「跡目争い？」

「そう。」

「昔リーダーやってたディアスが抜けた後、真っ二つになったのよ」
「それで」

これでようやく、ディアスがここへ来るはずだった人間を差し置いて、自分で来た理由が分かった。

「分裂自体はよくある話なの。だからディアスも、別に口出さなかったんでしょね。」

もっともここを出た人間には、そういう発言権はなくなっちゃうんだけど」

レニーサが言うには、そういう暗黙の不文律があるんだとか。

けどそうだとすると、ディアスがここへ来たからって事態は変わらないような……？

とはいえ以前のリーダーが来れば後輩？たちも少しは考えるだろうし、気が変わるかもしれないし。

なによりディアス、あれで案外、面倒見はいいし義理堅い方。

「気になったんだ」

「多分、そうだと思うわ」

しん、と店の中が静まり返った。

ディアスがここでどんな暮らししてたのか、あたしも詳しくは知らなかったりする。

小さい頃にどこからかここへ流れついて子供を亡くした女性に拾われて、けどその女性も抗争に巻き込まれて亡くなって、その後はとある殺し専門のグループに入って……。

知ってるのはそれだけ。

それから彼、このスラムを抜けて傭兵になって、あたしはその頃出会った。

「世の中って、不公平ね」

「え？」

つぶやいた言葉に、レニーサが訊き返してくる。

「ううん、なんとなく……そう思わない？」

「そうね、そう思う」

また店内が静まり返った。

何か分からない、やるせない憤り。

どうしてそう感じるのかもどこへぶつけていいのかも分からないけど、納得だけはしたくない。

そうしたら　なんか負けの気がするから。

だからあかし、わざと笑顔でレニーサに話しかけた。

「ゴメン、なんか湿っぽくなっちゃって。もっかい飲み直そうか？」

「そうね」

ここでこうしてたって、なにも始まらない。

変えたければ、自分が動いて変えなきゃいけない。

だから……。

「明日に乾杯、かしらね？」

Episode : 71

N a t t i e s s

冬の寒空だつていうのにあたしたち、なんだかぞろぞろ御一行様してたの。

なにしろレニーサさんのお店つてば、アジトとちょうど正反對。スラムつたつてそれなりの広さはあるから、けっこう歩かないと着かないし。

「寒い」

「もう、文句言わないの！　だいいちルーフェアなんか、けろつとしてるじゃない」

「俺、寒いのが嫌なんだつての」

イマドったらデカいくせに、なっさけないこと言ってる。

だけどルーフェアったら、冗談半分の言葉を本気にしちゃって。

「ねえ、大丈夫……？　あたしの上着、着る？」

「へ？　いや、そこまで凍えちゃいねえって」

慌ててイマドが断るのが、すつごく笑えた。

「『ルーフェアの性格は知ってるだろう』とか言ってたの、誰だつたっけね？」

「ここぞとばかりに、シーモアも突っ込むし」

「てめえらなあ……」

イマドっていつも平然とした顔してるから、いじめるの面白いのよね。

けど、すっかり誤算があったり。

「あああ、ルーフェア、そんな顔するなつて」

無関係なはずの彼女が、困って泣き出しそうになっちゃうんだもん。

「だってイマド、ずっとあつたかいケンディクにいたんだし……」

「分かった分かった！ ほら、もう着くから」

シーモアが、急いで話題ふって気をそらせて。

「ヘンなところに店構えてんな」

「イマド、どこだか分かつてるの？」

「あの階段降りた地下だろ？」

イマドってわかんない。

ルーフェイアもびっくりしたみたいで、彼に尋ねた。

「よく、わかるね……」

「いや、あてずっぽう」

もつとよくわかんない。

ホントこいつ、何考えてるんだろ。

分かっているのは、ルーフェイアが絡むと見境なくなるってことだけで、あとはさっぱりわかんないヤツ。

まあ、悪いヤツじゃないんだけどさ……。

でもルーフェイアとイマド、せっかく並んでみても、カップルって言っより兄妹。

ルーフェイアったらあたしよりまだちっちゃいし、イマドったら学年でもいちばん大きいし。

拳句に何かって言う就跟ルーフェイアの面倒見てるわけだから、ホントお兄ちゃん。

しかも、ルーフェイアがね。

彼女っては何がどうなってるのか、外見以上に中身が子供。頭は

滅法いいしワケわかんないくらい強い　イマドより上　のに、それ以外はもう呆れるくらいなんにも知らないんだもん。イマドが好きでいつもくつついてるけど、本人そういうの、自覚してるかどうかめいっぱい怪しいし。

「お前たち、なにをじゃれてるんだ。早く来い」

遊んでるふうに見えたみたいで、ガルシイが呆れ顔であたしたちを呼んだ。

ガルシイ、あたしたち、ルーフェイアのお父さん、あのジャーナリストの順で階段を降りる。

にしてもこの廊下、暗いなあ。

「お、無事帰って来たか。

　　つておい、ガルシイ、ホントにおめえまで来たのか？」

あたしたちがお店に入ったら、なんだかダグがいて、思いっきり驚いてるし。

「ディアスさんに呼ばれたからな」

うちのリーダーは、まるつきり平気な顔だけど。

でももつとびっくりしたの、ルーフェイアだったり。

「か、母さん?!」

奥のほうからレニーサさんと一緒に出てきた女性をみて、半分硬直してるの。

　　つて、この人がお母さんなのか……。

ルーフェイアとおんなじ金髪碧眼で、並んで立ったら誰が見たって、母娘って言うはず。

Episode : 72

「綺麗な人じゃん」

「ルーフェイアとは、ちょっと雰囲気違うけどね」

あたしとシーモアが囁いてたら、お母さんってばすたすた、こっちまで来て。

「あら、いいとこに来たわね」

「ど、どうしてここにいるの……」

嬉しそうなお母さんと、呆然としてるルーフェイアとが、妙に面白かったり。

「そりゃ、あんた探してたからに決まってるじゃない」

えーと。

なんでルーフェイア探すと、ここのお店に来るのかな？ なんか
ワケわかんないお母さん。

そうこうしてたら、またドアが開いて人が入ってきて。

「カレアナの姐さん、お嬢さんの居場所分かりました」

「うん、ここにいるものね」

「へ？」

入ってきたの、借金の取り立て屋してるリード。

しかもどういうわけかルーフェイアとイマド、この人知ってたみたい。

「あ、昼間の……」

「オヤジ、紅玉と借金との差額分、こいつに返せっての」

「げ、なんで……」

拳句になんか、込み入った事情まであるみたいだし。

けど借金の取り立て屋に借金させるなんて、ルーフェイアったら
凄いかも。

レニーサさんとルーフェイアのお母さんなんて、もう爆笑しまく
ってる。

「リード、今日のあなたはよっぽど運がないみたいね。

初めまして、お二人さん。あたしはレニーサ、一応この主人よ」

「あ、はい、初めまして。

えっと、ルーフェイア「グレイスです」

あ、ルーフェイアったら見惚れてる

けどその気持ち、分かるな。

レニーサさんって薄い茶色の髪に透き通った薄紫の瞳で、しかも
独特の雰囲気あるし。

「確かにこの子、あなたの娘ね。似てるもの」

「そうよ」

ね？ 言っただとおり、どっから見ても可愛いでしょ？」

おばさん、それ親バカ じゃないんだっけ、ルーフェイアの場
合は。

もつとも言われてる彼女のほうは、やたらイヤそうな顔してたり。

「母さん、そういうわけの分らないこと言うの、やめてよ……」
「なによそれ」

まるで母娘漫才。

で、延々とそのまま続きそうな気配に、レニーサさんが笑いなが
ら出てきて遮って。

「それにしても驚いた。昼間のこの子が、ディアスの娘だったなんて」

「父を、知ってるんですか……？」

ルーフェイアが尋ねる。

まあ彼女のお父さん、このスラムじゃ超有名な人らしいんだけど。

「あたしは彼が、ここにいたところから知ってるの。」

けどまさか結婚して、娘まで生まれてるなんて思わなかったわね」

同感。

「親だ」って来たから違和感感じなかったけど、ルーフェイアのお父さんってば独りで歩いてたら、気ままにやってる独身に見えないもん。

「ま、ディアスだもん」

しかもおばさん、意味不明　　だけど妙に納得　　のと言うし。

ルーフェイアの両親って好き勝手やってるみたいだけど、案外これですぐ上手いってるのかも。

Episode : 73

「そうね。らしいといえればいいわ」

「でしょ。」

「そうそう、ディアス、どだった？ さっきも言ったけど、よかったでしょ」

「っておばさん、なんてこと言うのよ……。」

「これじゃルーフェイアが頭抱えるのも、分かってるもの。」

「もつとも当人、なんの話かは判ってないんだけど。」

「ただこのやり取りが、どうしようもないのは分かっているみたいで、お父さんのほうを振り向いて。」

「父さん、何か言って……」

「何が困る？」

「……」

「お母さん以上にすごいお父さんかも。」

「世の中こういう両親は、あんまり多くないだろうな。」

「あなた、大変なご両親持ったみたいね」

「はい、たぶん……」

「レニーサさんの言葉に、半分諦めた顔でルーフェイアったら答えてるし。」

「気持ち、分かるけど。」

「でも、ディアスにガルシイ君にダグ君、まとめて揃ったんだから、たいした話だね。」

「これなら話も進むでしょうね」

「あの、それなんですけど……」
そういえばって顔で、ルーフェイアが訊いて。

「父さんがダグさんの先輩で、ガルシイさんのチームの昔のリーダー……なんですよね？」

「そういうことになるわね」
きわどい質問に、さすがのレニーサさんも言葉を濁す。
でも自分の親のことだけに、ルーフェイアったらすごく気になるみたいで。

「ねえ父さん、両方にいたことあるの……？」
あああ、いきなりずばつと言っちゃう！
さすがのこれには、みんなで思わず沈黙。
当のルーフェイアのお父さんどころか、レニーサさんまで、こわばった表情になっちゃって。

「その、後じゃ駄目かしら……」
そう言うのが精一杯。
「あの、すみません、あたしもしかして悪いこと……？」

あ。
様子に気がついたルーフェイアが、いつもの平謝りモードに入っちゃった。

「ごめんなさい、ごめんなさい！」
こうなると、この後はパターンひとつなんだよね。
まあ、イマドいるからいいんだけど。

「わっ、泣くな泣くな」
「なにもあなたが泣かなくても……」

あゝあ、やっぱり泣いちゃった。

よく分かってないレニーサさんや向こうのリーダーとかが、慌て慰めてるけど、そのくらいで泣きやむルーフェイアじゃないし。

これではかに誰もいなかったら、あたしの出番なんだけど。けど保護者のイマドいるから、いいよね。なんて思ってたら……。

「やれやれ、相変わらずねえ」

言いながら出てきたの、ルーフェイアのお母さん。そういえばホントの保護者、今日は居たんだった。

「気にしすぎなのよ」

うわあ、ルーフェイアったら！

小さい子みたいに抱っこされちゃって……。けど、すごく幸せそう。

「うん」

返事して彼女、泣くのやめちゃうし。

どうみても、すっごい甘えっ子。でも……羨ましいかな？

と、おばさんふつとこっち見て。

「ディアス、この子お願いね」

言うが早いがルーフェイア預けたと思ったら、今度はこっちへ来たの。

Episode : 74

「えーと、ナティエスちゃん……だったかしら？」

「え、あ、はい」

ルーフエイアから聞いてるらしくて、おばさんあたしの名前知ってた。

「いつもありがとね、うちの子の面倒、見てくれて」

「いえ、そんな……あ」

いきなりおばさんに、頭撫でられちゃった。

でも、嬉しいな。

あたしもお母さんにこうしてもらうの、好きだったから。

「いい子ね」

「えへ」

ルーフエイアのおばさんってなんとなく、「お母さん」の雰囲気あるから、あたしもつい甘えてたり。

「今度みんなで、どうか遊びに行きましょう。」

で、結局何がどういうわけで、ここに勢揃いしたわけ？」

ぐるっと回ってようやく話が本題へ戻って。けどなにしろ話が複雑だから、あたしたちみんなで顔見合わせるばかりだった。

だって、いったいどこから誰が話せばいいんだろ……？

「やあねえ。まさか、誰も概要分かってないの？」

「そんなことないわよ！」

おばさんの茶々に、向こうでお父さんのお膝に抱っこ（！）されてたルーフエイアが、珍しく強い調子で抗議して。

「だから、子供たちが殺されちゃった話で……」
「やっぱりね」

確かルーフェイアのお母さんって、このスラムの出身じゃなかったはずだけど、話はだいたい訊いてるみたい。

まあ、レニーサさんあたりが話してくれたんだろうけど。

「いちばんの事情通はゼロール、あなたかしら？」

とりあえずもう1回、整理して話してちょうだい」

言葉は穏やかだけど、殆ど命令みたいなレニーサさんの言いように、慌ててあのジャーナリストが説明はじめて。

「話すって言うてもなあ。さっき両方に言っただけだし。

まあ要するに、チビちゃんたちが殺されたのは、『仕組まれた』んじゃないかと思ってね」

それからあたしたちにさっき言ってた、ホームレスが「中年の男が子供を殺した」って話をする。

「とはいえ、証拠がなくてなあ……」

そうなのよね。

証拠がない以上、このジャーナリストの狂言ってセンも否定できないもん。

「けどそうすると、俺らんとこのノアを殺したのは、いったい誰なんだ？」

ガルシイ、お前らじゃねえだろうな」

「だからやってないと、前から言ってるだろう」

なにしろ何度もあつたやり取りらしいから、うちのリーダーが憚然とした調子で答えて。

そこへルーフェアが、おずおず口を挟んだの。

「あの……その子は分かりませんが、ウインを襲った人のはあ
たし、武器とかなら詳しいこと、覚えてます……」

「ほんとなの？」

レニーサさんがびっくりして訊き返すと、ルーフェアしっか
りうなずいた。

ひとつ深呼吸して、あの時のことを思い出すみたいになが
ら彼女、話し出す

Episode : 75

「武器は短剣でしたけど、太刀筋は訓練されたものでした。それも二年ほど前に、ロデステイオに吸収された西の小国、ハニア独特のもんです。ですから襲ってきた人たちは少なくとも、こちらや向こうのチームとは無関係だと思います。

それに死んだ仲間の遺体を、高位の炎魔法で焼き尽くした仲間がいました。この辺りから考えても、どこかで訓練を受けたプロか、それに該当する人間だと思います。

もちろんどちらかが、そういう人を雇ったなら話は別でしょうけど……」

えーと。

なんかルーフェア、凄すぎ。

「……お前、こーゆことになるって鋭いのな」

イマドも（と言うか多分、ここにいる人全部）同じこと思ったみたいで、そんなこと言うし。

「え？ でもこーじゃないと、いざって言う時に生き延びられないし……」

見かけとはうらはらに、ルーフェアってば戦闘向きなの、改めて思い知っちゃう。

どこでどう訓練受けたかわかんないんだけど、彼女ってば同学年のAクラスなんか豪快に引き離して、上級傭兵並の強さだし。

もっとも彼女のお父さんってばあたしさえ名前知ってるディアスさんだったし、お母さんもなんか軍事関係者らしいから、環境なのかな？

「ハニアの連中……？」

そうすると、絡んでるのはエマンシオ・ファミリーかしらね」
ルーフェイアの一言から、レニーサさん何か思い当たったみたい。

「何かあるのか？」

「ちらつと聞いたただけなんだけど、ハニアの元軍人が、まとめて雇われたらしいの。」

で、その雇い主がエマンシオ・ファミリーっていう話なのよ」

さすがレニーサさん……。

この人に訊けば大抵のことは分かるって有名だけど、ホントに情報通。

どこで仕入れるのかなあ？

素性は知らないわけじゃないけど、それにしただっていろいろ知りすぎ。

「何か証拠はあるのか？」

「ごめんなさい。それこそ噂だけで、なんの証拠もないのよ。」

だいいち向こうの連中だって一応プロだから、そう簡単に尻尾は出さないわ」

そりゃそうよね。

そう簡単にシッポ出すようだったら、このスラムじゃ生きていけないもん。

「あの、すみません。その『エマンシオ・ファミリー』って……？」
あ、いけない。

あたしたちはここ育ちだから納得してたけど、余所者のルーフェイアたちにはこの話、なんだかわかるわけじゃないじゃない。

「ちゃんと説明すると、長くなっちゃうんだけど……」

とりあえずあたし言いかけたけど、やっぱりそこで詰まっちゃって。

あたしも今でこそここが本拠地だけど、もともとスラムの生まれじゃないから、『完結に説明しろ』って言われると難しいのよね。けどどう言おうか悩んでたら、ガルシイが代わりに説明してくれたの。

「このスラムのグループは、おおむね3つに分かれる。

ひとつは俺たちみたいな、若い人間のグループ。これはいちばん人数もグループの数も多い。

それから昔からここに根を張ってる、大人たちのグループ。こっちは数はそこそだが、全体で統制が取れてるし訓練もされてる。そしてもうひとつが、『ファミリー』をグループの後ろにくっつける連中だ」

最後のファミリーの説明で、ガルシイってば露骨に蔑む調子。

「どこがどう、違うんですか……？」

けどまだいまいちピンと来ないみたいで、ルーフェイアったら思案顔だし。

「ファミリーって言うのは、新参者なのよ。

大戦のあとからここへ入りこんできた連中でね、当然ここの不文律なんて無視。やりたい放題でこの界隈の店からお金を巻き上げたり、住人を脅したり殺したりしてるわ」

補足説明するレニーサさんも、見下した表情。

まあここに住む人間なら、誰だってそうするだろうけど。

Episode : 76

「なんだってそんな連中、好きにさせてるんです?」

「イマド、あんたいきなりそれ訊くかい」

でもシーモアの言うとおり、度胸あるう。

いろいろニブい(ごめん!) ルーフェイアならともかく、イマド
って基本的に、空気読むのは上手いもん。

なのにわざわざ訊くんだから、ホント肝が据わってるっていうか
……。

「俺らここの育ちじゃねえんだ。説明してもらわなきゃ、何もわか
んねえだろ」

「そりゃそうだけど」

それにしたって普通、こうは訊かないよね?

「ま、イマドの言うことにも一理あるね。」

ようするにその連中には、おいそれと手が出せないのさ」

「なんでだよ?」

シーモアの説明に、またイマドったら突っ込むし。

けどこうなると、全部話さないと納得しないかなあ?

「いいわ、あたしから説明するから。」

どうせボウヤたちだけじゃなくて、カレアナも訊きたいんでしょ
うし」

「あら、よく分かったわねえ」

ルーフェイアのお母さんたら、妙に嬉そう。

けど、このお母さんも不思議。いい加減なのに、妙に隙がなくっ

て。

まあ娘のルーフェイアもなにをどうやったのか滅法強かったりだから、納得といえば納得なんだけど……。

「ファミリーが新参者だっていうのは、さっき聞いたわよね？」

「あ、はい」

「ええ」

お父さんの膝に抱っこ（！）されながら、でもルーフェイア、ちゃんと話は聞いてみたい。レニーサさんの質問に、イマドと一緒に返事してるもん。

「その連中がね、ここへ足がかり掴むのにサツを利用したのよ」

「利用……？」

イマドとお母さんはピンときたみたいだけど、ルーフェイアの方は首をかしげてる。

それにしてもどうして彼女、ここまでピュアなのかなあ？

あの強さと比べると、ものすごくアンバランス。それになにより、すぐ泣いちゃうし。まあ戦ってる最中は、絶対泣いたりしないんだけど。

「そうね、お嬢ちゃんたちには分かりづらいかしら？」

「つまりはね……」

レニーサさんが、あたしたちスラムの人間には当たり前前のことを話し始めて。

当然といえば当然なんだけど、スラムの住人は昔時から、警察とは相性がよくないの。

けど向こうが本気でかかってくるのは、何かあった時だけ。普段

スラムの中での話には、外へ被害が及ばない限り見て見ぬふり。
だからこのスラム、昔から犯罪集団の本拠地になってるのよね。

いいか悪いかは、よくわかんないけど。

「ただね、だからこそみんな　ここじゃクリアゾンって呼ぶんだ
けど、ともかくここを大事にしてきたわけ」

そうそう

他所へ行けば無法者の集団だけど、「クリアゾン」のおじさんたち、このスラムの住人にとっては頼れる存在だもん。

「悪さするやつがいれば捕まえるし、サツが攻めてくれば食いとめてくれる。クスリも売っちゃいるけど、小さい子供には渡さないわ
それにいくらかのお金払って頼んどけば、ヘンな客が来ても追い払ってくれるしね」

これもレニーサさんの言うとおり。

あのおじさんたちにちゃんと頼んでおけば、女の人が一ひとりでも
お店切り盛りできるもん。ほかにもうしょうもないトラブルあったときかも、きっちり代わりにカタつけてくれるし。

しかも別に報酬はナシ。

強いて言えばここの不文律を守ることと、何か頼まれた時に引き受けること……かな？

だから案外このスラムって安全だし、あのおじさんたちもここにいる限りはチクられるなんてこと、ないし。

Episode:77

「ただその分、クリアゾンはサツとは最悪に相性が悪いの。目の敵にされてるって言うてもいいかしら。」

で、そこへ新参者のファミリー連中が、つけこんできたのよ」「つけこんだ……?」

あらら。

ルーフェイアったら、まだ話が見えないみたい。

「そ。つけこまれたの。」

ファミリー連中が、警察と結託しちゃったのよ」

「そんな……!」

あ、やつと通じた。

「抜け目ねえな。まあこの国、サツも軍もたるんでるからなあ」「イマド……。」

確かに言ってることはウソじゃないけど、それを堂々と言っちゃうんだから、どういう神経してるんだろ?

この図太さ、あのミル　今はアヴァンに帰ってる　といい勝負かも。

「でも、警察って……普通は取り締まるほうなのに……」

「だから賄賂さ。そのファミリーとやらがサツに金ばら撒いて、何やっても平気なようにしちまったんだよ。」

なにせこの国ときたら、軍のヤツもサツの連中も、空っケツでぴーぴー言ってるからな。はした金だって、簡単にまるめこまれちゃう」

「……………」

ダグさんの説明に、よっぽどびっくりしたみたいでルーフェイア、黙っちゃうし。

「でもそうすると、なんだって連中が、ガキ殺したりしたんですかね？」

「そこなのよね……」

これにはみんなで思案顔。

だってファミリーの連中が狙うとしたら、普通はクリアゾンの関係者。なのにくら凶悪（笑）って言えども、ひとつ下にあたるあたしたちのとこ狙うなんて、なんか辻褄あわない。

「俺らをぶつけ合って、潰すのが目的じゃねえか？」

自分で言うのもなんだが、俺らとガルシイのチームはクリアゾンを除きや、ここじゃ最強だ。

俺らがいなくなりや、あとは雑魚だけってことになる」

「え〜？」

ダグの言葉に、思わずそんなこと言っちゃったり。

けどそう思ったの、あたしだけじゃなかったみたい。

「潰して……どうする？」

「ディアスの言う通りよねえ。クリアゾンの方を潰すんならともかく、悪いけどあなたたちを、そこまでして潰す必要があるとは思えないわ」

だよね。

なんやかんや言ったってあたしたち、所詮はただの不良集団。そりゃ強盗とかクスリはやらないから、その辺のグループよりはマシだけど、筋金入り（？）のクリアゾンのおじさんたちとじゃ、やっぱり違うもん。

「姐御、そこまで言わなくなつて」

「事実だろう？」

ダグのぼやきにうちのガルシイ、きつちり突っ込み入れるし。

「まだウラがあるんですかね？」

「可能性はあるわね。ここじゃなんでもアリだもの」

イマドの言葉をレニーサさんが肯定して。

「やれやれ、ヤツらをとっ捕まえて口でも割らせりゃ、どうにかなるんだろうけどな」

「どこまで行っても頭の回転が鈍いやつだな。

仮に捕まえられたとしても、連中が口を割るわけないだろう」
ガルシイってば、突っ込み鋭い鋭い

「ンなもん、やってみなきゃわかんねえだろ」

「それで失敗でもしたらどうする？ 今度はこの程度の騒ぎじゃ済まないぞ」

ダグの言い分に、うちのリーダーったらことごとく切り返すし。
だけど面白がって見てたら、ルーフェイアのお母さんがとんでもないこと言い出したの。

Episode : 78

「確実に口を割らせる方法なら、あるけど？」

それにしても悪戯っぽい笑顔でそう言うこの人、とても娘がいるようには見えないなあ。

「本当に？」

こっちの人間もそうだけど、連中の口の堅さ半端じゃないわよ」「大丈夫、喋らせる必要なんてないもの」

これには尋ねたレニーサさんも合わせて、みんなで顔を見合わせちゃって。

「どうやってだろ？」

いちおうダンナさんと娘のルーフェアと、あとどどういうわけかイマドは意味がわかってるみたいだけど……。

「よく分からないわ。ちゃんと説明してもらえる？」

「もちろん」

それからちよつとだけルーフェアのお母さん、なんとも言えない表情で話し出して。

「あたし、念話できるのよ。」

だからそれ使えば、相手がだんまりでも、それなりに読めるわ」

「それって……」

とんでもない言葉に、思わずみんな一歩引いちゃったり。

「まさか、今も　？！」

「全部じゃないけどね」

おばさんが、さらっと答える。

「でもほら、街中で他人のお喋りが聞こえたり、するでしょ？ あたしたちにとっては、そんなもののよ。」

だから集中してないと分からないし、聞こえても背景知らないから、意味がないの」

「そうなんだ……」

そゆのつて、なんでもかんでも分かっちゃうのかと思ってたけど、ちよつと違うみたい。

「そういう家系があるとは、聞いたことあつたけど……」

「まあねー、うちの家系、おかしいから」

言つてルーフェイアのお母さん、けらけら笑う。

「確かにあなた見てると、おかしな家系つてのは納得出来るわね」

「ひどいわね」

「あらそうでしょう？」

けどそんな反則技が本当にあるなら、手がないこともないわ」

レニーサさん、すごいかも。

あたしたちが戸惑つてる間に、あっさり順応しちゃつてるもん。見かけによらず修羅場くぐつてるつて聞いたことあるけど、ホントだったのかな？

なんて思つてるうちに、レニーサさんがちよつとだけ真剣な表情になったの。

「エマンシオ・ファミリーに繋がるセンなら、心当たりがあるのよ」

「姐さん、マジでなんでも知ってますね」

ダグじゃないけど、ほんとほんと。

今度どこから情報仕入れてるのか、教えてもらおうかな？

「半分商売だもの。」

まあそれはともかく、最近格安のクスリばら撒かれてる話は、知ってる？」

レニーサさんの言葉に、みんなが一斉にうなずいて。

当たり前って言えば当たり前だけど、クスリって値段が決まっている。なのにここんとこそれ無視して、激安で売りさばく連中がいるって話だった。

で、大騒ぎになってクリアゾンのおじさんたちが、血眼になって探してるんだけど、なんかよく分かんないって言うの。

「もしかして、そのクスリが？」

あたしたちの問いにレニーサさん、ちょっとだけ嘲って。

「エマンシオ・ファミリーが、最近ものすごい量を買って運び込んでるのは、確かなのよ。」

で、それと同じ頃から出回った、格安のクスリ。おかしくない？」

「あ……」

この町へ入ってくるクスリの量は、ツテのある人ならだいたい分かる。だから出回る量も、見当がつく。

それが急に増えて、しかも買い付けた連中が分かっているとしたら……。

Episode : 79

「でも、現場見たやつはいないって聞いてますけど？ 証拠もないし」

「それなんだけどね」

何か知ってるらしくてレニーサさん、ちょっとだけ嘲って。

「どうもそのばら撒いてる人間、子供らしいのよ。エマンシオ・フアミリーが雇って、どこからか連れてきてるらしいの」

聞いた瞬間、それまで黙ってたあのジャーナリストが、はっと顔を上げたの。

「どうやらゼロール、あなた何か知ってるみたいね」

「見たことはないんだがな」

それから、この人がかいつまんで説明してくれて。

「俺は外のスラムも取材してるんだが、そこで話を聞いたんだ。

最近こっちのスラムの入り口で、クスリを売るバイトがあるらしい。けっこう実入りがいいうえ、上手くやればちよろまかせると、話してくれた子は言ってた」

「なるほどね……」

思わず納得。

このスラムでも入り口のほうは、けっこう人の出入りが多いの。役人街の不良なんかも来て、店で遊んだりしてる。だから他所から人が来てても、分かんなかったり。

しかも外のスラムの子は、元からけっこう来てるから、よけいに分らないし。

「でも、なんだって誰もチクらないのか？」

シーモアが不思議そうに言って。

「格安だからでしょうね。そんないい売り物、ここじゃ秘密にしておくものでしょ」

「あ、そっか……」

チクったらもちろん、クリアゾンのおじさんたちがすっ飛んでくわけで。でもヤク中の人は、ちょっとでも多くクスリが欲しいんだから、格安のクスリが消えたら困る。

だから誰もチクらなかった、ってことみたい。

「ともかく、その子供たちが売ってる麻薬の出所は、エマンシオ・ファミリーだと思うのよね」

「じゃあ、その子を辿れば、何か分かるってわけだ」

「がぜんみんな張り切っちゃって」

ただあたしはなんか、イマイチ張り切れなかったり。

「でも、どうやって辿るの？」

上手くその子が見つかったって、もともとはファミリーと無関係なんでしょ？」

みんなに訊いてみたり。

「どうにかして、追加を取りに行かせる……とか？」

「どうだろうな。売り切りだったら、それはないぞ」

「あ、そっか……」

いい手が思い浮かばない。

そのとき、イマドが言ったの。

「思っただけどよ、そのガキ、売り上げはぜったい持ってくんじゃ

ねえか？」

あっと思う。

クスリもらって商売して、そこから小遣いもらってるわけだから、売り上げを持ってかないワケがない。もしネコババでもしようものなら、命がないし。

「追加を取りに行けばよし、行かなくても尾行すれば、ある程度の事は分かるな」

「だよな」

「だいたい話がまとまってくる。けど……。」

「誰が行くの？」

訊いてみたの。

そういうクスリ売りじゃ、見張りがいるかもしれないし。それによっぽど上手に駆け引きしなくちゃだから、ちよっとやそつとじゃムリだろうし。

「けどあたしたちの仲間ですういうのができそうな人間、みんな顔割れちゃってる。」

でもそのとき。

「イマド、あなた行きなさいよ」

あたしを含めてみんなで悩んでたら、ルーフェイアのお母さんがいきなりそう言ったの。

Episode : 80

「げ、なんでです」

「あなた、そーゆーの出来るでしょ。しらばつくれるのはナシよ」
「なんの話かな？」

「なんかよくわかんないけどイマド、すっごい無然とした表情してる。」

「同類の目が、誤魔化せるわけないでしょ」

「わかりましたよ、行きますって」

「うーん、謎。おばさん「同類」って言うてるけど、でもおばさんと同類にされるって、なんかすっごくイヤかもだし。」

「別におばさんが悪い人とか言わないし、すっごい美人だけど、なんか微妙にイヤ。」

「でもイマドが困してくれるみたいだから、いいかな」

「ちよつとカレアナ、いくらなんでもスラムと無関係な子を巻き込むのは……」

「どの子ならいいかってこと、あたしはないと思うわ」

「レニーサさんの言葉に、ずばつとお母さん、切り返して。」

「それに心配だったら、周りにこっそり人を置いとけばいいでしょ。もっとも彼もシエラ学院の学年次席だから、よっぽどじゃなきやどうってことないわよ」

「シエラ学院……?!」

「あ、そう言えばここの人たち、イマドとかルーフェイアの素性は、知らないんだっけ。」

「まさかシーモア、お前より上なのか？」
「悔しいけどね」

ガルシイに訊かれて、シーモアが答えて。
でもほんと、イマドってサボってるくせにしっかり次席なのよね。
シーモアも頑張ってるしスジもいいと思うんだけど、差が歴然としてて、どうしても追いつけないんだもん。

「そうは見えねえけどなあ」
「ほつといてください」

さすがにこう言われちゃうと、イマドもちょっとカチンと来るみたい。

あたしも今度、言ってみようかな？

「だけど次席ってことは、まだその上がいるんだろう？ 学院ってのはつくづく、とんでもないところだな」

ダグさんが、妙な事で感心して。

「けどよ、その首席ってのは誰なんだ？ お前よりゴツいやつなのか？」

この言葉にあたしとシーモアとイマド、思わず顔を見合わせちゃった。

「うちの学年の首席は……」
みんなで指差してみる。

「マジかよ」
「ありえん」

ダグだけじゃなくて、うちのリーダーまでそんな台詞。でも、気

持ちは分かる。

だって指差した先ったら、イマドよりずっと小柄で華奢な、きよ
とんとした顔のルーフェイア。

それも、お父さんのお膝の上で。

「あの、どうか……なさったんですか？」

「世の中ってのは、やっぱどうかしてるぜ」

今度ばかりはダグの言葉に、あたしも大賛成だったの。

Episode : 81 追跡

I m a d

「やれやれ、今晩は徹夜か？」

「どうだろ……」

裏通りで座りこみながら、俺らは目当てのヤツを待ってた。

ゼロールさんの話じゃ、この辺に例のファミリーとやらが絡んでる、ヤク売りのガキがよく来るらしい。

ただ、毎晩じゃないってのがなあ。

運が悪けりゃ、寒い思いしたただけ損ってハメになる。

もつとも2・3日に1回は顔を見せるっていうから、そう長期戦にはならずに済みそうだった。

にしてもさつきといい今といい、どうも今夜は寒空に座りこむ機会に事欠かない。

しかも言い出しっぺのルーフェアのお袋さんときたら、親父さんといっしょに、ちゃっちゃと消えちまいやった。

「寒く……ないよね？」

無邪気に身体をくつつけながら、ルーフェアのやつが訊いてくる。

「寒くねえ寒くねえ」

どうもこいつ、「抱き癖」がついてるらしい。

赤ん坊が母親に抱かれると安心して泣きやむのと一緒に、人にくっついてるのをやけに好む。さつきも何気にお袋さんに抱かれてたり、親父さんの膝の上にいる始末だ。

しかもその調子で俺にまでくっついてくるわけだから、かなりヤ

バい。

そりやまあ、悪かねえけど。

どっちにしてもこいつがお子様体型で、よかったってやつだろう。

とりあえず妙に嬉しそうなルーフェアはおいといて、周囲の気配を探る。

通りは夜中とは思えないほど、人が出てやがった。しかもその大半が、俺らみたいなガキだ。

大方は俗に言うストリートキッズ、つまり宿無しだ。

あとは多分、家はあるけど悪さしてる不良たちか。

たむろつてはしゃいでるやつらもいるし、ただ無言で座りこんでるやつらもいる。

中には、虚ろな目のヤツまでいやがった。

そのストリートにたびたび大人が紛れ込んで来ちゃ、適当な誰か

女子だけってわけじゃない　に札幌渡して連れてくのも、

あたりまえみたいに繰り返される。

「まったく、誉めていいんだかどうか」

「そうだね……」

俺がなんとなく言ったことに、意外にもルーフェアは反論しなかった。

そうだったっけな。

外見と性格とでつい忘れちゃうけど、こいつはなにせ戦場育ちだ。それも市街戦なんかまで経験して来てるから、かなり修羅場を見てるんだろう。

「やっぱり、戦争で両親が死んじゃったのかな……」

「それだけとは、限らねえだろうけど。」

おい、もしかして来たんじゃないか？」

それまでとは通りの雰囲気、微妙に変わる。

「え、どこ？」

「あー、お前にはこういうのは、分かんねえか」

バトルにかけちゃ天下一品だけど、これはそれとはまったく違う。だから把握しづらいんだろう。

気配の流れる先に、視線をやる。ルーフェイアもそれには気づいたらしくて、同じほうへ視線を向けた。

「イマド、あれ……！」

「キマリだな」

どうみてもラリってるやつらが立ち上がったのを見て、確信する。クスリ売りやらは、ぜったいこの先だ。

もう一回周囲の気配を探る。

大丈夫そうだな。

実言えば万が一の時のために　そんなことがあるとは、ちょっと考えらんねえけど　ガルシイさんやダグさんなんか、手下連れて周囲にそれとなく張りこんでくれている。

でも、用心に越した事はねえだろう。

Episode : 82

「ルーフェイア、行くぞ」

「うん」

俺らも立ち上がったて、そいつのあとをこっそりつける。

そのうちヤク中の野郎は、細い路地の入り口で立ち止まった。

「何してるのかな……」

「悪い、ちと黙っててろな」

ルーフェイアのヤツを黙らせて、集中する。

あ、だからルーフェイアのおふくろさん、俺を名指ししたのか。

路地の入り口で、合言葉のやり取りがされてる。けど小声だし、ヘタに近寄ったらそんだけでバレるから、ふつうなら聞き取れねえ。でも俺みたいのだと、離れてても気合入れれば、けっこう分かるわけ。

自分でも分かんなかったけど、たしかにこういう役には、俺みたいのはうってつけた。

「イマド……？」

心配になっただらしくて、ルーフェイアのヤツが訊いてくる。

「あいつらの合言葉、聞いてた」

「分かった？」

「ああ」

こいつが俺の返事に、ほっとした表情になる。

「んじゃ行ってくるわ。お前はここで待ってるな」

「うん」

こーゆーキワドイやり取りの時に、こいつのボケっぷりは下手すりゃ致命的だ。間違っても、連れてくわけにやいかなかった。

ホント言えば、さいしょっから俺一人で来りゃいいんだろっけどな。

ただイザって時に独りだと、何かと行動が制限される。学院の訓練とか任務でも、よほどのことがなきゃ単独行動は厳禁だ。

その上今は俺もルーフェイアもメインの武器を持ってないから、尚更気をつけないとヤバイ。

「何かあったら、すぐに誰か呼ぶんだぞ。俺でもシーモアたちでもいい。」

あと手、出されそうになったら、容赦なくやれよ。いいな」

「……わかった」

こいつの場合こうやって言い置いておかないと、命に関わらない限りは、絶対ためらって手を出せない。

「……気をつけてね？」

「平気だって」

前のやつが離れてから少し間を置いて、俺はそいつに近づいた。

「なんだ？ 見かけない顔だな。何の用だってんだよ」

「雪が降りそうだから」

この言葉で、こいつの顔色が変わる。

「誰から聞いた？」

「誰でもいいだろ。」

「幾らだ？」

いきなり本題に入る。

クスリ売ってるヤツはせいぜい俺と同じか、もう少し年下だ。身長も俺とかなり違うし、ひよろひよろしてて風に飛びそうだった。これなら荒っぽくいったほうが、たぶん早いだろう。

「だから、誰に訊いた」

「うるせえな。ここなら安く手に入るって訊いて、わざわざ役人街から来たんだ。

売るのが、売らねえのか？」

睨みつけて脅す。

「金だったら、ちゃんとあるんだぜ」

言いながら用意してあった　　というか、ルーフェイアのおふくろさんが無造作に渡してくれた　　高額紙幣の束を、これ見よがしにちらつかせる。スラムじゃまずお目にかかれないような額だ。

もちろん俺みたいな子供が持つてるのも不自然といえは不自然だけど、「役人街」の一言が効いたのか、こいつは不審がらなかった。

Episode : 83

「でも、知らねえやつに売ったら、ボスに……」

「こないない売り場、俺だって喋らねえよ。」

それにもし売ってくれるなら、お前にも少しやるぜ。手数料ってことで」

こいつの目が輝いた。

「そ、そういうことなら……」

恐る恐るって調子で、小さな包みがひとつ、差し出される。

ふうん、2、3回分か？

「これで……300ルルシなんだ」

確かに安い。シーモアたちから訊いてた相場の、半分以下ってヤツだ。

ただクスリが目的じゃないから、ここですんなり買っわけにいかなかった。

「おい、待てよ。これだけ出してんのに、これっぽっちか？
違う方向で突っかかる。」

「え？ いや、あとこれだけなら
さらに包みが、20ほど出された。」

「今日は、これでぜんぶなんだ」

「じゃあ、どっかからもらって来いよ。10や20どころか、50
だってまとめて買っぜ」

「そう言われたって……」

「ざけんなっ！」

可哀想つつや可哀想だけど、こいつの胸倉をつかんでナイフをつきつける。

「客が買うつて言つてんだ。用意するのが売人の仕事だろ。さあ、さっさともつてこいよ」

「で、でも」

慌てるこいつの首筋に俺はナイフをなぞらせた。

ごく浅い傷がついて、紅く染まる。

「イヤなら、お前なんざ殺して、ありったけ持つてつてもいいんだぜ。」

こつちが機嫌よく金払うつて言つてんだ。さっさとどうにかしろ」

「ま、待つてくれよ！ あ、明後日なら！」

こいつの命乞いに、俺はナイフを引いた。

「きよ、今日はもうダメだけど、次なら持つてくるから！」

「ホントか？」

クスリ売りが、必死に頷く。

「次が明後日なのか？」

「あ、いや、詳しい事はその包みの中に、入ってるからさ」
要するに、やたらと口にしちゃダメなんだろう。

ここら辺が潮時と見て、俺も折れる。

「ふうん、まあいいか。とりあえず、いま持つてるだけでガマンしてやるよ」

「う、うん」

ありったけ受け取つて代金払う。かなりの量だ。

「ホントにもう、これ以上ないのか？」

「ないよ……。ボスからもらったぶん、それでぜんぶなんだ。今日はもう店じまいだよ」

「そうか」

だとすりゃ、こいつは売り上げ持って、ボスんとこへ行くだろう。

「こんども、お前が来んのか？」

「分からない。でもたぶん、違うやつだと思う」

どうやら、毎回違うヤツが来るほうが多いらしい。見つからないわけだ。

「ともかく、悪いけど俺帰るよ。売れたんだ、長居はしたくないし」
言って、クスリ売りが路地を出た。

俺も続いて路地を出る。ルーフェイアが、そっと近寄ってきた。

Episode : 84

「大丈夫？」

「ああ。多分上手くいった」

そう答えながら気配を探る。

あのヤク売りの後ろを、シーモアの仲間たちが尾けてるのが伝わってきた。あいつらがしくじるとは思えねえから、半分以上は上手くいったってところだろう。

それからやつと俺は気付いた。

ルーフェイアのやつが、微妙に離れてる。さっきぺたぺたくつづきたがってたのとは大違いだ。

あ、なるほど。

こいつから僅かに怯えが伝わってきて、俺は理由を把握した。どうもヤク売りとのやり取りが、シヨックだったらしい。

「ごめんな、驚かせちゃって」

華奢なこいつの頭を撫でてやると、やっとな安心した顔になった。

ほんと、ガキなんだよな。

ただ可愛いのも確かだ。

「おふたゝりさん」

ひょいっとウインが顔を出してきた。しかもにこにこしてやがる。

「兄ちゃん、すっかりだね」

このガキ、けっこうマセてる。

「やったじゃん、こんな綺麗なねえちゃん相手でさ」

「お前にはやらねえからな」

間じゃルーフェイアが、きょんとした。なにをどうやっても鈍いこいつには、このやり取りの意味がわかってない。

で、妙なことを言い出しやがった。

「……ウイン、何かいいことあったの？」

「いいことって……どうしてそうなるんだよ……」

「だって、なんかにこにこしてるから……」

ウインのやつが、見事なくらいに沈黙する。

もつともこんくらい鈍くなきゃ、あんなふうに俺にくつつけないだろう。

「そ、そう言う意味じゃなかったんだけど……」。

とりあえず、武器」

どうにもリアクションの取れなくなったウインが、間を持たせようと武器を差し出した。

さっき俺らが預けておいたやつだ。

「悪いな」

「ありがとう」

「別に」。オイラ、持ってたただけだもん」

口ではそう言いながら、ウインのやつは嬉しそうだった。

自分が役に立ったってのがよかったんだろつ。

それにしてもやっぱりこれがないと、今ひとつ落ちつかない。

ルーフェイアもその辺は俺と同じかそれ以上らしくて、しっかりと握ってやがった。

「今さ、みんながあいつ、尾けてるんだ。」

で、連絡あるまでオイラたち、レニーサさんの店へ帰ってろっ
て」

「そうか」

確かに俺らじゃ、これ以上はなにも出来ないだろう。

「さっさと行こうよ。オイラ、冷えちゃった」

「んじゃ向こう着いたら、なんかあったまるもん作ってやるよ。何か欲しいもんあるか？」

ウィンがいつちよ前に腕組みしながら考えこんだ。

「んと、なに頼もうかな……」

「イマド、あたし、さっきのスープ……」

意外にも、ルーフェイアの方からリクエストが出る。

「さっきのつて、ナティエスが作ってたやつか？」

「うん」

こいつがわざわざ言うなんざ、よほど気に入ったんだろう。

「よし分かった。

レニーサさんのところに材料あるかどうかわかんねえけど、どうにかして作ってやるよ」

「え、じゃあオイラのリクエストは？」

「後だな」

「ひっで〜！」

騒ぐこいつは放っておいて、俺らはレニーサさんの店へ向かった。

Episode : 85

Seamore

「イマドってさ、よくわかんないよね」

「それだけ食わせモンってことさ」

イマドのヤツがうまいことやって、売り上げ持って走るヤク売りを、あたしらはつけてた。

っても普通の尾行なんかじゃない。

こっちもそうだけど、向こうだってこの辺にはそれなりに詳しい。だからちよい、変わった方法をとった。

うちのチームと向こうのチーム、総勢60人近くを2人組みで、要所要所の街角に立たせるって方法だ。

最初の組が顔を確認したら二手に分かれてひとりが尾行、もうひとりは裏道を通って、次に行きそうな場所へ待機してる組へ知らせる。あとはこの繰り返しだ。

この方法だったら次々尾行が変わるから気付かれにくいし、見失う確率もかなり低い。万が一予想と違う方向へ行っただとしても、尾行してるほうが次の連中に知らせるだけだ。

それに手の空いた連中を使って、関係ない方向に待機してる連中を集めることもできる。

大人数ならではのやり方だ。

ま、学院で教わったやり方だったりするんだけどね。

そう言や学院の規定になんか、「学院内で習ったことを」とか言う項目があった気もするかな？

まあどっちにしたってバレやしないだろうから、今回は無視だ。

「ナティ、あいつ5丁目へ行くんじゃないか？」

「そんな感じだね」

あいつが妙なところへ入ったのを見て、うちらはすぐに感じた。他の場所ならこの敷地内をわざわざ突っ切ったりしない。

「そしたらナティ、先回りして知らせてくれ。」

あたしはこのままつける」

「わかった。気をつけてね？」

ふわっとナティが駆け出した。

やっぱこいつ、度胸あるな。

つけてる相手を追い越すなんざ、そうそうできる芸当じゃない。

けどナティのヤツは「ちょっと急いでる」ふうで駆けてって、あっさり追い越してみせやがった。

そのままその姿が、敷地の向こうへ消える。

あたしはそのまま後をつけた。

ずっと昔に「なんとか開発計画」で建てられたって言う、2棟づつ向かい合わせに並んだ古アパートの間は、やけに見通しがいい。いちばん見つけやすい場所だろう。

もつともここは抜け道になってるせいで、それなりに人通りがある。やたら近づきさえしなけりゃ、あたしもただの通行人だ。

案の定まだガキのヤク売りは、5丁目の方へ抜けた。

あとはここを抜けた先のT字路をどっちへ行くかだけど、当然そこは要所だから仲間が居る。

割合簡単だったじゃん。

もうちよつとややこしいことになるかと思ったけど、予想が当た

ったせいで簡単に片付いちまった。

敷地を抜けて、また裏路地へ入る。

この辺は同じスラムでもショッピングモールに近いせいで、雰囲気は歓楽街だ。

問題のＴ字路まではもう目と鼻の先だった。

待機してるヤツや、ナティがいるのまで見える。

けど、その時。

後ろに気配を感じて、とっさに前へ身体を投げ出す。さっきまであたしがいた場所を、何かが薙いだ。

もっともあたしだって、そうそう負けちゃいけない。なにせこっちは学院生だ。

勢いを利用しながら手を付いて前転して、その反動で上手く起き上がる。ついでにその時には、愛用？の短銃が手にあるって寸法だ。そしてそのまま後ろは見ずに、カンで撃った。

押し殺したみたいな悲鳴が上がる。

Episode : 86

殺ったか？

特製の弾仕込んだのがよかったらしい。

警戒したまま、あたしは初めて後ろを向いた。

ここらじゃあんまり見かけない服装の男が、顔から胸にかけて弾を受けて倒れてやがる。バカとしか言いようがないけど、あたしが子供だと思って油断したんだろう。

でもとどめを刺そうとしたその時、また気配を感じた。

こんどはとつさに横に避ける。

つて、うそだろっ！

飛び退いた先にもうひとり剣　　というか、これは青龍刀って類か？　　を構えてるなんざ、よほど運が悪いとしか言いようがない。

さすがにケガは覚悟する。

青龍刀が振り下ろされた。

？

刃が来ない。

代わりに激しく金属がぶつかり合う音。

「いい大人が、子供相手になにやってんのかしらねえ？」

同時にこの状況じゃ、呆れるしかないほどのんびりした調子の声が響いてきた。

目の前を金髪が踊る。

「ルーフェイアの……？」

「ケガないわね？」

視線は連中から外さずに、この人が訊いてくる。

「あ、はい」

「よかったわ、間に合ったわけね」

割って入ってくれたのはルーフェイアのお袋さんだった。

そのうえウソみたいな話だけど、襲ってきたやつが持ってた青龍刀の刃が、すっぱり切り飛ばされてる。

この人が持つてるのは、青龍刀なんかには比べたらオモチャみたいに見えない太刀だ。

それで、あの分厚い刃を両断してみせたってのか？

よほどの実力がなきゃ、こんなマネできつこない。

「ちょっと待っててちょうだいね。こいつら片付けるから」

あたしを後ろにかばうみたいにして、ルーフェイアのお袋さんが無造作に立ちはだかった。

青龍刀を両断された男が、もうひとつ背負ってたほうに持ちかえる。

しかも周囲の暗がりから3人も出てきやがった。

「お、おばさん、ヤバいんじゃない……」

「だーいじょうぶよ。こんなの最前線じゃ、囲まれたうちにも入らないから」

「……………」

気軽にそう言われちゃ、どう返していいかわかりやしない。てか、囲まれる時点でかなり問題だし。

にしても娘のルーフェイアも常識外れだけど、このお袋さんもそううつてやつだ。

「さ、あたしが代わりに遊んであげるわ。

最初はどなたかしら？」

しかもすっごい楽しそうな調子で言うんだから、とんでもないといしか言いようがない。

「あらやだ、遊んでくれないの？」

それじゃ……こっちから行くわよっ！」

言いざまこの人が動いた。

え？

何がどうなったんだか。

ともかく次の瞬間、ひとりが切り倒されてた。

「あらやだ、見かけ倒しねえ。もうちょっと手応えあるかと思ったのに」

お、おばさん、この状況でそれは……。

なにせこの人、平気な顔してこいつらにスキだらけの背中向けて、倒したやつをちょんちょんつま先で蹴っ飛ばしてる。

もちろん連中、その隙を逃したりしなかった。

3人が一斉に襲いかかる。

Episode : 87

「それが甘いのよ」

嬉しそうな言葉と同時に、風　　というより突風　　がそいつらへ吹きつけた。

一瞬視界を奪われて、連中の動きが止まる。

その時にはもうこの人、既に1人の首ともうひとりの胸を切り裂いて、3人目の首筋へ峰打ちを決めるところだった。

「はい、これで終わりね」

それこそ片付けものをしたみたいな気楽さで言う、ルーフェイアのお袋さんの足元に、最後のひとりが崩れ落ちる。

「ごめんなさいね、待たせちゃって」

「い、いえ……」

って言うか、待つって言うほど待たされてない。

「この2人は始末したほうがいいかしら？　下手に放っておいて、アシがついてもやだものねえ」

しかもスラム育ちのあたしでさえドキッとするような台詞を、日常会話みたいに口にする。

「　　ま、どうにかしましょ。」

そうだ、誰かに……」

集まってたヤジ馬に、この人が歩み寄った。

「ごめんなさい、誰かあたしの知り合いに知らせに行ってくれないかしら？」

もちろん、タダなんて言わないわ」

この言葉にみんなが色めき立ったけど、名乗り出るのはいなかった。

そりやそうだろう。うつかり関わって、ファミリーのやつに目をつけられでもしたら大変だ。

金は欲しい。けどそれ以上に命は惜しい。

それがここだ。

「おばさん、ムチャですって。誰だって関わり合いになんかなりたくないんだ」

「そんなことないわよ。」

お願いできるかしら？」

赤ん坊を背負ったまだ若い女の人に、ルーフェイアのお袋さんが声をかけた。

あたりまえだけど、声をかけられた女性が視線を逸らす。

「場所はね、ここからそんなに遠くないの。そこでこれを見せて事の顛末言って、あたしが片付けて欲しいって言ってたって言えば分かるから」

それからこの人が何か囁く。

はっとしたように女性が顔を上げた。

「この子を、助けて……？」

「ごめんなさいね。あたしも医者じゃないから、さすがにそこまでの保証は無理だわ。」

それでもいい？」

「やります」

意を決した表情でこの女の人はずう答えて、ルーフェイアのお袋さんから短刀を受け取った。

「悪いけどよろしく頼むわね。」

あ、そうそう、して欲しいことはありったけ言っのよ?」

ありったけって……。

いったい何がどうなってるんだか。

にしてもこないだルーフェイアのヤツがアヴァンで部屋いっぱいドレスを用意してみたり、お袋さんがムチャクチャな条件をけしかけてたり、どうもこの一家ってのは桁外れだ。

「さ、どうにかここも片付きそうだし、行きましょ

そうそう、もう1回訊くけどあなた、ケガはないのよね?」

「はい」

それだけは保証つきだ。

「けど、あのヤク売りのほうが……」

さっき襲われた時にちらっと、ビルの間へ潜り込んだのが見えた。あれじゃ先回りしてるナティたちも、追えたかどうか。

けどあたしの心配をよそにこの人、けらけらと笑って手を振った。

Episode : 88

「それなら大丈夫、ディアスが追ってるわ。

それになんたってこっちは、捕虜もいるしね」

「さすが……」

ルーフェイアの両親ってだけあって、ハンパじゃない。

「ま、ディアスならこの育ちだし、どうってことないでしょ。
それより例の店、どっちだったけ？」

「……………」

なんつーか、ほんとルーフェイアのお袋さんかね？

真面目で大人しい性格のあいつとは、どうみたって正反対だ。

「えっと、向こうだったかしら？」

しかもどういいう頭の構造してんだか、自分が今来た方向へ行こうとする。

「それじゃ反対ですって。

あ、でもその前にみんなを下げないと」

こんなザマになった以上、長居は無用だ。

まずはいちばん手近にいる仲間 つまりはナティたち のと

ころへ行く。

「シーモア、大丈夫だったの？」

「ああ」

成り行きを見てたみんなが、心配そうに声をかけてきた。

「ルーフェイアのお袋さんが入ってくれたからね」

「そつか。でもよかった」

けど、ほっとしてるヒマがない。

「みんな、ここから急いで退こう。」

それと退きながら、手分けして他の連中に連絡つけないと」

ここであたしが襲われたってことは、多分ファミリーのやつらのアジトが近い。

だからこんな風に尾けられたときのために、あいつらみたいな兵隊が見張ってて、場所を突きとめられるのを防いでるんだろう。

「けど、あのヤク売りどうすんの？」

「そっちはルーフェイアの親父さんが、尾けてるってさ」

なんでもこの親父さん、昔はここじゃ知られてたらしい。

ナティも納得したらしくてうなずいた。

「じゃあそっちも大丈夫かな。」

けどおばさん、どうしてここにいるんですか？ 確かどこかへ行く

くつてさつき……」

それはあたしも不思議だ。

確かスラムの外へ情報集めに行くって言ってたのに、こんなに早く片付いたんだろか？

「なあによ、あたしが帰ってきたら困るみたいな顔しちゃって。」

ちよっとツテがあってね、この手の情報はすぐ集まるのよ、あたしは」

やっぱこのおばさん、ヘンだ。

でも本人はこれが普通らしいし。

「もっとも最初っから、アタリはつけてただけだね。」

で、戻ろうと思ってスラムの入り口でディアスと合流して、近道

してたら妙な連中がいるのに気付いたってワケ」

それでつけてきたらあの騒ぎになって、思わず割って入ったんだって言う。

「ともかく早く帰りましょ。じきディアスも……あら、戻ってきたわ」

ダンナが戻ってきてこの人、妙に嬉しそうだ。
しかもダンナはダンナで飄々としてるし。

「どう、首尾は？」

ルーフェイアのお袋さんにそう言われて、親父さんのほうが黙って親指を上げた。

「そ。さすがディアスよね」 じゃああとは、帰って作戦でも練りますか。

あ、そうそう。悪いけどディアス、その荷物持つてよ」

気絶してるヤツをダンナさんに押しつけて、おばさんが歩き出す。
って、だからそっちは……。

「反対ですってば」

「あら、そうだったっけ？」

ホントにこの人、大丈夫なのかね？

なんか不安になりながら、あたしらは引き上げた。

Episode : 89

Ca lea na

「あら、ルーフェアったら戻ってたのね」

あの子のお友達と一緒に例の店へ行ったら、当の本人はしっかりご飯食べてた。

「なに？ おいしそうじゃない」

「うん」

イマドに作ってもらったんだろうけどこの子、嬉しそうにシーフードのスープ食べてる。

「美味しいの。」

イマド、みんなにあげてもいい？」

「断らなくていいって」

けっこう気の付くこのボウヤが、笑いながらちゃんとみんなにスープ分けた。

いい子よねえ

そのうえなんだか、料理上手いし。

今ももらったお皿から、いいにおいがしてる。

「やだもう！ イマドったらあてつけ？」

「あらナティちゃん、どしたの？」

やっぱりお皿もらったお嬢さんが、素っ頓狂な声でボウヤに抗議。後ろでシーモアちゃんが爆笑してる。

「だっておばさん、あたしがさっき同じの作ったら、イマドったら食べて文句言ったの！」

「なるほど」

自分より上手に作られたら、そりゃ腹立つわねえ。

「けどイマド、どうしてわざわざ同じものを？」

「いや、ルーフェイアが気に入ったらしくて、リクエストしたもんですから」

「あらあら」

ルーフェイアがリクエストなんて、珍しい話。なにせあの子ときたら、食べられさえすれば文句言わないんだもの。

前に最前線出て毎日毎食携行食食べてた時も、毎度毎度「おいしい」って言うくらいだからかなり筋金入り。

ホント、味ってもんがわかつてるのかしらね？

そりゃまあ、味に文句言わない分生き残る率の高いんだろうけど……。

けど見てると今は、ほんとに美味しそうに食べてる。

と、ゆっくり食べてた手を休めて、この子が友達に尋ねた。

「そついえば……シーモアもナティエスも、なんでもなかった？」

「あはは、大丈夫だよ。あんたも心配性だね」

「ウソばかり。ヤバかったとこ、ルーフェイアのお母さんに助けてもらったんじゃない」

「え……！」

ナティちゃんがバラしたもんだから、ルーフェイアったらびっくりして立ち上がったる。

「け、怪我は？！」

「ないない」

苦笑しながらシーモアちゃんが、結局詳細をこの子に教えた。

「で、結局あんたの親父さんが、つきとめてくれたのさ」

「ほんとに？ 父さん、尾行なんてできたんだ」

「あんたねえ」

ボケ言ってるルーフェアに思わず突っ込む。

この子つてばほんと、もの覚えがいいんだか悪いんだか。

「傭兵稼業やってたら、このくらい当たり前でしょうが。

だいいち家での訓練には、こーゆーのまでカリキュラムに入ってるしね」

「そうなの……？」

ってそういえば、この子受けてないんだっけ。

どうもうちの実家は信用できないから、この子は最初っからあたしが、戦場連れ出しちゃったものねえ。

「ともかく、あたしはこれで稼いでるの」

「太刀振り回すのと尾行って、関係あったんだ……」

「それは違うだろ」

違つかしら？

「え、おばさんつてば現役なんですか？」

「そうよ」

ナティちゃんが興味津々って顔で訊いてきた。

Episode : 90

「へえ……なんか面白い話ってあります？」

シーモアちゃんも学院生だけあって、話訊きたがるし。

「面白い話？ そおねえ……」

正規軍に振り回された話なら山ほどあるんだけど。

とりあえずいちばん傑作だったの、あの話かしら？

「いつだったかな、ロステイオの傭兵隊 ってあたし、ここがいちばん多いんだけどね、そこが例によってアヴァンへ侵攻した時があつて……」

お嬢ちゃんたちが身を乗り出してくる。

話甲斐あるわあ

けど、話さないうちに腰折られちゃった。

「母さん、そんな話してる場合じゃないでしょ……」

「え？ あ、なんの話だっけ？」

さっぱり覚えてないんだけど。

「……場所を突きとめたって話……だと思っただけど……」

「そうだった？」

こう言ったらルーフェイアの方も不安になっちゃったらしくて、困った顔してイマドのほうを向いてるし。

「俺だつてしらねえって。」

シーモア、結局ここで何の話するんだ？」

「あんたら……」

なんだ、結局誰も知らないんじゃない。
知らないこと訊かれても、困るのよねえ。

「と、ともかくね、まずつきとめた場所を教えてください？」
妙にレニーサ慌てて、どうしたのかしら？
でもつきとめたの、あたしじゃないし。

「ディアス、どこだったの？ 騒ぎの場所からは、遠くなかったみたいだけど」

「錆びビルの隣のホテルだ」
なにそれ？

錆びたビルなんてお目にかかったことないわ。って違う違う、その隣か。

「そこが丸ごと、ですかね？」

ダグくんが腑に落ちないという表情でディアスに尋ねる。

もっとも彼ときたらいつものごとく黙ったままで、代わりに答えたのがレニーサ。

「丸ごとってことはないでしょうね。なにせあそこの支配人、あたしの知りあいよ。」

多分連中、ヤク売る日は部屋借りて、いろいろやりとりしてるんじゃないかしら」

「敵もさるものってワケね」

あらやだ。

ルーフェイアったら露骨に「わかってるのか」って顔で、見なくたっていいじゃない。

「でもつきとめた先がホテルじゃ、それ以上はたどれなさそうね」

レニーサがふうと息を吐いた。

「そうですね……」

ルーフェイアも神妙な顔になっちゃうし。

けどその中、さすがディアス。面白そうに笑ってる。

これはきつと、なんか楽しいことが待ち構えてるわね
思ってるうちに表の扉を叩く音が聞こえた。

「レニーサ、荷物引き取ってくれるか？」

「あ、はいはい」

配達屋？の声に、レニーサが慌てて出てく。

「まったく、こんな時に荷物なんて……ちよつと、何よこれ」

「なあに、どしたのよ」

いきなり深海みたいに冷たくなった声に、あたしも見に行ってみたりして。

「あら、これは確かに変わったものが届いたわねえ？」

あたしのところにもいろんなところから届け物来るけど、こつこつのは見たことないもの。

「変わったもの……？」

気になったのか、子供たちも見に来る。

Episode : 91

「なんなのさ、これ？」

「人……じゃない？」

「んなのは見りゃ分かるさ。そうじゃなくて、どうしてこんなもんが届いたんだ？」

「俺に訊くなよ」

子供たちがみんなして、首をかしげる。

まあ、そうでしょうね。

届いたのは気を失ったうえに縛り上げられた男性が3人っていう、かなり珍しい物。

「こういうの、届け物って言うの……？」

ルーフェイアったら悩んでるし。

「届いたんだから届け物でしょ？」

「けど……」

せっかく説明してあげたけどこの子、いまいち納得できないみたい。

「ともかくこんなもの、引き取れないわよ！」

「ったく、誰がこんな悪趣味な冗談……」

「俺だ」

レニーサが叫んだところへ、絶妙のタイミングでディアスが答える。

「俺だって……ディアス、あなたが？」

「あ、なるほどね。ホテルにいた連中、ディアスってば叩きのめしてきたんだ」

さすがあたしのダンナ　ただ尾けるだけじゃ、芸ないものね。
見ればディアス、してやったりって顔してるし。

「んじゃ、これがそのファミリーの一味ですか？」

「そしたらこいつらに、口割らせれば……」

みんなの瞳がなんだか輝き出す。

分かる分かる。

こーゆーの楽しいもの。

「さっきあたしが捕まえたのも合わせて4人いるから、きつとどう
にかなるでしょ」

「どうにかしてもらわないと困るわよ。

けどさっきあなたが言ってた方法、大丈夫なんでしょうね？」

なんだか信用ない言われかたねえ。

けど、ちゃんと勝算はあるし。

「まあ、見ててよ。それに万が一あたしがダメでも、イマドがいる
し。

ね？」

「……………」

あら？

しかも答えがないのを訝しんでたら、ルーフェイアがすごい形相
で睨みつけてきて。

「　母さんっ！」

「どうしたのよ？」

「どうしたもこうしたもないでしょっ！！」

さすがにこの剣幕には、あたしも少々驚かされる。

「どうして母さん、そうやって無神経なのっ！」

「あたしだって、神経くらい通ってるってば」

「そうじゃなくて！」

とりあえず口で親子ゲンカしながら、イマドのほうにあたし視線を向けた。

（あなたまさか、この力のこと黙ってたの？）

声に出さずに会話出来るのは、念話能力を持つ人間同士だけの、特典なのよね。

もっともこのボウヤは初めてだったらしくて、少しの間があつてから答えが帰ってきたけど。

（　　はい）

（よくそんなこと、今までしてたわね……）

そりや所構わず言えとは言わないけど、まるっきり内緒にしてたら、ストレスなんてもんじゃないでしょうに。

「カレアナ、なにがどうなってるの？」

「どうって言っても、大したことじゃないんだけどね」

一旦そう言ってから、あたしはもういつかいこのボウヤに視線を向けて。

（思いきって言っちゃいなさい。あなたが心配するほど、人は驚かないわよ。）

それとも、あたしから言ったほうがいいかしら？

決めかねてるんだらう、答えはなかった。

Episode : 92

まあ、しょうがないかもね。

うちはそういう人間がごっすり出る家系だから偏見なんてないけど、世の中にはあたしたちみたいなのを毛嫌いする輩もいるし。

「ま、早い話がこの子もあたしの同類なのよ」

「あらま」

レニーサの反応に、イマドが拍子抜けした顔になって。

「……ヘンなヤツだとは思ってたけど、なるほどね」

「けど、なんかかえって納得できない？」

シーモアちゃんとナティちゃんも、あっさり順応。

「そういう人間ってのは、そんなにゴロゴロしてるものなのか？」
ここまで言われて、やっとボウヤが笑った。

「あゝもう、なんかヤになっちまうな」

「だから言ったでしょ、案外平気だって。」

ヘンにこそそしてるほうが、よっぽど嫌われるんだから」

「それとこれとは違う気もするけど……」

なんかレニーサから突っ込みが入る。

「違うないの。」

それよりレニーサ、場所貸してよ」

「ちよつと、店は止めてよ！ そっから降りて、下の倉庫にしてちようだい」

「はいはい」

ダグくんやガルシイくんあたりに連中担がせて、言われた地下へ

降りる。

興味があるのか、ルーフェイアたちもちょこついてきた。

「さ、起きてもらわなくちゃね。

ほら、朝よ」

ってだらないわねえ。

せつかくあたしが起こしてるっていうのに、誰も目を覚まさないんだもの。

しょうがないからディアスと手分けして、活を入れて起こしてく。

「おはよ」

「んあ……あつ！」

ちよつと何よ。

次々と目を覚ましたのはいいけど、みんなして驚いた顔しちゃつて。

あ、そうか。

あたしみたいなイイ女がいたから、驚いたのかしらね？

「目が覚めた？」

面倒だから、武装解除もなにもナシ。ついでに縄も解いてあげる。

「ずいぶん舐めたマネしてくれるじゃねえか」

多分リーダー格とアタリつけてたのが、真っ先に口を開いた。

「そお？ 話を聞くんだから、転がしたままじゃ失礼だしやりにくいし。

そうそう、逃げたかったらそうしていいわよ」

ちなみにここ、地下だから当然出口はひとつ。

つまりあたしたちをどうにかしないと、絶対出られなかったり。

「そうか、じゃあそうさせてもらっ」

あら。

案外この連中統制取れてるみたいで、一斉に武器を構えて襲いかかってきた。

でもねえ……。

片手でディアスに合図して、子供たちを下がらせてもらう。
一方でルーフェアにはめくばせ。

「エターナル・ブレスっ！」

この子が防御魔法を展開させるのを背中で捕らえながら、あたしも呪を唱えた。

「ヴェゼ・ジーヴルっ！」

あたしの中位氷魔法に足元を閉じ込められて、男たちが動けなくなる。

「もっかいやる？」

半分凍りついた連中に尋ねてみたら、今度は子供みたいに首振った。

Episode : 93

「そうそう、大人しくしてたほうが身のためよ。」

さ、今あつためてあげるわね。」

言うが早いか、ルーフェイアが今度はごく小さな炎を連発して、たちまち室温が上がる。

ほんと、我が娘ながら凄いわね。

この魔法の使い分けとコントロールだけは、どうあがいてもあたしじゃかなわない。

まあだからこそ、15歳でシユマーの総領になることを、約束されてるわけだけど……。

あと、およそ3年。

たったそれだけでこの子はあたしの代わりに、数千人の頂点に立つことになる。

あと僅か3年で……。

「母さん？」

ちよんちよん、とルーフェイアが服の裾を引っ張ってきた。

「どうかしたの？」

「あ、なんでもないわ。」

それよりルーフェイア、あんた相変わらずたいしたもんじゃない」この言葉に、ルーフェイアが怪訝そうな顔を見せる。

「母さん……ほんとに大丈夫？」

「どういう意味よ」

可愛い娘だけど、こういう言われ方されるとちょっと不満。

「だって、母さんが……そんな風にあたしのこと、言うなんて……」
「ああ、そういう意味？ 別にどうもしてないわよ。しばらく見なかったけど、やっぱりさすがだと思ったただけだから」

あら大変。

言った瞬間ルーフェイアの顔が曇っちゃって、微妙にアレなところに触れたのに気づく。

このまま放っておいたら、この子ってば泣き出しちゃうわね。

「ごめんごめん、そういうつもりじゃなかったのよ。」

さ、イマドかディアスのとこにでも行ってなさいね。あたしはこっち片付けちゃうから」

幸い間に合ったみたいで、この子が泣き出さないうちに手が打てた。

で、今度は男たちに振り向いて一言。

「でね、あなたたちにはちょっと、聞きたいことあるのよ」

聞ける相手は4人。うちひとりとは、あたしが捕まえてきたファミリーの兵隊。

残る3人のうち2人も、どうみても用心棒。装備見れば分かったやう。

けど、わざと知らなそうな人間に訊いてみた。

「さ、ボスの『今の』居場所を教えてもらいましょうか？」

「し、知らねえ……」
なによ。

につこり笑って問い掛けてあげたのに、こいつったら後ずさった
りして。

「知らないわけないでしょ。ボスからの命令無しに、あんなことで

きるわけないんだから」

「知らねえものは知らねえよ！」

「あらそう」

まあこんなただの用心棒が何か知ってるとは、あたしも思わないけど。

もつともわざわざ訊いてるのは、当然下心アリ。

「素直に言ってくれれば、手荒なマネしなくてすむんだけど？」

「だから、知らねえって言ってるだろ！」

話を訊いてる男の顔色が変わる。

別にあたし、何も言っていないんだけどな。

いったい何を想像したのやら。

もつとも縄解かれてる上に武器まで持たされてて、それでも逃げ出せないようなメンバー相手じゃ、しょうがないのかもしれないけど。

ただ、一つ読み間違いがあった。

「母さんお願い、そんなひどいことしないで！」

こつちも何を勘違いしたのか、ルーフェイアがあたしと男の間に割って入る。

Episode : 94

「こら、下がちなさいってば」

慌てて言ったけど、ちよっと遅かった。

好機と見た男たちがすばやく動く。

「おいっ、この娘の命が惜しかったら、俺達を開放しろっ！」

ルーフェイアに刃物突きつけて、人質作戦に出る。

知らないわよお、そんなことして。

ちなみに当の本人は太刀持ったままきょんととして、拳句にこんなことまで言い出す始末。

「あの、危ないですから刃物は……しまっただけませんか？」
絶対状況分かってないわね、この子。

「度胸あるよなあ、あいつにあんな真似するってのはさ」

「あたしもそう思うね」

「命知らずって言わない？」

この子の友達も、みんなしてそんなこと言ってるし。

「お、お前ら、こいつがどうなってもいいってのか！」

「命が惜しかったら、その子放したほうが絶対いいわよ？」

可哀相だから忠告する。

「何ワケわかんねえこと言ってやがる！　だったら　！」

あ、知らないって。

男がナイフを動かそうとした瞬間、それまでばーっとしてたルーフェイアが動いた。

「トオーノ・センチンツァっ！」

いきなりの電撃に、ルーフェイアを捕らえてた男が怯む。

もちろんあの子がその一瞬を逃すわけがなくて、するりと腕から抜け出しながら強烈な柄での一撃を、下腹部の急所めがけて叩き込んだ。

捕らえてた男が悶絶して動けなくなる。

「こ、このっ」

逃げ出してしゃがんだ格好になったあの子を捕まえようと、近くにいた男が押え込むように覆い被さる。

瞬間勢いをつけて、ルーフェイアが伸び上がった。

あれは痛いわね。

男の下顎に、下からの見事な頭突き。

次いで伸び上がりながら抜かれてた太刀が、大きく振り下ろされて首が飛んだ。

後ろから来た男へは舞うように反転しながら一閃、腹部が裂かれる。

「このガキ　！」

最後の男が銃を抜いた。

ただどあの子、それを見てもまるつきり動じない。

「あ、姐さんっ！」

「大丈夫よ」

ダグくんやガルシイくんが慌てて助けに行こうとしたけど、あたしはそれを止めた。

あの子は……そんな可愛い子じゃない。

「あたしたちが下手に出たら、邪魔になるだけだわ」
立て続けの銃声。

同時にルーフェイアが前へ出る。
魔法の防壁が弾をはじく音。

「ば、化け！」

言葉はすべては聞けなかった。
まずは下段から。そして返す刀で上段から。
たったこれだけであの子がケリをつける。

「なんて子だ……」

誰かがつぶやいた。

死の舞の後に残ったのは、死にかかった
あるいは死んだ

男が4人と、呆然と中央に立つルーフェイア。
そのルーフェイアが振り向く。

Episode : 95

「母さん……」

いつもの、泣き出しそうな表情。

「ケガ、ないわね？」

言って抱きしめると、この子が腕の中で泣き出した。

「あたし、あたし……」

「　　いいのよ」

優しいルーフェイア。シュマー家はもちろん、ふつうの人間の間でも、これほど優しい子はそう多くないはず。

なのにこの子には、人殺しの才能がある。

動き出したが最後、機械より正確に敵を倒していく。
不憫だった。

もっと平穏な生活こそが、この子には似合うだろうに……。

「最初にどうするか、あなたに言っておくんだったわね。
いやな思いさせて、悪かったわ」

謝りながらこの子の頭を、撫でるしかなかった。

親のあたしがもう少し注意していれば、こんな目に遭わせなくて済んだはず。

こういう子だからぜんぶは防げないけれど、だからこそなるべく、
こういうことは少なくしてやるべきなのに。

「レニーサ、汚してごめんなさいね。あとでちゃんと始末するわ」
慰めながら、後ろに声をかける。

「よろしく頼むわね。あたしでも始末できなくはないけど、やって

もらえれば助かるわ」

それ以上言わないとこを見ると、レニーサは予想してたみたい。

「おばさん、ちゃんと分かったの？」

ナティちゃんが半信半疑で、尋ねてきた。ここまで見てて思うけど、この子は案外冷静で、にこにこしながら核心突いてくるタイプ。

「大丈夫、だいたいわかったわ。イマド、あなたも観たわね？」

「ええ」

あたしを遥かに上回る能力の持ち主の彼が、はつきりうなずいた。
「リーダー格の男？」

「そうです」

どうやら狙いは当たったみたいね。

人間つてのはたとえ喋らなくても、思うことは止められない。

ましてや今みたいに見当違いの人間に尋ねたりしてるのを見ると、優越感も手伝って、内心せせら笑いながら聞かれてることを思い浮かべる。

そう思って下っ端に聞いたのが、大当たりだった。

「じゃあいったん上にもどりましょ。そこで場所を特定して、あとどうするか決めないとね」

まだべそかいてるルーフェイアを抱き上げながら、お店の方へ戻る。

「いいのよ、ルーフェイア。あなたのせいじゃないんだから」

そう何度も、繰り返しながら。

Episode : 96 証拠

R u f e i r

どうしてあたし、こうなんだろう……。

後悔してた。

とっさとは言え、また何人も殺してしまつて……。

自分が嫌になる。

「いいのよ、ルーフェイア。あなたのせいじゃないんだから」

そう母さんが何度も繰り返し返してくれるけど、気は晴れなかった。

あたしがやったというのが、変わるわけじゃない。

涙がこぼれて止まらなかった。

あたしなんか、いなければいいのに……。

「うーん、やっぱり可愛いわねえ」

「え？」

あたしの顔を覗き込んで、母さんが妙なことを言い出す。

「あんたの泣き顔。

写影に撮つところかしら」

「や、やめてよっ!!」

とんでもないことを言い出されて、慌てて涙をこらえた。

なにしろ母さんが大事にしてるアルバムときたら、とても見たくないようなあたしの写影ばかり並んでいる。

それにこれ以上追加されるのは、絶対にイヤだった。

「はい、その調子その調子。

あたしは泣いてても可愛いからいいけど、みんなが気にするわ」

そう言って母さんが、今度はイマドに向き直った。

「イマド、説明できる？」

「はい」

彼がはつきりと答える。

母さんがそれに、満足そうにうなずいた。

「それで、どんな場所だったの？」

「どっかの屋敷みたいでしたね。かなりの広さの。そこでこいつらの親玉と、誰か偉そうな人とが話してましたっけ」

「なるほどね……」

みんなが納得したみたいにならずいた。

けど、ここの事情にはあまりあたしは詳しくないから、意味が分からない。

「ねえ、どういうこと？」

「ようするにね」

レニーサさんが口を開く。

「ファミリーがどこか国の上の方の連中とつるんでるんじゃないかっていうのは、さっき言ってたでしょ？ それがつまり、その屋敷の誰かさんじゃないかってことなのよ。

まあ恐らくは、軍か警察が大統領の側近か……そんなところでしょ
うね」

「そんな……！」

もしそうなら、本当に犯罪組織がやりたい放題になってしまう。

「多分、レニーサの言うとおりでしょ。そしたらイマド、屋敷の周囲はどうなったか分かる？」

「と、あたしも一緒に観たほうが早いわね」

母さんが目を閉じる。共感能力を利用してイマドとシンクロして、同じ映像を観ようっていうんだろ。

けど確かにきちんと絞りこまないと、ベルデナードは広いから探
しきれない。

「スラムじゃないわね、これ」

「絶対違いますって」

母さんとイマドが2人だけで納得しながら話をしているのは、考
え様によっては不気味だ。

Episode : 97

「だいいちこんなでかい家が並んでる場所なんて、この辺にありましたっけ？」

「役人街じゃないかい？」

もうこの状況に慣れてしまったみたいで、シーモアが横から言葉を添えた。

「そうなのか？ よくわかんねえけど。」

屋敷の目の前がでっかいバス通りで、その向こうは公園みたいな」

「じゃあ、まちがないわよ」

ナティエスもうなずく。みんな心当たりがあるみたいだ。

「でも役人街だったって広いわ。」

まあ屋敷ばかりなら西南地区だろうけど、それだってけっこうあるのよ？」

「あ、そうか……」

けどそうレニーサさんに指摘されて、この町を良く知ってるシーモアやナティエス、ダグさんやガルシイさんがため息をつく。

「どんな屋敷か、細かいことわかる？」

「さすがにそこまでは、分かんねえなあ……」

「ただっぴろい庭に軍用犬が放してあるくらいかしら？」

イマドも母さんも、それ以上はわからないみたいだった。

あたしも下をむいたまま考えて見たけれど、いい考えは浮かばない。

「しょうがない、やっぱここは あら、お帰り」

「なんだ、もうみんなお揃いか」

反則技を使える母さんとイマド以外では、いちばん情報集めが上手い人が帰ってきて、みんなが一斉に期待のまなざしを見せた。

「ゼロール、そっちは何かわかった？」

母さんがいきなり聞く。

「ウワサばかりだよ。」

どれも確証がなくて、情報としてはイマイチだな」

意外にもゼロールさんのほうは、さほどいい情報はなかったようだ。

「それよりあんたたちこそ、何かつかんだみたいだな」

「こっちも確証はないのよ」

言いながらも一通り、母さんはゼロールさんに役人街のことを話して聞かせた。

「そんなわけで、なあんか役人街の住人が絡んでるのは、わかったんだけどね。」

ただそれが、どこの誰で何の目的かはさっぱり」
うんうんとみんなもうなずく。

「ウワサの中にそれ系の話、何かなかった？」

「あつたぜ」

にやつとゼロールさんが笑った。

「コーニツシュ大佐が、どっかの犯罪組織とつるんでるってウワサが、最近聞こえてきてるそうだ」

「コーニツシュ大佐？ あの陸軍の？」

あたしもびつくりして顔を上げる。

ロデステイオ軍のコーニツシュ大佐といえば、軍の中でもトップ

クラスの实権の持ち主だ。

「ということは、大佐が庇護してるせいでファミリーはやりたい放題。ついでになにをやってもお目こぼし……ってどこかしらね？」

「それなら話の辻褄が合うな」

レニーサさんや切れ者のガルシイさんも、納得したみたいだ。

「つまるところ、ファミリー連中はなんやかやと手を回してもらって、大佐はその見返りに大金をもらう。資金源はおおむね麻薬。

ついでにいろいろ邪魔なクリアゾンなんかを、ファミリーが潰す手助けをして、もう一段双方で甘い汁、と」

「確かにクリアゾンが潰れりゃ、その隙にシティを牛耳れるしな」

「しかも警察やら軍やは、反抗分子がいなくなって喜ぶってわけだ」

みんな、話の筋道が見えてきたらしい。

Episode : 98

「それにしてもこのシティの偉いさんは、やること汚ねえな」

「汚いと言うよりあれは、気が乗ったかどうかと利益があるかどうかで動いてるな」

誰もが酷評する。

「けどコーニツシュ大佐ったら穏健派だから、ほかとは違うと思っ
てたのに」

憤懣やるかたないって調子でつぶやいたのは、ナティエスだ。

「でもナティ、あの太佐、昔はワサールのテロ組織を片っ端から潰
してたって言うよ」

ここまで軍の信用がない国も、そう多くはないだろう。

「ま、偉いやつなんて誰でも同じってことさ。

そしたら、そのコーニツシュ大佐をどうにか叩きのめして……」

「ねえ、そのウワサ、ホントなの？」

怒りに燃えてたみんなに水をさしたのは、母さんだった。

「さあな。でも、火のないところに煙は立たないとも言っし」

「そりゃそうだけど……」

どうもこの話に納得できないらしくて、顎に手を当てて考えこんでいる。

「リオネルはあたし、直接知ってるのよ。けど彼、犯罪組織とつるむようなタイプじゃないわ」

「でも姐さん、場所から言っても可能性大ってやつですよ」

ダグさんの言葉にみんなも視線で同意したけれど、それでも母さんはイエスと言わなかった。

「そりゃ軍務には忠実だから、一旦命令となればテロ集団の殲滅だ
つてするでしょうね。」

けどね、それならあたしもおんなじ。

もう20年以上も傭兵やってるんだもの、殺した人間の数なんて、
数えるのもバカらしいほどになってるわ」

静かな言葉。

ただその奥に潜むものの凄さに、みんな圧倒される。

「戦争ってそういうもんよ。」

けど個人となれば、少々別。行動には当人の性格とか考えかたが
出るわ。そして彼……そういうのは嫌いだったのよ」

静寂。

誰もが母さんの言葉を、胸の内で繰り返している。

「でも、そうするといつたいどこの誰が……？」

誰かの呟きに、母さんが笑った。

「あたしが出向いて探してくる」

「探すってあなた、役人街中を訪ねまわろうって言うの？」

レニーサさんが「なにを言うんだろっ」って顔で言う。

もつとも母さん、この程度でこたえたりしない。

こたえてくれたらいいのに。

ともかく得意そうにふふんと笑って、あたしたちに説明した。

「イマドが観てたものは、あたしもちゃんと覚えてる。」

だからそれを頼りに役人街中探せば、今夜のうちにその屋敷の場
所が分かるわ」

「便利ね」

「そうでもないわ」

「ふうん、そうなの？」

「そおよ」

この話はあたしも聞いていた。

あたし自身はこういう能力はないから分からないけど、意外に範囲が限定されたりする上、かなりのリスクがあるのだという。

端から見ていると便利そうでも、案外魔法と同じで、使い勝手はさほど良くないのかもしれない。

Episode : 99

「ともかく急いで探してくるわ。」

ディアス、行きましょ。あ、みんなはちゃんと寝るのよ?」

まるで一陣の風を巻き起こすかのような勢いで、母さんが出ていく。

あとに残されたみんなが、なんとなくため息をついた。

「毎度ながら、妙なお袋さんだよなあ。親父さんも変だったし」

「だからそれ、言わないで……」

あたしにはどうすることもできないから、尚更気が重い。

「そうしたら俺も、もう少し知り合い当たってくるか」

ゼロールさんも腰をあげた。どうやら母さんの話を聞いて、また調べてみる気になったらしい。

「また、何か分かったら連絡するよ」

「よろしく頼むわ」

ぱたんと扉の閉まる音を残して、このジャーナリストの男性も出ていった。

「そしたら、あたしらどうする?」

「よくわかんないけど、探した方がいいんじゃない?」

シーモアとナティエスが相談を始める。

「でも、どこをどう探せば……」

「うーん、とりあえず……」

「こら、あなたたち何言ってるの」

レニーサさんが一喝した。

「ですけど、このままってわけにも」

「子供は寝る時間よ。」

いくら明日の祭りが延期になったとはいえ、夜更かしはダメ」

こうきっぱり言われてしまうと、さすがにそれ以上相談はできない。

「じゃあねえ、引き上げるか」

「こっちもそうさせてもらう。」

あとはあの人が、どういう情報を持って帰ってきてくれるかだろ
うな」

「てめえ、気安く『あの人』なんて言うんじゃないよ」

「はいはい、もう終わりにしてね。あたしはこのあと、まだ予定があるんだから」

言い合いを始めたダグさんとガルシィさんを、今度も簡単に
レニーサさんが止めた。

多分これが、いつものレニーサさんなんだろう。

ともかくみんなが立ちあがって扉のほうへと向かう。

あたしもなんとなく立ち上がりかけて、やっと気がついた。

「ねえイマド、あたしたちどうしよう？」

「へ？」

あ、言われてみりやそうだな」

行き当たりばったりだった拳句になんだかばたしていたから、
今晚泊まる場所を決めていない。

「なんだ、泊まる場所ねえのか？ んじゃうち来いよ」

「え、でも……」

押しかけていいものか迷う。

「ちょっと待った、こいつらはうちのダチなんだ。こっちで泊まるのがスジってもんだよ」

シーモアとダグさんが、睨み合いを始めてしまった。これじゃどちらについていても、もう片方が気まずい思いをするだろう。

どちらにも迷惑をかけずに住む方法をしばらく考え込んで、今度は上手く思いつく。

「そしたらイマド、あたしたちさっき父さんが言ってたホテルに」

「なっ、ばかつ　　んなのダメだダメだ！」

「ちよつとルーフェイア、マジかい？」

「いいのか……？」

「　確かに、『ホテル』かもしれないけど」

「そりゃマズイだろ」

みんなが一斉に反対した。

Episode : 100

「どうして……ダメなの？」

ホテルって、泊まる場所だと思ってたのに。けど誰も、説明はしてくれない。

そして代わりに、レニーサさんが声をかけてくれた。

「お嬢ちゃんたち、泊まる場所がないならここにしなさいね」
「でも……」

押しかけた上に泊ったりしたら、迷惑じゃないだろうか。

「ほんと、お母さんに似ないで遠慮深いのね。でも構わないわよ。
店の奥の部屋、もともと泊まれるようにできてるから。」

それにどうせディアスたちもここへ戻るんだろうから、その方が
何かと都合いいでしょう？」

「そうですか？ そしたら……」

なぜか隣で、イマドがほっとした顔になった。

「そしたら、また明日ね」

「寝坊するんじゃないよ」

「うん」

そう言って、シーモアやナティエスたちと別れる。

「さ、あなたたちはあっちへ行きなさいね。今度は多分、妙な連中
が来るに違いないから」

「そんな変な人が来たりして、大丈夫なんですか？」

心配になって尋ねると、レニーサさんが大笑いした。

「あの……」

「あ、ごめんごめん。そう言えばあなたたち、ここの人間じゃないものね。」

妙って言うのはね、クリアゾンの連中のことよ」

「えっ？」

そんな人たちがきたらもつと大変じゃないかと思ったけれど、レニーサさんが気にしている様子はなかった。

「どうも大事になりそうな気がしたもんだから、トップ連中に招集かけといたの。」

夜中前につて言つといたから、そろそろ来るわ」

「けど、本当に大丈夫なんですか……？」

普通の人には手を出したりしないという話は、ここへ来てから聞いている。けどクリアゾンの人たちが集まったら、お互いの間で暴力沙汰になってしまうかもしれない。

「ほんと、あなたつてお母さんとずいぶん違うわね。」

でも大丈夫。クリアゾンの連中が、ここでバカやることはないわ
あたしの心配をよそに、レニーサさんが断言した。

「なんでです？」

イマドも不思議だつたらしくて尋ねる。

このお姉さんが、ふふつと笑った。

「それでもあたし、いちおう先代のボスの孫なのよ。だから問題ないわ」

「あ、それで……」

ようやく納得する。

「ただ困るのはね、ああいう連中つて案外、子供好きが多いのよ。
だからあなたみたいなのがいたりしたら、たちまち捕まって寝る

どこじゃなくなっちゃうわ」

「げ」

なにが嫌だったのか、イマドがおかしな声を出した。

「おい、早くひっこもうぜ」

「あ、うん……。あれ？」

「ちょっと遅かったみたいね」

店のドアが開いて、ガルシイさんやダグさんたちより数段凄そうな男の人たちが、入ってくる。

でも凄いのは気配だけで、顔はにこにこしていた。

その人たちが、レニーサさんに挨拶する。

「お嬢さん、お呼びだてどおり来ましたぜ」

誰もがみんな下手に出る。

レニーサさん、ほんとに凄いんだ。

人というのはまさに、見かけだけでは分からない。

Episode:101

「悪いわね、こんな夜中に。折り入って相談があるのよ。もっとも話は、全員集まってからになっちゃうけど」

「そりゃもう。」

あれ、可愛い子がいるじゃないスか。ほら、おじさんとこおいで」

にこにこ顔で手招きされた。
困ってレニーサさんを見る。

「ほんと、あなたも子供好きよね。」

けどもう寝かせるところだから、少しにしてあげて。あと、お酒なんか飲ませないでね」

「わかってますって。ほらお嬢ちゃん、こっちおいで。何か食べるかい？」

なんだか断るのが、申し訳ないような笑顔だ。けど食べたあとだから、食べたくても食べられない。

「えっと……その、さっき夕食はいただきましたから……」

「そうか。そりゃそうだろうなあ、なにせこんな時間だし。じゃあ果物でも食べるか？」

そっちのボウズは何がいい？」

「あ、そしたら俺、ワイン」

「おいおい」

でも苦笑しながらワインを出してしまうあたり、このおじさん、本当に子供が好きみたいだった。

「こんだけだぞ」

「あ、すいません」

ちやつかりイマドも飲んでる。

あたしの前にもいつのまにか、果物やお菓子、それに軽い食べ物
が並べられていた。

「ほら、遠慮するな」

「あ、はい……」

ちよつとだけ口に運ぶ。

そのうえ気が付くと何人もの人が集まってきていて、すっかり見
世物みたいになっていた。

「にしても、可愛い子だなあ。ほら、お小遣いあげよう」

「あの、そんな……」

みんな母さんみたいなのをする。

「いいっていいって、遠慮するな。それでなんか、好きなもんでも
買いな」

結局手のひらに強引に握らされた。

「あ、てめえズルいぞ。ほら、おじさんもあげよう」

「でも……」

だけど嬉しそうな顔を見ると、断るに断れない。

「そうそう、子供は素直がいちばんだ。明日になったら、2人でシ
ョッピングモールでも行つといで」

明日、行く暇あるだろうか？

ふつとそんなことを思った。

それに行くとなつたら絶対に母さんがついてくるはずだから、た
まったもんじゃないだろうし。

でも、大人に囲まれてるのは嫌いじゃなかった。

ずっと戦場で育ってしまったあたしは、あんまり同年くらいの子を知らない。むしろこうやって大人の中にいるほうが、慣れている分ずっと楽だ。

「よしよし。」

それにしても、うちのガキもこのくらい素直ならなあ。もうでっかくなっちまったうえに、最近じゃ親父なんか知らん顔しやがって」「あなたに似たんでしょ」

おじさんのぼやきに、レニーサさんが容赦なく突っ込んだ。

「そんな言い方しないでも……。」

けどお嬢さん、今日の話つてのは、ホントのどこなんなんです？」「これはあたしも訊いてみたかった。

シーモアたちよりもう一段上のこの人たちが動くのだから、それなりの理由があるはずだ。

「しょうがないわね。けどボスが来てないから、ちょっとだけよ。」

実はね、例のファミリーのボスの居場所、わかりそうなの」

「そりゃマジですかい！」

一斉に店内が色めきたった。

「そうか、それで叩きのめすために、あつしら呼んだってワケか」
「けど、よく居場所がわかりやしたねえ？」

誰かが不思議そうに言った。

今までどうやっても分からなかったみたいだから、当然なんだろうけど。」

「この辺ウロついてるジャーナリストの彼が、情報持ってきてね。そこへ、子供たちが協力してくれたのよ」

「それでよく……」

また誰かが感心する。

「まあ、途中ちよつとゴタついちゃったみたいなんだけどね。けど最終的にディアスが元売り捕まえてきて、その口を奥さんが割ったのよ。」

もつとも詳しい場所はまだで、夫婦して探りに行ってるんだけどね」

「はい？」

一瞬、店の中が静かになった。

「今、『奥さん』って聞いたような……」
「言ってたわよ」

再び沈黙。

「その……あのディアスが、女房連れてるんですかい？」

「そうなの。あたしも最初は驚いたんだけどね。実言えば、その可愛いお嬢さんが娘よ」

「えええっ!!」

居合わせたクリアゾンの人たちが、一斉に声を上げた。

けど、そんなに驚かなくなつて。

もとを正せば父さんなんだろうけど、なんだか自分が悪いことをしたような気になる。

「娘って、娘って……」。

でも確かに、言われてみれば似てるか……？」

「そりゃ、あの美形の娘だもの。あなたみたいな熊親父とは違うでしょ」

「あ、ひでえ」

さつき以上に人があたしの周りに集まってきて、今度こそ見世物のようになつてしまった。

なんだか恥ずかしくて、つい下を向く。

「お前たち、どこでその子拾ってきた？」

男の人がまたひとり店に入ってきた。

「バカヤロウ、みんなして取り囲みやがって。ほらみろ、怯えてるじゃないか」

「あ、ボス」

呼ばれかたからすると、どうやらクリアゾンを束ねている人らしい。

年は…… 40代くらいだろうか？

黒い髪。黒い瞳。背もそんなに高くないし、身体つきもさほど遅しいわけじゃない。それに、ここどの男の人よりも優しそうだ。ただ、その眼光は鋭い。何気ない仕草からも、実際はかなりの腕を持っていることが分かる。

けど今ここでそれを見せる気は、全くないようだった。

「まったく可哀想に。」

ほら、早く謝って向こうに行け」

「は、はあ……」

まるで蹴散らされるみたいにして、大の男の人たちが、あたしに謝りながら離れて行く。

「悪かったなあ。びっくりしたもんでつい、な。ほら、お詫びにこれやるから、勘弁してくれや」

なかにはまたお金を押しつける人がいて、本当に困ってしまった。

Episode : 103

「あの、別にいいんです……」

「そんなこと言うなって」

「こらっ！」

ボスが一喝した。

「困らせるんじゃないって言ってるだろうが。」

「だいいちお前たち、金なんてつまんないものばかり渡すな。もうちょっと気の利いたものにしろ」

「へ、へえ……」

この人にかかると、熊のような人まで借りてきた猫みたいだ。

「ちょっと待つてろ、今俺が手本を　ん？　なんだ、今日に限ってロクなもんが入ってないな」

ベルデナードを配下に治めるというボスが、必死にポケットをひっくり返している様は、なんだか可笑しくてつい笑ってしまう。

「お、笑った笑った。うんうん、可愛いな」

ボスも嬉しそうに笑った。

「いい子だいい子だ。」

にしても、なんで今日は何も入ってないんだ？　ライターじゃダメだしなあ……」

「あ」

上着の内ポケットがちらりと見えて、思わず声を上げる。

「ん？　あ、これか？」

ボスも気が付いて、それを出して見せてくれた。

「これに目をつけるとは、大したもんだな」

もの自体は、ただのナイフというか、短刀だ。
でもこれ……。

「ローム時代のものですよね？」

「ほう、よく知ってるじゃないか」

ボスの顔がふつと曇った。

「あの、すみません。あたし何か……」

「いや、お嬢ちゃんのせいじゃないよ。ただちょっと、思い出して
ね」

一呼吸おく。

「お嬢ちゃん、何歳だ？」

「？ 11歳です」

「そうか、やつぱりうちの娘と同じくらいか……」
店の中が静まり返る。

「あの……？」

なにが起こったのか分からなかった。
ただあたしのせいでこうなったのは確かだ。

「ご、ごめんなさい……」

「おわ、ほらお嬢ちゃん、泣かない泣かない」
そう言われても、涙は止まらない。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

「ボス、女の子泣かしちゃいけませんぜ」

「うるさいっ！ おまえはすっこんでろ」

茶々を入れた男の人を、ボスが蹴飛ばした。

「つたく、いらんこと言いやがって。

ほら、別にいいんだよ。死んだ娘を思い出したただけなんだ。あの子もこれが好きでね、よく欲しがってたもんだから」

「そんな……」

話を聞いて、よけい悲しくなってしまった。

あたしと同じくらいで死んでしまったなんて、ボスはとても辛かったはずだ。なのに、そんなことを思い出させてしまうなんて。

「こりゃ困ったな。頼むから泣き止んでくれないか？」

「ごめんなさい」

泣きながら謝る。

Episode : 104

泣くのもやめたほうがいいのだろうけど……自分でも情けないけれど、申し訳なくて可哀想で、涙が止まらない。

隣でイマドが、笑いながら立ち上がった。

「すみませんこいつ、メチャクチャ泣き虫なんですよ」

「ありゃ、そうだったのか」

「なんだかひどいことを言われる。」

「もー、かなりすごくて、学院でもしよっちゅうこうなんです。それに1回泣き出したら、そう簡単に止まんないですし」

「イマド、ひどい……」

さすがに抗議する。ホントのことだけど、人前で言われるのはさすがにイヤだ。

「なら泣くなって」

「ごめん……」

思わず謝ったけど、まだ涙は止まらなかった。

そのようすを見ていたボスが、笑い出す。

「けど、泣いてるのも可愛いなあ。うんうん、可愛い」

この人まで、母さんみたいな言い方だ。

「いまだきこの辺じゃ、そうやって泣く子もないしな。いいじゃないか、女の子らしくて」

「そですかね？」

イマドが答えてる横で、必死に涙をぬぐう。

泣いてるのが「可愛い」なんて、言われるあたしは面白くない。

「よしよし、可愛いからやっぱり、何かあげよう」
「い、いいです……」

断って、それ以上泣かないようにガマンした。
イマドやボスや他の人がまた笑ったけど……ここで泣いたらもつ
と言われるだろう。

「とりあえずこいつ、向こう連れてきますね。つか、俺ら寝たいで
すし」

「おう、悪かったな。お嬢ちゃんのこと、慰めてやってくれ」
「はい」

イマドがあたしの腕を引っ張った。

「ほら、行くぞ」
「うん」

あたしも立ち上がって続く。
後ろからレニーサさんもそっとついてきてくれて、いちばん奥の
部屋にベッドを用意してくれた。

「さ、これで寝られるわよ。
そんなに泣いて疲れたでしょう？ ゆっくり寝なさいね」
「はい」

その言葉に甘えてベッドへもぐりこむ。

「けど、なんでボスの娘さん亡くなったんです？ 雰囲気からだど、
なんかあったみたいですけど」
「もうだいぶ前だけど、殺されちゃったの」
「ボスともあろう人の娘が、ですか？」
「それがね……」

すぐに眠くなってきて、イマドとレニーサさんとの会話が遠くか

ら聞いた。

「あの……みなさんに、申し訳ありませんでしたって……」

「わかった、ちゃんと言っとくわね。だから安心していいわよ」

「はい……」

それを最後に、あたしは眠りこんでしまった。

Episode : 105

翌朝。

「ルーフェイア、起きなさいっ!」

「なに? 敵襲?!」

母さんの言葉に跳ね起きて、とっさに枕元に置いていた太刀を掴む。

それからようやく気付いた。

「あ、違った……」

寝ているところへの母さんの声で勘違いしたけど、ここは戦場じゃない。

「あんだ、すっかり染みついてるわねえ」

「だって……」

あの頃はこうじゃなければ、それこそ死にかななかった。

「まあいいわ。寝起きがいいのは、いいことだし。

それよりね、例の黒幕わかったわよ」

「ほんとに?」

いい加減な父さんと母さんの組み合わせで、よく分かったものだと感心する。

「あんだ、今あたしのこと『いい加減』とか思わなかった?」

「だって、そうじゃない」

父さんと母さんが周囲を引っかき回す名人なのは、嫌というほどよく知ってる。

戦場にいる時だって相当だし、これが実家にいる時となると、もうみんなして振り回されまくってしまつて、ため息の連続だ。

「まったくもう、人がせつかく探ってきてあげたのにそんなこと言うなら、教えてあげないわよ」

「母さん……」

子供みたいな拗ねかたしなくたって。

いつものことだけど、さすがに呆れて黙ってしまっ。

「あら、本気にしたの？ 大丈夫、ちゃんと説明するわよ」

そういつて母さん、手をひらひら振って笑った。

「昨日の話の続きなんだけどね、やっぱりコーニツシュ邸じゃなかったのよ、あの屋敷。」

同じ軍は軍なんだけど、マルダーグ大佐のお宅だったのよね」

「マルダーグ大佐……？」

少し考える。

確か記憶じゃ、コーニツシュ大佐と並んでロデステイオ軍の実力者だったはずだ。

ただコーニツシュ大佐が穏健派と言われるのに対して、この大佐はタカ派じゃなかっただろうか？

「けどタベ、その誰かとファミリーのボスと一緒にいるって、言っ
てなかった？」

「そおよ」

考えようによつてはとんでもない話を、母さんが楽しそうに肯定した。

「でもそうしたら、コーニツシュ大佐が犯罪組織と結託してるって
いう噂は……？」

確か昨日、情報通のゼロールさんはそう言ってたはずだ。

それとも、まさかとは思うけど……。

「それこそ、濡れ衣だと思うわ」

あたしが考えたのと同じことを、母さんも言う。

「証拠があるの？」

「確たるものはないけどね。」

でも、マルダーグ大佐のほうがファミリーとツルんでるのは間違いないわ。それにね、その大佐ときたら、出世に邪魔なりオネルを目の敵にしてるって言うし」

「そうなんだ……」

確かにそういうことだったら、「ライバルに濡れ衣を着せて」っていうのは常套手段だろう。

「ともかくその大佐とファミリーのボスとが、今回の黒幕じゃないかなって思うわけ。」

でね、これから屋敷ごとどうかしちやおうかなって」

「屋敷ごとって……」

それこそ器物損壊、不法侵入じゃないだろうか？

Episode : 106

「あらいいじゃない。」

「だいいちね、ちゃっかり権力の座に座ってるくせに裏でヤバいことに手染めてるなんて、いちばんのクズよ。」

「悪いことするならするで、肚くくってきつちりやんなきゃ」

「そういう問題だろうか？」

「なんか違う気がするけど、母さんにそう言っても通じないだろう。」

「で、あたしとディアスでとっちめに行こうと思って」

「父さんと2人だけで?!」

「いくらなんだって、それはムチャだ。」

「他の人は? ほら、クリアゾンの人とか……。」

「だいいちそれ、警察の仕事でしょう?」

「警察が何もしないから、みんな困ってるんじゃない」

「あつさりと母さんが言い放った。」

「それにこの人たちだって、そう簡単に手なんて出せないわ。」

「あたしらはしつかり無国籍だから、どこで何やったってどうってことないけど、あの人たちはここに住んでるのよ?」

「うっかり変なものに楯突いたりしたら、それこそ暮らしていけなくなっちゃうでしょ」

「そうだった。」

「基本的にシユマーの人間は国籍がなくて、あたしなんかもいつも偽造したもので通過してる。だから法の庇護も期待できないけれど、

反面何をやってもお咎めなしのところがあった。

何よりシュマー自体が、ある意味国のような形を成しているから、たとえ国籍がなくても困るような事態にはならない。

けど、普通の人は違う。

そうおいそれと国を捨てることはできないし、そうしてみても後のことは見通しが立たない。それに不法滞在している人ともなれば、見付かるだけでも致命的だ。

だから母さんは父さんと相談して、2人で行くことにしたんだろ
う。

「でも、どうして夕べ行かなかったの？」

ふと気になって訊いてみた。

こういうことは時間をあけるより、いきなり畳みかけたほうが有効だ。

「眠かったんだもの」

「……………」

何も言えなくなる。

確かに母さん、こういう人だけ……。

「ともかくそーゆーわけだから、これから行ってくるわ。ディアスがもう、車回して待ってるしね。」

あんたは どうする？」

母さんが訊いた。

いつもそうだった。どんな時も、どんなことも やむをえない理由であたしを戦場に連れ出したという以外は 母さんはあたしに、無理強いしたことはない。

「行かなかったら……どうなるの？」

「どうってことないわ。ちょこつとてこずる程度かしらね」

それが嘘なのもすぐに分かった。

母さんが「ちょこつと」と付け加えるときはたいてい、普通の人なら「絶対無理」と言うような場合だ。

「あたし、行く」

「いいの？ また辛い思いするわよ？」

「かまわないわ」

父さんや母さんが怪我をしたり 最悪死んでしまつくらいなら、自分が出るほうがよっぽどマシだ。

それに実を言えば、両親よりあたしのほうが強い。

生まれつきの強大な魔力と、考える以前に身体が的確に動くという特異な能力は、パワー不足を補って余りある。

Episode : 107

「ありがと、助かるわ。」

「ごめんね、頼りになんない親で」

そう言っ
て母さんがあたしを抱いて、頭を撫でた。
久々の
この感じ。

「ううん、いいの」

「ちょっとだけ泣きたくなる。」

「ほら、泣いたら写影に撮るわよ。最近の
がないから、狙ってるんだから」

「もう!」

慌てて離れる。

母さんのほうは今度は、イマドを起こしにかかった。

「ほらイマド、あんたも起きなさいって。寝てる場合じゃないわよ」
かなり乱暴に揺すり起こす
「と言っ
より揺すり」
落とす」。

「つてえ
あ、おはようございます……?」

「もう、寝ぼけてんじゃないの! 出かけるわよ!」

いきなりこ
う言われて、さすがのイマドもなんのこ
とか、分からなかつたみたいだ。

「出かけるつて、どこへです?」

「黒幕のところに決まってるでしょ」

イマドが『なんのこ
とだ?』
って顔であたしを見る。

「あのね、昨日観たつて言う邸宅……あつたでしょ? あそこの場所と持ち主、分かつたんだつて」

「あ、なるほど。けど、どうして俺が出かけるんです?」

「ルーフェイアが行くって言うから」

わけのわからない説明を母さんがする。

「あ、そですか。んじゃ俺も……」

でもイマド、それで納得してしまった。

「いい子ね。じゃあ行くわよ」

「へ? もう行くんですか?」

「なによ、文句あるの?」

「だって俺、メシ……」

まだ起きぬけで、いまひとつペースが上がらないイマドが、それでも母さんに抗議した。

けど、このくらいで動じる母さんじゃない。

「ったく、なに言ってるのよ。戦場出たら食べてるヒマないのなんて、しょっちゅうなんだから」

「んなこと言われても……」

夕べあれだけ食べてたのに、しっかりお腹がすいてるみたいだ。

「しょうがないわねえ。レニーサになんかもらってあげるから、車の中でも食べなさいね」

「あ、すいません」

なにか食べられると聞いて、イマドは少し元気が出たらしい。でも、結局なにももらえなかった。

「カレアナ、大変よ!」

真剣な顔で、レニーサさんが部屋に飛び込んでくる。

「ん? どしたの?」

「治安維持部隊に、ここへの出動命令が出るらしいわ!」

「はい?」

母さんが間の抜けた返事を返した。

「治安維持部隊って、治安維持部隊よねえ？」

別に戒厳令も出てないのに、なんでそんなものがくるわけ？」

なにかクーデターまがいのことがあったならともかく、治安維持部隊に出動命令が出るなんてよほどの話だ。

「それが……」

レニーサさんが説明を始める。

ことの発端は、例のシーモアたちの抗争だということだった。

Episode : 108

「で、それが今日の予定だったでしょ？」

だからそれにかこつけて出勤して、いろいろ根こそぎ潰そうってことらしいのよ」

「とんでもない連中ね」

母さんが毒づく。

けどこれで、最後のパズルの欠片がはまった。

つまりちよつとのことでは動かないクリアゾンの代わりに、ダグさんとガルシイさんのチームを仲違いさせて抗争を起こさせる。そしてそれを口実に、スラムの目障りな人たちを片付けるつもりだったのだ。

「ともかく急がないと、大変なことになりかねないわ」

「それはそうね」

あたしも同感だった。

『治安維持』と言えは聞こえはいいけど、この場合は下手をすると、強盗集団よりタチが悪い。

なにしろロデステイオ軍の規律の乱れは有名だ。進軍した先で一般市民に暴力を振るうことも日常茶飯事で、母さんは見つけるたびに叩きのめしてた。

それがシティの人たちさえも嫌う、スラムへ進軍？したら……。

「まったくいつもはほったらかしなのに、今回に限って連中も何考えたのかしらね？」

それにコーニッシュ大佐とやら、とんだ食わせ者だったわ。穏健派でならしてると思ったら、この騒ぎだもの」

「どういうこと？」
母さんが尋ねる。

「この命令だしたの、コーニッシュ大佐だそうよ」

「リオネルが……？」

昨日と同じように顎に手を当てて、母さんが考えこんだ。
きっと信じられないんだろう。

「そりゃ、あなたは大佐を直接知ってるみたいだから、信じたくないんだろうけど。」

でも軍に行ってる子が、出勤の情報と一緒に流してくれたから、間違いないわ」

「……………」

しばらくの沈黙の後、母さんが口にしたのはぜんぜん別の言葉だった。

「部隊が来るのに、どのくらいかかりそう？」

「小1時間ってとこかしら？」

どこでどう情報を手に入れたのか、迷うことなくレーサさんが答える。

「そう。それじゃ黒幕のとこへ行ってる暇はなさそうね。」

せつかくの獲物を逃がすのは癪だけど、しょうがない、防衛戦に回りますよ。

さ、行くわよ」

せつかく遊びに行こうとしたら寸前で邪魔が入った、そんな母さんが言った。

「ちょ、ちょっと、あなたたちだけで？！」

もう少しすればクリアゾンの面々やらちびちゃんたちのグループ

が揃うから、それまで待ちなさいよ」

「へーきへーき、このメンツだったらビルの1つや2つ、軽く壊せるから」

しかもどういうわけか、イマドの襟首をつかむ。

「メシ……」

「しのこの言わないの!」

引きずられてく彼を追いかけて、あたしも部屋を出た。

隣の部屋へ抜けて、それから店のほうへ出る。

「どこへ行くんだ?」

「そりゃ、治安部隊叩きのめしにに決まってるじゃない」

「あんたたちが? それに子供まで連れてくのか?」

店にはもう、クリアゾンの人たちが集まっていた。ボスの顔も見える。

「あんた、何考えてるか知らないが……これは俺たちの問題だ。出る必要はない」

「そうもいかないのよ」

きつい調子のボスの言葉に、母さんはけろりと答えた。

Episode : 109

「ディアスはこの出で、あたしはいちおうその連れ合いだもの」
それから一転、鋭い笑顔になる。

シユマー家の歴戦の猛者をも震え上がらせる、凄絶としか言いようのない微笑み……。

「悪いけど、あなたたちが束になってかかっても、あたしたちは倒せないわよ」

しん、と店の中が静まり返った。

「というわけで、最前線に出させてもらうわ。

だいいち連中の起動兵器と渡り合えるのは、現役で傭兵やってるあたしたちぐらいでしょ？」

「まあ、そうだろうが……。

だが、この子たちまで連れてくことはないだろう。子供の戦力なんざ、タカがしれてる」

言われて悲しくなった。

あたしの戦闘能力は……普通じゃない。

「言いたいことは分かるけど、そう言わないで。あたしだって一応親なのよ。連れてかないで済むなら、そうしてるわ。

けどこの子たち 並じゃないのよ」

ボスが複雑な表情になった。

きっと母さんの言葉の裏を読み取ったんだろう、腕組みをしながらため息をつく。

「……そしたらお嬢ちゃん、これを持っていきな」

「え？ でもこれ、大切な……」

ボスがあたしに差し出してくれたのは、昨日の短刀だ。

「ただこれ、亡くなった娘さんの思い出が詰まってるんじゃないかっただろうか？」

「あたしが躊躇っていると、ボスがふつと笑った。」

「これはな、持つてる人間に幸運をもたらすって言われてるんだ。娘が死んだときもそうさ。俺はこれを持ってでかいヤマを片付けて、意気ようようで……。」

「けど欲しがってた娘は、ちょっとしたこと殺されちゃった」
視線が下へ落ちる。

「さつさと娘に渡してりや死ななかつたんじゃないか。くだらないとは思いながら、いつもそう思うのさ。」

「だからお嬢ちゃん、持っていくといい」

「わかりました」

短刀を受け取る。

「さ、もたもたしてらんないわ。さつさと行って片付けるわよ」

「この話はこれで終わり、そんなふうに母さんが言う。」

「俺たちもすぐに行くからな」

「あ、そしたらその前にちょっと頼まれてよ」

ぞくりとする。

「あの母さんの、子供みたいな悪戯っぽい表情……。」

「ここの人たちには、当然知らせるんでしょ？」

「もう使えるだけの人間使って、知らせてる最中さ。」

「もっとも知らせたところで、家にこもってるくらいしかテはないんだがな」

「それなんだけどね」

「なんだかボスと相談を始める。」

「確かにそれだったら、イケそうだな」

「でしょ？ そしたら頼むわね。あたしはリオネルに連絡入れたらすぐ出るわ。」

レニーサ、通話機借りるわよ」

慌しく母さんが奥へ行消えた。

「メシ……」

隣ではイマドがまだぼやいている。

あまりにも可哀想だった。

「あのね……携行食でよかったら、あるけど？」

「それでいい」

きつとよっぽどお腹がすいてるんだろう、いつもならちゃんとしたものを食べたがるイマドが、あっさり妥協する。

Episode:110

「まあったく。」

「そんなんじや戦場出たら生き残れないわよ?」

「もう、母さんのせいでしょ!」

いつのまにか戻ってきた母さんに、さすがにあたしも言い返した。なにしろいきなり揺り落として起こした上に、ロクな説明もしないで巻き込んで、こんな迷惑な話はない。

「だいいちイマド、あたしと違って戦場でなんて育ってないんだから! なのにそうしろなんて、ひどすぎるわ!」

けどあたしが真剣に怒っているのに、母さんが笑い出した。

「なにが可笑しいのよ!」

「あ、ごめんごめん。でもあんたがそういうふうに言うの、初めて見たもんだから。」

まあ確かにそうね。いくら急いだとはいえ、ちょっと慌しすぎたわ。悪かった」

意外なくらい簡単に、母さんが謝る。

「いや、とりあえず食ったからいいです。」

あ、でもあとで、なんかご馳走していただいても」

「ルーフェイア、あんたとんでもないの選んだわね」

「?」

あたしは何を選んだんだろう?

意味がわからなくて隣のイマドと母さんを見比べたけど、どっちも笑っただけだった。

けつきよく教えてくれるつもりはないらしい。

「ま、ともかく行きましょ。じゃあボス、さっきのこと、よろしく
お願いね」

「ああ。」

お前たち、絶対にムリはするんじゃないぞ?」

「あ、はい」

ボスに念を押される。

それから店を出て狭い廊下を抜け、階段を上ってやっと通りへ出た。

冬な上に時間がまだ早いせいか、あたりはやつと日が昇ったくらいだ。

通りには1台の車が、エンジンをかけたまま停まっていた。中にいるのは当然父さんだ。

「ディアス、ごめん、行き先変更になっちゃった」

「どこだ?」

こういうのはしょっちゅうだから、父さんは驚きもしない。

「治安維持軍が来るらしいの。どっちへ行けばいい?」

「向こうだな」

言いながら父さんが車を降りて、さつさと歩き出す。

あたしたちも慌ててあとに続いた。どうやらここから歩いていく程度の所で、軍が待機するらしい。

車に乗らずに済んで、よかった。

内心ほつとする。

うちの両親の運転ときたら、かなり荒っぽい。特に母さんなんて

言つと、信号を無視して突っ込んでみたり強引に道の真ん中でＵターンしたり、ともかくムチャのしどおしだ。

けど今は、もっと別に考えなきゃならないことがある。

「母さん、ロデステイオ軍の兵装つて、最近変わった？」

「そうでもないわよ。一般兵はまるつきりいつしよだし、上級士官も大差ないし。

もっとも人形なんかを持ち出されたら、それなりに気合入れなくちゃね」

「そう……」

その「人形」が問題だった。なにしろあたしが最後にそれを見たのは、一年半も前だ。新型が出てるかもしれない。

俗に人形と呼ばれるそれは、要するにゴーレムだ。無機物を何かの形にして、思い通りに動かせる。ただ元が生き物じゃないから、思考パターンが単純で、簡単な事しかできない。

けど最近は魔視鏡の操作技術を取り入れて、遠隔操作でかなり高度なことが出来るようになってる。それに噂じゃ、操縦者なしで動くものも出てるって言う。

かといってこんなのは機密だから、よく傭兵で参加してる父さんや母さんも知るわけがなかった。

「まあ、出たとこ勝負ね。

もっともあんたじゃ、そうそう負けたりしないでしょ？」

「そんなの、勝手に決めないでよ……」

戦場に「絶対」なんて、ないのに。

「そこで拗ねないの」

「拗ねてないわよ！」

どうも母さんと話していると疲れる。

「あらそう？」

そうそう、イマド、これ持ってきなさい」

ほんと無造作に母さんが、クリスタルの結晶のようなものを放り投げる。

Episode:111

「　　。　　。あれ？　　これ精霊ですか？」

「そうよ」

イマドの手の中からちらりと見えた、淡い薄氷色。たぶん氷系の精霊だ

「炎防いだりできるから、上手く使いなさいね」

「はい」

母さんがイマドを心配してくれて、理由はわからないけど、なんだか嬉しくなった。

「一般兵は無視していいわ。そっちの方はみんなが、なんとかしてくれるだろうから。」

あたしたちは、人形だけに的を絞るわよ」

「わかった」

確かにあれと渡り合える人間は、このスラムにはそれほどいないだろう。

母さん、いちおう考えてるんだ。

いい加減なことでは並ぶ人がなさそうだけど、こと戦闘となれば、うちの両親は平均よりずっと上だ。

「人形って、どんなヤツだよ？」

「種類はそんなに多くないの。3、4種類くらい……かな？」

尋ねてきたイマドに、記憶を手繰りながら説明する。

「行動はそんなに複雑じゃないから、分かれば避けるの、簡単だと思う。あと魔力が不安定だから、魔法攻撃すると暴走して倒せるの。」

ただ新型は、ちょっと……」
もつとも街中だから、それほど凄いのを持ち出すとは思えなかった。

「それだけでも分かってりや、だいぶ違うって。サンキュな」
「うん」

少しだけまた嬉しくなる。

「イマド、ムリしなくていいわよ。伝令代わりにあんた連れてきたんだから。」

「ヤバいと思ったら、さっさとルーフェイアに任せなさいね」

「パシリかよ」

「そうとも言つかしら？」

気に入らなそうに言った言葉を肯定されて、イマドがますます嫌そうな顔になった。

それを見た母さんが、またけけらと笑う。

「そんな顔しないの。ただのパシリならね、別にあんた連れてこないわ。」

あたしが念話でこっちの状況伝えるから、それをルーフェイアに教えてやって」

「あ、なる……ってあれ？ ルーフェイア、お袋さんとお前で直接できねえのか？」

「うん、ダメなの」

意外そのものという響きの言葉を、あたしは肯定した。

うちの家系は血が濃くなっているせいか、念話をはじめその手の強力な力を持つ人間が多いけれど、あたしにはどういうわけか全くダメだ。

そのうえ家の誰も、あたしへの「接続」は出来なかった。

「ふつう親子は出来るらしいけどな？」

ま、いいか。おれとお前のお袋さんなら、けっこう」

「なにがいいんだ？」

イマドの言葉に別の言葉が重なる。

「ゼロールさん？」

重なった声の主は、あのジャーナリストの人だった。

「どうしたんですか？」

「どうした、じゃないさ。治安維持軍がいきなりスラムへ向かったりしたら、これは事件だろう？ それもかなり非道な部類になるやつだ。」

だからきつちり記録に残してやろうと思ってね」

言いながらこの人が、手にしている写影機をちょっと持ち上げて見せた。

「こいつに撮れば、そう簡単に言い逃れはできない」

「フリーの特権ってワケね」

母さんの茶々に、ゼロールさんはやっと笑ってうなずく。

「自分で自分のメシ代稼いでるからな。誰にも文句はいわせないさ。」

というわけで、僕も同行させてもらうよ」

「美人に撮ってくれるならいいわよ」

「母さん……」

分かってるのか分かってないのか分からない、母さんの言動にため息をつきながら、あたしはみんなと一緒に南へと歩を進めた。

Episode : 112 戦闘

N a t t i e s s

ああもう、やんなっちゃうな。

みんなまだ寝ぼけてるか起き出してきたくらいなのに、あたしつたらひとりで早起きしてご飯作り。

やっぱり誰かに押し付けちゃったほうがよかったかなあ？

けどそうすると、めっちゃめっちゃに不味いもの食べさせられかねないんだもの。

「おい、そろそろできそうか？」

「うるさいなあ！ 人に作らせてるんだから黙って待ちなさいよ」

「あ、悪い悪い」

ケインったら口ではそう言ってるけど、顔が催促してる。

ちなみに今朝のメニューは割合簡単で、野菜をいっぱい放りこんだスープとパン、それにサラダ。あとは……卵料理作るのかな？

箱を開けて卵の数を確かめたけど、どうにかありそうだし。

じゃあ、えつと人数分だから……。

「おい、誰か出てくれ」

第一弾の卵を割ろうとした時、ドア当番のウハニが悲鳴をあげて。

「もう、しょうがないなあ」

みんながまだ着替えてたりなのを見たあたし、仕方なくドアへと出た。

背伸びをして覗き窓を覗く。

あれ？

慌ててドアを開けた。

「なによ、こんな朝早くから！」

「俺だつて好きで来てるんじゃないやねえって」

ドアの向こうにいたの、なんとダグとその手下。

そりゃ今日の祭りは延期になっただけ、だからってねえ……。

「ともかくガルシイのやつに会わせてくれ。とんでもないことになつちまつたんだ」

「なによ、それ？」

いまさらこいつにとんでもないって言われても、ちょっと説得力ないのよね。

でも、ダグったら真剣な顔で言つたの。

「治安部隊が来るつてんだよ！」

「うそ?!」

さっきのナシ。

これは確かにとんでもないもん。

「と、ともかく入つてよ。ガルシイ起きてるから」

事態が事態だから、慌ててこの男たちを中へ招き入れる。

「悪いいな。えっと……こっちか？」

「そっちは台所！　こっちだつてば」

ほおんと、これでよくリーダーやつてるよね。

うちのガルシイはすごい切れ者だけど、この人ときたらどっか抜けてる感じだもん。

まあ、誰か下に凄いのがついてるのかもしれないけど……。

ドアの外から、声かけてみる。

「ガルシイ、入っていい？」

「構わないが、なんだ？」

「んとね、ダグが来たの」

一瞬の間。

さすがのガルシイも、これにはびっくりしちゃったみたい。

「あ、別に何もなくて入れたんじゃないのよ？」

「なんかね、治安部隊が来るって言うもんだから」

「なにっ！」

ガルシイをもう一段驚かしといて、あたしドアを開けたの。

Episode : 113

「その話、本当なのか？　だいいち、どうしてそういう話が急に持ち上がったんだ？」

「ともかく、みんなをどうにかしないと……」

「そうよね。」

治安維持部隊なんて来ようもんなら、あたしたちまっさきに槍玉に上がっちゃうもん。

それにこの辺の人たちも、避難させなきゃ。巻き込まれちゃったりしたら、良くて逮捕、最悪だと収容所送りになりかねないし。

「ともかくウソじゃねえって。」

なにせレニーサさんから連絡あったんだ。で、町中に知らせて回れってさ」

後ろからついてきたダグもそう言うって。

「部隊はいつごろ来るんだ？」

「よく知らねえけど、だいたいあと3、40分かそこらって言うってぜ」

「うそお？」

隣でなんとなく話を聞いてたあたしも、さすがに青ざめちゃった。だってたったそれだけじゃ、いちばん逃げなきゃならない小さい子連れたお母さんとかが、逃げらんない。

こうなるとあとは、家の中に閉じこもってるしかないんだけど……。

けどこの国の治安部隊って、はつきり言って「治安悪化」部隊。もう勝手に上がりこんできて貴重品持ってっちゃったり、食料盗んでったり、その辺の人を殴ってストレス解消したり。

若い女の人なんてなにされるかわかんないし、ちっちゃい子だって危ないったらありやしないし。

なにしろ子供がちよっと兵隊に逆らっただけで、家族ごとD地区の収容所に入れられちゃったって言う、嘘みたいな話まであるんだもの。

「ともかく手がたりねえ。うちの連中はもう2丁目へまわしてあるけど、お前んとも手伝ってくれ」

「分かった。」

おい、お前たち！ のんびりしてるヒマがなくなったぞ！

ガルシイがおっきな声を出して、いきなりアジトが騒がしくなつて。

「治安維持部隊が出動するらしい。町中に知らせるぞ！

ダリード、お前はアサルタンテとその下の連中に、片っ端から連絡しろ。方法は任せる」

ガルシイに命令されて、ダリードが飛び出してった。

ちなみにアサルタンテってのは、強盗を専門にしてる少年グループのこと。もちろんあたしたちなんかより、グループの数も人数も多いの。

けどほんと、うちのリーダーって切れ者よね。

こゆとこすぐ頭まわって、どんどん指示だしてくれるもん。

「もたもたするな、俺たちもすぐに出るぞ」

「待てよガルシイ、朝メシくらい食わせてくれって」

「ダメだ」

容赦もないけど。

「あ、朝ご飯途中まで作ってあるから。適当にサラダとパンとスープ、つまむくらいならできるよ」

「ひゃあ、ナティ、恩に着るぜ」

「じゃああとで、なんかプレゼントでもしてね」

「ひでえヤツだな」

ムツとすること言うから言い返す。

「いいわよ、そしたら食べさせないもの」

「ひええ、ウソ、ウソだって！」

「ナティ、なに朝から漫才してるんだい」

髪を乾かし終わったシーモアが、入ってきた。

「あたしのせいじゃないもの。それよりシーモア、話聞いた？」

「ああ」

さすが。

頭洗って乾かしながら、シーモアってばガルシイの言葉聞いてたみたい。

Episode : 114

「武器、ちゃんと出した？」

「あんたねえ。」

あたしだつて学院生だよ。武器出してないわけないって、彼女がいつもの不敵な微笑みで返してくる。

そうだよな、やっぱりこうじゃなくっちゃ！

「部隊はやっぱり、南から来るのか？」

立ったまま食べながら訪ねたガルシィに、ダグが答える。

「レニーサさんはそう言ってたな」

「そうすると、南の住人がいちばん先だな。それぞれ一區画づつ受け持つて、その先はその住人に任せるしかないか」

「オツケー、そしたら俺、食い終わったから行ってくる。1丁目の44番地と、その北側な」

「頼んだぞ」

まず先陣を切つて、ウハニが出てつて。

「さ、うちらも行こう。」

ガルシィ、あたしはナティと1丁目の29番と30番まわるよ」

「わかった。俺もすぐに行く」

あたしとシーモアも食べ終えて出ようとしたとき、また人が来た。

「あ、リードさん？」

クリアゾンのメンバーが直々にここ来るなんて、珍しい話。

まあ、非常事態だからなんだろうけど。

「お、ダグもいるのか。こりゃ都合がいい。もうお前ら、話は聞い

てるな？」

「はい、聞いてます」

さすがのガルシィも、この辺の人相手だと一応口調が丁寧。

「そのことなんだが、ボスから付け加えだ。いいか……」

気になるから、ちよつとだけ聞き耳たててみる。

「どうせこの時間じゃもう、逃げるのはムリだ。だからみんなして、家にこもるしかないだろ。」

「そこで、だ」

これには思わず、あたしも身を乗り出しちゃって。

もちろん説明がされるにつれ、みんなの目も輝き出して。

「そいつは面白そうじゃねえか」

「うん、ぜつたいいい！」

「よし、そうと決まったら、急いで知らせに行かなきゃね」

急にアジトの中が活気付く。

「ナティ、行こう！」

「もちろん」

「あ、ちよつと待て」

けど出ていこうとしたら、リーダーに呼びとめられちゃって。

「もう、なによ。時間がないって言ったの、リーダーでしょ？」

「ああ。だからこれを使え」

「あ……」

思わずシーモアとあたし、にこにこしちゃった。

なにしろリーダーが出してくれたの、浮遊ブレード。板に小さい浮遊石が仕込んであって、ちよつとだけ宙に浮く。だから雪の上のソリみたいに、乗ってちよつと片足で地面蹴るだけで、すすいすすい進

むの。

あとは重心を変えたりして、自由自在。高価いものだから滅多に使わせてもらえないけど、これがあればグンと早く知らせに行ける。

「ホントにいいのかい？」

「非常時だからな。それにちゃんと人数分あるから、気にしないでいいぞ」

「やったね！」

あたしとシーモアと、ひとつづつ受け取って。

「ナテイ、あんたちゃんと乗り方覚えてるかい？」

「そういうシーモアこそ、大丈夫なの？」

もっとも言う気持ちは、わかんなくもなかったり。

だって実は浮遊ブレード、学院じゃ禁止。とはいえ、けっこうみんな見つからないようにして乗ってはいるんだけど。

「けどこれなら、1丁目まですぐに行けるよね？」

「あんたが転ばなきゃ行けるさ」

「もう！」

そしてあたしたち、通りへ飛び出したの。

Episode : 115

R u f e i r

「あんたたち、なに民間人に刃向けてるのっ！」

母さんの怒声と共に銀光が閃いた。

剣をはじき飛ばされて、兵士が膝をつく。

「ずいぶん強い人だな」

くつついてきたゼロールさんが感心した。

「うちの両親、いちおう現役で傭兵稼業こなしてますから。

大丈夫ですか？」

答えながら、兵士に素手で立ち向かおうとしていた男の人に、あたしは駆け寄った。

「た、助かったよ。もうダメかと思った」

男の人の後ろには奥さんと、抱きかかえられた赤ちゃん。

ゼロールさんがささず写影に撮った。

「女房と子供を、スラムの外へ出そうと思ったただけなのに、途中でこいつらに出くわしちまって……」

「おっさん、もう出るのはムリだよ。早く家へもどった方がいい」

「シーモア？」

声に振り返る。

炎色の髪をした、見慣れた姿があった。

「こつち、終ったよ あれ？ ルーフェイアじゃない」

ナティエスもどこからか出てくる。

「2人とも、どうしてここにいるの？」

「そんなびつくりした顔しなさんなつて。

ボスなんかに言われてね、スラム中に知らせてたのさ」

「あ、それで……」

どうりで辺りが静かだったわけだと、納得する。

「けどよ、この状態で知らせたつて無意味じゃねえのか？ よほどのバカじゃなきゃ、見りゃわかるぜ」

「別にただ『来た』つて、言ってるわけじゃないからね」

「？」

それ以外に、何を伝えてるんだろう。

「はい、お喋りはそこまでね。やることが山積みなんだから」

一通り兵士を蹴散らし終わった母さんがもどってきた。

「連中いったん引いたから、次は本格的に来るわ。あたしはディアスの方へ回るから、ここは頼んだわよ」

「わかった」

さつき父さんから聞いた話じゃ、このスラムで人形を持ち出せそうない通りは、ここともう1本しかないのだという。

「イマド、連絡役お願いね。

んじゃ向こう、片づけてくるから」

それこそ片づけものをしてくるような調子で、母さんの姿が路地へ消えた。

「緊張感とか、カケラもねえ人だよな」

「だから、言わないで……」

イマドの言葉に思わずため息をつく。

しかもあれで、意外にも失敗しないってというのが……。

「ほんと、似てない母娘だね。なにせ なんだい、ありゃ」

何か言いかけて、シーモアが違う方を指差した。

「やだ、なにあれ」

「報道関係……みたいだけど……」

動影機を担いだ人と取材人の組み合わせだから、それ以外にはちよつと考えつかなかった。

しかももう、放映が始まっているらしい。

Episode : 116

『え、現場です。治安維持部隊はすでに到着しましたが、入り口付近で抵抗に遭っている模様です。』

人通りはさほど多くありません。おそらくは少年たちの抗争とかから逃れるため、みな自宅にこもっているものと思われます。

あ、すみません。どちらへ行かれますか？』

「うるせえやつ！ てめえなんかさっさと踏み潰されちまえ！」

取材人にいきなり集声機を向けられた人が怒鳴った。追いすがつて何か聞こうとしても、その人は知らん顔で行ってしまう。

取材人が仕方なく、別の通行人に集声機を向ける。

『あの、子供たちが派手に抗争をやるとの話ですが、どうですか？ やっぱり怖いですか？』

「なにバカ言つてんだい、あの子たちの抗争なんかどうってことないよ。なにせあの子らは、あたしらは絶対巻き込まないからね」

おばさんが言い返す。

『ではなぜ、閉じこもったりするんでしょうか？』

「あんた、頭悪いね。軍が来るからに決まってるじゃないか。

ったくあいつらときたら勝手に上がりこんで貴重品持つてくわ、せつかくの食料は台無しにするわ。

拳句に若い娘さんなんか、なにされるか分かったもんじゃないしね」

『は、はあ……』

おばさんの物言いに、取材人が絶句した。

後ろの動影機のほうで、「カット、カットだ！」とか「もう流れ

「ちゃいました」と言って、報道の人たちが慌てている。そのあとメモを持った若い人が、取材人のところへ駆けてきた。
メモを見て、取材人が姿勢を正す。

「え、ウワサには聞いておりましたが、ここの住人は軍に対し、かなり間違ったことを吹きこまれているようです。

やはりこれも、教育が行き届かず……」

隣のナティエスが息をのんだ。シーモアとイマドの表情も陰しくなる。

「なんかすつげえ腹たつな」

「ぶん殴ってやろうか？」

「でも、動影で流されちゃうよ。まずくない？」

戸惑いながらあたしたちが遠くから見ているなか、取材人は構わずに続けている。

『我が番組の調査では、ここの子供たちの4割が学校に行っておらず、路上でスリやひったくりをしながら　　?!』

好き勝手なことを言っていた取材人の言葉が、急に途中で途切れた。

考えるより先に身体が動く。

「ヴェゼ・ジーヴルっ！」

なんのはずみか取材人へ迫ってきた、人形の足元に冷氣魔法を放つと、思惑通り片足が凍りついた。

「ルーフェイア、あれじゃ倒せてねえぞ」

「大丈夫」

言っているうちに派手な音とともに人形が転倒して、兵士が2・3人巻き込まれる。

「情けねえ……」

「あの人形、旧式で頭が重くて、足元狙うとひっくり返るの」
呆れてるイマドに説明した。

「ヤダ、みつともない」

「っていうか、それで兵器って言うのかね？」

ナティエスとシーモアも呆れ返る。

でもそれ以上の反応を見せたのが、取材人たちだった。

『ななな、なんで私たちを狙うんだ?! 私たちは、その、無関係
な……』

集声機を握ったまま慌ててるところを見ると、ここがどついう場所
か全く分からずに取材してたらしい。

Episode:117

「ドンパチやってるとこで、なにワケわかんねえこと言ってるんだか」
「きつとさ、お弁当とかおやつ、持って来てるんじゃない？」
あたしが牽制に魔法を放つ後ろで、みんなが容赦のない突っ込みをした。

向こうではまだ取材人が騒いでいる。

『だいたいつ、わ、私たちを狙わないというから、わざわざ それに上手く軍を擁護する報道をしろって言ってきたのは、そもそも……』
わわわつと叫んで、後ろから取材人の仲間らしい人が集声機をもぎ取った。

怒声が飛び交うところを見ると、これもしかり放映されてしまったらしい。

「だからこんな企画、ヤだっって言っただんだ！」
ばやきつづける報道陣を見るうち、なんだか可笑しくなってくる。理由はわからない。ただ慌てふためくその姿が、可笑しくてたまらなかった。

「ははっ、はははっ、マジ マジ、バカじゃねえの」
「馬脚って……あはは、このこと、よね……」
「くくく……ナマで漫才……はは……放映、しますって……？」
イマドもナティエスも、シーモアも笑い出す。

「つまりは真実を知らしめるふりをして、ウソを流そうとしてたわけか。

報道に携わるものとしては、最低の行為だな」

あたしたちとは対照的に、ゼロールさんの声は冷たかった。同業なだけに許せないらしい。

厳しい表情のまま、つかつかと歩み寄る。

「ガマルンド、キミがいながらよくこんな話に同意したな？」

どうやら知り合いがいたみたいで、きつい口調で問い詰めた。

「そうは言うけどな、こっちだってクビがかかっててな……」

「だったらこの仕事、辞めたほうがいいんじゃないか？」

知り合いの人が言葉に詰まる。そこへゼロールさんはたたみかけた。

「ジャーナリストが嘘を報道したら、おしまいだぞ。」

その集声機と動影機はなんのためにある？　嘘を流して給料を稼ぐためか？　そうじゃないだろう！

放送局　たぶん　の人たちがうつむいた。

あたしがさつきから魔法で治安維持部隊を牽制しているから、周囲は嘘みたいに静かだ。

「俺の言うことが分かるんだったら、今すぐ妙な報道は止めるんだな。代わりに事実を撮っておけ」

言ってこの人が、あたしたちのほうへ振り向く。

「俺はこいつで必ず事実を撮るから、心配しなくていい。」

なにせ正当防衛だしな」

「そしたらさ、なるべくいろいろ撮ってね」

しっかりとナティエスがリクエストを出した。

「きつとね、これから面白いことがあるから」

「面白いこと？」

思わず訊き返したけれど、ナティエスもシーモアも笑っただけだった。

「ま、すぐに分かるさ。　　っと、また来たね」

「一般兵か。めんどくせえな」

イマドがぼやく。

「雑魚はスルーで、一気に中ボスかラスボスってワケにやいかねえのか？」

「そんなムチャな……」

なにかのゲームじゃあるまいし。

「いや、多分そうできると思っよ」

「え？」

さすがに呆れていたあたしの後ろから、シーモアがイマドの言葉を肯定した。

Episode : 118

「でも、目の前に兵士 トオーノ・センテンツァっ！」

すぐ向こうのアパートに、兵士2、3人が上がりこもうとしているのを見つけて、とつさに魔法を唱える。

彼らがこつちに気付いて、何か言いながら駆けてきた。

あたしも太刀を構える。

「つたく、スラムのガキどもはほんとに臆がなつてないな。

ほら、ケガしたくなかったら ?！」

そう言いかけた兵士の頭へなにかが命中した。

「な、なんだ、どこだ?!」

急に倒れてしまった仲間の周りで、他の兵士がうるたえる。

「るっさいね! あんたたちこそその辺ぶち壊したりして、何が治安維持だい!」

驚いたことに何階建てかのアパートの窓が開いて、住人たちが身を乗り出していた。

「ほら、これでも食らって泣いて帰るがいいさ!」

また何かが降ってくる。

「そうだそうだ、ここはお前らの好きになんかさねえぞっ!」

「しっぱ巻いて帰って、母ちゃんのオツパイでもしゃぶってな」

あちこちから、罵声と共にありったけの物が投げられた。

お鍋、やかん、酒瓶 これはちよつと危ない ボール、なに
かの魔道具、タライ……。

「げげ、ちよつとこれは止めてくれよ」

イマドが慌てて避けたのは生ゴミだ。

「ほらっ、こつち下がりの！ あんまり前にいると巻き添え食うよ」
「う、うん」

シーモアに呼ばれて急いで下がる。

「さっき言ってた面白いことって、これ？」

「ああ」

「あはは、また当たった当たった」

ナティエスが手を叩いて笑っているとおり、もう治安維持部隊は大混乱だ。

確かに生ゴミが降ってくるのを想定した訓練は、あたしもしたことはないけど……。

もつとも実害ということだったら、生ゴミはまだいいほうだろう。これが植木鉢とかフライパンとか包丁だと、命に関わる。

でも、やっぱりちよつと嫌かな？

あたしも大抵のことは平気だけど、どちらかと言えば生ゴミは頭からかぶりたくない。

「しっかし、よくこんなこと考えついたな？」

「あたしらじゃないんだ。クリアゾンの誰かが考えついて、伝令回したのさ」

「クリアゾンの誰か……？」

唐突に、母さんがボスに何か言ってた光景を思い出す。

あの時の母さん、なんだかひどく嬉しそうで……。

「お前のお袋だったのか」

「たぶん……そうだと思う」

きつと読み取ったんだろう、何も言わないのに声をかけてきたイマドに、あたしはため息をつきながら答えた。

ほんとに母さんときたら、やることが突拍子もない。

「だから、だから私は、こんな場所への出勤はイヤだったんだ！」
向こうのほうでは何か布　じゃなくて、赤ちゃんの使用済みオムツらしい　の直撃を受けた上級士官が、愚痴をこぼしていた。
この仕官は気が進まなかったものの、命令に逆らえなくて嫌々ここまで兵を率いて来たらしい。

「そんなにイヤなら、来るんじゃないってのさ」

「それは……無理よ」

毒づいているシーモアに、あたしは答えた。

「命令に従わなかったら、どうなるか分からないもの」

良くても営倉入りだろうし、時と場合と所属している国が悪かったら、死刑も有り得る。

Episode : 119

「向こうさんもお気の毒ってやつか。タイヘンだな」

イマドが少しだけ同情したような声を出した。

あいかわらず向こうは大混乱だ。

「ええい、何をしているか！ 早く人形を出せっ！」

業を煮やしたのか、さつきとは別の上級士官がそう叫んだ。

「ともかく構わん、片っ端から叩き壊せ！」

なんてめちゃくちゃな。

およそ軍人とは思えない命令に呆れる。

でも治安維持部隊の兵士たちはそれを真に受けたらしくて、次々と人形が前へ出てきた。

こうなると……どう考えても一般の人やシーモアたちには荷が重くなる。

思ってるうちに一機が連射砲を撃って、慌ててスラムの人たちが部屋の中へと引っ込んだ。

あの人たち、なにもしてないのに。

ひどく腹がたつてくる。

「あのね、ここ以外の状況って分かる？」

向こうの部隊を見据えながら、あたしはイマドに聞いた。

「ちょっと待ってくれな。

向うはぜんぜん平気だってさ。あと、ほかの細い道なんかはクリアゾンの人が出て、防衛線張ってくれたらしいぜ。

とりあえず、お前はそこをしっかり守ってろって。で、なんか突

破されたら写影増やすとか、お前のお袋言ってるぞ?」

「……………」

最後の一言は余計だ。

とりあえず牽制に魔法を放っておいて、あたしはざっと頭の中で戦力を計算した。

シーモアとナティエスの武器は、基本的に飛び道具だ。当然遠距離からが向いている。あたしとイマドは近接武器で精霊も使ってるから、これもポジションは決まりだろう。

できれば、もうちょっと人数がほしいんだけど。

守り切れないことはないけど、この人数差だと手加減ができない。ただの防衛戦なら、できる限り死傷者は出したくなかった。

「ルーフェイア!」

考え事をしていたあたしを心配したんだろう、イマドが叫ぶ。

でも、戦場で育ったあたしの感覚は、しっかり周囲を捉えていた。

「遥かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ」

振り向きながら呪文を唱える。

「ケラウノス・レイジっ!」

魔法が決まって、人形が倒れた。

「さっきのとは違うな」

「うん、このほうが後継機で、新しいの」

もっとも後継機というのは呼び名だけで、中身はまったく違う。

その辺はロステイオ軍の傭兵隊にいたとき、たまに部隊に配備されたからよく知っていた。

長年使われていた旧式の頭でっかちとは違って、これは見かけもスマートだ。

「滅多に回してもらえなかったけど、これがあると戦闘が楽だったの」

「……んなもん、一撃で倒すなよ」

「そう言われても……」

こんな相手にモタついていたら、それだけ戦闘が不利になる。

「2人とも、なに和んでんのさ！」

「和んでるわけじゃ、ないけど……」

まだ戦闘自体が、差し迫った状況になっていない。

「ともかく、この通りはうちらでどうにかしないと　　っと、やつと援軍が来たね」

シーモアの言葉どおり、向こうからガルシイさんやダグさんが来るのが見えた。

どうしよう。

人数が増えたのは嬉しいけど、ヘタに前線へ出てこられたらかえって危ない。

Episode : 120

「ねえシーモア、みんなの主な武器ってなに？」

「あん？ まあだいたいナイフか銃かな」

「そう…… ナティエスは苦無よね？」

彼女はいつも、猛毒を塗った苦無を得物にしている。

「あ、でもあたし、ここにいるときは銃も持ってるから
「そうなの？」

けどそれなら、かなり戦法の幅が広がる。

あたしはざっと周囲を見回した。

割合まつすぐな通り。少し奥には十字路と止められた車。

だったら……。

「あたしとイマドで、前線に出るわ。」

シーモアたちは後ろの十字路と車使って防衛線とって、そこから
弾幕張って。もし自動小銃とか手榴弾があつたら、使っちゃって
いから」

「つ、使っちゃって……」

ナティエスが信じられないといった顔になる。

「ナティの言う通りだよ。あんたはまだともかく、イマドはどうな
る？」

「平気よ」

自信があつた。

なにしろイマドは、母さんを上回る能力の持ち主だ。だとすれば
間違いなく、周囲をあたし以上に把握できる。

「イマド、ホントに平気？」

「どうにかなるだろ」

心配したナティエスが訊いたけど、当のイマドの答えもあっさりしていた。

「つたく、あんたら2人ときた日にや……。

ま、いいか。そしたらともかく頼むよ」

シーモアたちが下がる。

「足枷がなくなっただってか？」

「そんな言い方したら、悪いわよ……」

確かにシーモアたちにそばにいられると、巻き込みそうで力が出し切れないけれど、それはみんなのせいじゃない。

「それより、人形狙ってね？」

「こうか？」

いきなり1機の旧型が、小さな爆発を起こしてひっくり返った。ついでに吹き飛んだ腕が、向こうのほうで兵士の頭に命中する。

「な、なにしたの……？」

「魔力暴走させたただだって」

どうってことない。そんな調子でイマドが説明した。

「心のないものに魔力むりやり宿らせると、案外簡単に暴走すんだよ。だから外からちよつと後押しすると、すぐあんなうちまうんだ」
「そ、そう……」

返す言葉が無かった。

なにしろ理屈では知っていたけど、実際に見たのはあたしも初めてだ。

実家で開発してる兵器、急いで全部に魔力干涉防ぐ機能つけなきゃ。

イマドみたいな能力の持ち主が何人も出たりしたら、完全に戦略が崩れてしまう。

「さ、行こうぜ」

「うん」

2人で最前線へ飛び込んで、目に付いた人形を順番に叩いていく。

振り下ろされる腕をかくぐって懷で魔法を放つと、中の思考石が暴走して、次々と動きが止まった。

もっと効率がいいのはイマドだ。間合いに入り込んだ人形を、あつという間に暴走させて片付けている。

しかも慣れてきたみたいで、視線さえ向けずに倒してた。

シーモアたちも上手く弾幕を張ってくれていて、部隊は完全に足止めされた格好だ。

Episode : 121

「なんだ、何がどうなっている!」

「それがよく……」

混乱する治安維持部隊のやり取りが耳に入る。

「ははっ、慌ててやがる。正規軍のくせにしょうがねえな」

「普通……びつくりするわよ……」

大規模な軍隊と遭遇したならともかく、相手はこれ以上ないくらいの小人数だ。

「けどよ、シエラの先輩たちなんてたいてい、この程度の人数で任務行くぜ?」

「治安維持部隊は、傭兵隊と戦ったり、しないもの」

言いながらもう1体潰した。

隣でイマドが、真後ろから切りかかってきた兵士を躲して、振り向きざまに魔法を放つ。

「まったく、後ろから来るなんざ卑怯なやつだよな」

「……」

そう言うイマド自身もよく同じ事をしてるから、どう答えていいか分からない。

「にしても次から次へとよく 今度はなんだ?」

「最新型。無機物じゃなくて生体人形、要するに合成獣で……」

「説明、サンキュ。で、どうすりゃいい?」

イマドが途中を省略した。

「弱点はね…… ウィペラ・ツァンナっ!」

毒の呪文に、トカゲの親玉のような合成獣が、苦しげな咆哮をあげた。

「へえ、毒に弱いのか」

今も毒の苦しさに暴れて、周囲の兵士を巻き添えにしてて、慌ててロデステイオの兵たちが銃口を向けてる。

ごめんね。

本当だったら一撃で倒せばいいけど、今はさすがにその余裕がない。

「つと、いい大人がムキになるなって」

まだ新人なのか、構え方もおぼつかない兵士の剣を、イマドが跳ね飛ばす。

「いったいなんだ、あれは！」

「その、子供と思われませんが……」

「なにバカなことを言っている、あれが普通の子供のわけがなからう！」

ここの指揮を執っているらしい上級仕官が叫んだ。

「ですが、あれはどう見ても……」

「見かけは子供でも、あれは化け物だ！」

それを耳にしたイマドが、憤然とする。

「てめえらが弱すぎるだけだろ」

もつともそんな呟き、向こうは聞いてない。

「例のものをこっちに回せ！ 叩き潰してやる！」

「ですが、あれはまだ……」

「かまわん！ いざという時にはテストも兼ねて使ってみると、マルダーグ大佐の仰せだ」

仕官の言葉に、あたしとイマドは顔を見合わせた。

「今、『マルダーグ大佐』って言った……よね？」

「ああ。」

「ってことは、あいつを捕まえれば芋づるで、その大佐もとっ捕まえられるんじゃないか？」

「そんな話をしながら、2人でもう一段前へ出る。」

「けど。」

「唐突に兵士が左右に分かれた。」

「なんだあれ、デカいな」

「イマドの言う通りかなり大きな人形が、こっちへ向かってくる。」

Episode : 122

「なんだあれ、デカいな」

イマドの言う通りかなり大きな人形が、こっちへ向かってくる。

「型、わかるか？」

「ううん、初めて見るわ……」

黒が基調で、力二のような姿をしている。外骨格はどうやら、鋼鉄らしい。

「思っただけどよ、人形ってワリに人間型じゃねえの、多くねえか？」

「最近の、みんなそうかも……」

場違いな言葉に、一瞬戦闘を忘れかけた。

けどたしかに戦闘力が高いものほど、人間からはかけ離れた形になってる。

「しゃあねえな。とりあえず合成獣じゃなくて機械みてえだから、その路線か？」

「たぶん、そうだと え？」

鋼鉄の力二が、不意にその爪のついた腕を振り回した。近くにいた兵士がともに食らって、吹き飛ばされる。

次いでその人形は、手近な建物や車両に突進し始めた。

「……暴走、してねえか？」

「してる……と思う……」

呆れてものが言えないというのは、まさにこのことだろう。

「なぜだ、なぜちゃんと動かん！」

「その、なにせプロトタイプですので……」

指揮官や上級士官もうるたえてる。

「誰かこいつを　　うわぁっ！」

カニがまた兵士めがけて爪を振り上げたのを見て、あたしはとっさに呪文を唱えた。

「フルグラトル・ラースっ！！」

対魔法防御が施してあったらどうしようかと思ったけど、幸いそれはなかった。

中規模の雷魔法で、間一髪のところまで動きが止まる。

「効いたみたいだな」

「うん」

そのとき鋼鉄のカニの目が、あたしたちを見た。

「なに……？」

「ちょっと待て、あのクズ鉄、俺らターゲットにしたんじゃない？」

カニの目が赤っぽくなったのに、あたしも同じ感想を抱いた。

ぎしぎしという音を立てながら、カニがツメを振り上げて一歩こつちへ出る。

「くるぞっ！」

「でも、どうしよう？　ここじゃ……」

こんな大きい相手と戦おうと思ったら、広い場所でないと周囲の建物まで巻き込んでしまう。

けど周囲の建物の中には、人がたくさんいる。

「ちっ、まいったな……そだ、駅前の広場、ここからすぐじゃねえか？」

「あ、うん。じゃあ場所移動して……」

イマドと一瞬視線が合った。

あたしの考えてることが伝わってる、そう確信する。

何の合図もなしに、あたしたちは同時に駆け出した。

左右に分かれながら、タイミングを合わせて低位の雷系呪文を放って、一瞬だけこいつを食い止める。

「つたく、こんなところでランニングするとは、思わなかったぜ」

カニの向こう側をすりぬけながら、イマドがぼやいてるのが、なぜか聞こえた。

「喋ると、息が続かなくなるじゃない？」

すり抜けて合流してから、思わずそう返す。

後ろではまた兵士を巻き込みながら、鋼鉄のカニがこちらへと向きを変えたようだった。

「このくらいでネあげてたら、学院の訓練で死ぬぜ？」

「それはそうだけど」

ちらつと見ると、追いかけてきているのは例のカニだけだった。

ロステイオ兵は巻きこまれるのが怖くて、追って来れないらしい。ただ、追いかけてくるスピードはけっこう速い。

Episode : 123

「けどまあ、近くてよかったな」

「うん」

イマドの言うとおり、あたしたちがいた場所から駅前広場までは、ほんのちよつとの距離だった。

ただ歩道を駆け抜けているあたしたちはいいけれど、カニは車道を強引に走って？いるから、完全に交通妨害を起こしている。

「にしても、ロデステイオ軍ってのは何考えてんだろな？」

「あたしに訊かれても……」

もしかすると、何も考えていないのかもしれないし。

ともかく駅前の広場にたどりついて、あたしたちは足を止めた。人形が追いついてくる。

「上級魔法、行くから」

「わかった」

なにしろあの大きさだ。ちよつとやそつとの魔法じゃ、びくともしないだろう。

急いで呪文の詠唱　さすがに上級魔法となると、ちゃんと詠唱しないと発動させられない　を始める。

「遥かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ　ケ
ラウノス・レイジッ！」

上級雷系呪文が発動する。

雷撃が天から駆け下って地を貫き、金属のこすれる音をたてながら鋼鉄のカニがくずおれた。

「やった……か？」

「わかんない……」

普通だったら絶対にスクラップになっているはずだけど、なぜか自信がなかった。

あの赤い目が、まだこっちを見ている気がする。

「でもよ、これでおしゃかにならなかったら　げ、マジ？」

近づこうとしていたイマドが、うわずった声を出す。

「そんな……！」

あたしも信じられなかった。

なにしろこの人形はあれほどのダメージを受けたのに、何事もなかったかのように立ち上がったのだ。

「どうなっただよ！」

「そんなこと言われても……あ、もしかして……自己修復機能……？」

ロステイオ軍はそういうものを人形に搭載させようとしてると、以前聞いたことがある。

「自己修復機能だあ？」

「んじゃどうやって倒せっただよ？」

「機能以上の負荷与えれば、たぶん……」

ただこれだけの機能をもっているとなると、内部の肝心な場所が魔力や電撃に対して、絶縁構造になっているかもしれない。

もしそうならお手上げた。

「機能以上っておい、上級魔法以上のダメージ与えろってか？　冗談キツいな　っと」

イマドがばやきながら、カニの爪を飛び退って躲した。

標的をしとめ損ねた目が、周囲を探る。

瞬間、嫌なものを感じた。

「イマド、伏せてっ！」

警告しながらあたしは呪文を唱えた。

鋼鉄のカニに装備されている、砲門に光がとる。

「ルス・バレーっ！」

ぎりぎりのところで呪文が間に合って、あたしとイマドは光の矢に薙ぎ払われずに済んだ。

焼け付くような熱さは感じたけど、それ以上はない。

「あんなもんまで装備してやがんのか。これじゃうかつに近寄れねえな」

イマドの言葉にあたしも考え込んだ。

あれだけの雷撃を受けてまだ平気となると、もう手段が限られてくる。

「精霊 使っわ」

「まあ、しょうがねえな」

精霊は町中では使わないのが基本だ。

なにしろ効果範囲が大きすぎるし、それ以上に使った地点のエネルギー傾斜を、一時的とはいえ狂わせてしまう。

でもこの状況じゃそんなことは言ってられなかった。

それに幸いここは広いから、周囲もさほど巻き込まないで済むはずだ。

Episode : 124

「魔法防御、働かせられる？ 母さんの精霊なら、それできたと思う」

「ああ」

答えを聞いて安心する。これなら万が一にも、イマドがダメージを受けることはない。

内に宿る力を解放しようと、呪を唱えはじめる。

「鳴り響く時の内に棲む者よ、その稲妻持ちて我が敵を打ち砕け」

その間にイマドが低位魔法を放って、人形の足を止めてくれた。

「来いっ、アエグルンっ！！」

靄のようなものがわだかまって、異形としか言いようのないものが、実体化した。

角から、翼から、身体から、鮮やかな電撃がほとばしり、それが呼び水となって天空からभीいかずちが降り注ぐ。

閃光。

轟音。

そして空気の焦げる匂い。

手応えはあった。

これで倒れてくれれば……。

でもその思いも虚しく、人形が再び自己修復を始める。

「精霊はもう、ダメだよな？」

「うん」

こんな町中で何度も精霊を召喚したら、それこそ周囲の都市機能に影響を与えてしまう。

「ねえイマド、さっきの魔力の暴走って、させられないの？」
「できねえ」

望みを託した言葉を、イマドはあっさりと否定した。

「なんか知らねえけど、魔力干渉防ぐ構造になってるみたいでさ。
ってえか、できりゃやってるって」

「あ、そうか……」
けどこれ以上のダメージを与えると、もう母さんでも呼んで同時攻撃するしかない。

その時、ちよつと考えるようにしていたイマドが突然言った。

「おい、俺に防御魔法かけろ」

「えっ？」

「いいから!」

戸惑いながらも呪文を唱える。

あるいはイマド、何かいい方法を思いついたんだろうか？

「エターナル・ブレス!」

そうしてる間に、また鋼鉄のカニが立ち上がる。

「たかが鉄クズのくせに、てめえ生意気なんだよっ!」

ロングソードを手にイマドが突っ込んだ。

巧みに爪をかくぐり、あっというまに肉薄する。

「黙って壊れてろってんだ!」

彼が人形のいちばん弱いところ、目に剣をつきたてた。

剣が奥深くまでもぐりこみ、もういちどカニ動きが止まる。

「ルーフェイア、狙えっ！」

瞬間イマドの考えてる事をあたしは悟った。
迷わず呪文を唱える。

「遥かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ」

上級呪文を、全力でもう一度。狙いはイマドの剣。

「ケラウノス・レイジっ！！」

刃を伝って、電撃が内部へと流れこむ。

同時にイマドが、あたしの魔法と人形の魔力とを暴走させた。

「砕けろっつっ！！」

もとからの上級魔法の威力に、人形が持っていた魔力が加わる格好になって、通常を遥かに上回る雷撃が生み出される。

太陽が落ちたみたいに、一瞬あたりが真っ白になって……。

ばちばちという音を立てながら、この殺人兵器が爪を振り上げかけて 不意に止まった。

周囲が静まり返る。

駅から聞こえてくるアナウンスが、奇妙なくらい広場に響いた。

「今度こそやったか……？」

彼がそう言い終えないうちに、振り上げられていた爪が根元から外れて落ちる。

「今度は大丈夫みたい」

あたしもようやく緊張を解いた。人形1機にこんなにてこずったのは、生まれて初めてだ。

こんなのが実践配備されたら……。

ただとりあえず、今はもう心配ないだろう。

Episode : 125

「お嬢ちゃんたち大丈夫か？」

さすがに一息ついているところへ、クリアゾンの人たちが乗り込んできた。

「街の連中から、なんかとんでもないことになってるって聞いて、なるべく急いで来たんだが」

「あ、はい、どうにか倒しましたから……」

「倒したあ？」

イマドが黙って、人形を指差す。

動かなくなっている鋼鉄のカニに、ボスを始めみんなが困惑した顔になった。

「こんなもの、普通は子供2人で倒したりしないぞ……」

「そうなんですか？」

確かにこれほど大型のものは初めてだけど、普通の人形ならあたしは学院へ来る前から、一人で片づけていた。

「だから言ったでしょ、この子達は並みじゃないって」

声と共に母さんが姿を見せた。どうやら向こうの戦闘も終了したらしい。

母さんの後ろには父さんやシーモア、ナティエスたちがいた。

「みんな、大丈夫？」

「ああ、まるつきりなんでもないよ」

さすがというべきか、シーモアもナティエスも平然とした顔だ。

「これじゃ祭りの方が、たぶんハードだったろうね」

「ウソウソ、あの大佐が来て戦闘停止させてくんなきゃ、けつこうヤバかったんじゃない？」

「ナティ、あんたどうしてそこでそう言うんだい」

シーモアが慄然としたけれど、あたしはナティエスが言った言葉の方が気にかかった。

「大佐って？」

「んと、あのほら、話の出たたコーニッシュ大佐」

「え？　じゃあ大佐が直に来て……戦闘を終了、させたの？」

「うん」

信じられない話だ。

「あたしが連絡しといたから、裏取ってすぐに動いてくれたみたいね、リオネルは」

母さんが自慢げに胸を逸らす。

「どお、見なおしたでしょ」

「母さん、娘に威張ってどうするの……」

このやりとりで周囲から笑い声が起こって、恥ずかしくてしょうがない。

「事実だからいいの。」

であと情報じゃ、リオネルが憲兵をマルダーグ大佐のお宅に向かわせてるらしいわ。だからじき、一連の騒ぎも収まるでしょ」

「そっか……」

でもなんだかあたしは、寂しい風が吹き抜ける気分だった。

確かにこれで「ファミリー」を名乗る犯罪組織が捕まって、騒ぎは収まるだろう。

だけど殺された子供たちは帰ってこないし、この戦闘で出たはずの死者も生き返るわけじゃない。

それに何より、このスラムの人たちの生活が変わるわけじゃないから……。

「あんだ、いい子よね」

うつむくあたしの頭を、母さんが撫でた。

「ホントどこでどう間違えたんだか、うちの人間にしちゃ優しすぎだわ。」

けどそれにしても、どうやってこの蜘蛛倒したのよ？」

「く、蜘蛛……！！」

母さんの言葉に、壊れた人形を振り返る。
4本の足に2本のツメ。

言われてみれば確かに、蜘蛛にも見えた。

戦ってる時は、カニに見えたんだけど。

鳥肌がたってくる。

「おい、ルーフェイア、お前顔色悪いぞ？　どうかしたのか？」

「あたし、あたし、蜘蛛……」

これだけは大っ嫌いだ。ゴキブリの方が何十倍かい。

「いやあつ！　誰か片付けてえつつ……！」

周囲が呆れかえる中、あたしはそのままそこへ座り込んでしまった。

Episode : 126 結末

I m a d

「それにしても、お前がクモ嫌いだとはな〜」

こいつ、何見たって平気な顔してつから、まさかこんなモンが苦手だとは思ひもなかった。

「もう、お願いだから言わないで……」

「あ、悪い悪い」

よっぽどヤなんだろっ、単語すら聞くのを嫌がる。

「けど、なんでンなに嫌いになっただ？」

俺の知るかぎりじゃ、女子ってのはたいてい、ゴキブリの方が嫌いだ。

「この子ね、むかし熱帯地の戦線に出た時に、毒蜘蛛にやられてヒドイ目に遭ったのよ」

「あ、それで……」

こいつのお袋さんの言葉で納得した。ようするにトラウマってやつだろう。

あの騒動からもう6日、俺らはベルデナードの、駅前広場とやらにいた。

別にさっさと帰っちまってもよかったんだけど、「祭りでも見てけ」っつーシーモアたちの言葉に、ルーフェアのお袋がみごとに便乗。結局この街に、俺らもいっしょに居座っちまった。

もちろん祭りってのは抗争じゃない。どういうわけか国をあげて行われる、大統領の就任記念日祝いだ。

でも「見てけ」ってだけあって、街中露店が出てたり大道芸やったり模擬試合があったり、けっこう飽きなかった。

メインの大統領演説は、めちゃくちゃつまんなかったけど。

ついでに言うと今、ロデステイオの政界と軍部は大騒動ってやつだ。

こないだのスラム侵攻で墓穴掘っちゃったマルダーグ大佐とやらは、結局憲兵に自宅で麻薬組織のボスと一緒にいるところを、とっ捕まっちゃった。

バカなことにスラムに軍出して安心しちゃって、隠れんのも忘れて、高みの見物決めこんでたらしい。

そのうえそこから芋づる式に、政界やら軍部やらの麻薬スキャンダルがバレて、もうどっち向いてもガタガタ。大統領演説の内容の大半が、こっち関係の話に切換えられたほどだ。

ちなみにこの辺をバラしたのはゼロールさんで、今まで地道にウラ取ってた情報をここぞと流したんだとか。

それ以外にもこの人は、あのバカ取材人がいた放送局のカメラマンと一緒に、今回のスラム侵攻の一部始終を動影に収めてる。

どっか頼りなさそうだったけど、ジャーナリストとしてはけっこう一流だったってことだろう。

「けどお前ら、マジで帰んねえのか？」

シーモアたちに尋ねる。

昨日でおおむね祭りも終わって、俺とルーフェイアたちは町をあとにするところだった。

今ここにいるメンツは俺にルーフェイア、こいつの両親、あとナイエスにシーモアだ。

「もうここまで来たら一緒だからね。久々にみんなと新年の騒ぎや

つてから、学院帰るさ」

「あ、なるほどな」

確かにこいつら3年くらい帰ってなかったらしいから、そゆ気にもなるだろう。

だいいち年が明けるまで、もういくらもない。

「授業始まるまでに、帰って……くるよね？」

心配そうにルーフェイアが訊いた。一緒に帰るつもりでここまで追いかけたワケだから、気が気じゃねえんだろう。

「もう、ルーフェイアったら心配性なんだから。

大丈夫、ちゃんと帰るってば」

ナティエスのやつに請け合ってもらって、やっとこいつが安心して顔になった。

Episode : 127

「もうウルサイのも来なくなっただし、心配ないもん」

「おかげでやっと、寝れるってもんさ」

この2人が笑う。

実言うと例の騒ぎの後は、もっと大騒動だった。

なにしろそれまで知らん顔してた報道のヤツが押し付けてきて、やれ話訊かせるだのなんだの、拳句にシーモアたちを『引き取りたい』なんていうバカまで出る始末だ。

ガルシイさんとダグさんたち、全部水ぶっかけて追い返しちまっただけ。

中でもシーモアのやつが、そのバカな連中に言った台詞は名言だ。「あんたら今まで知らん顔してたくせに、ちよっと放送見たくらいでなにさ。

ンなこと言っただったら、このスラムの連中全員に、メシと金でも世話しなよ！」

この毒台詞に度肝抜かれた偽善者連中の顔は、あのゼロールさんがしつかりフィルムに収めてる。

けど誰がどう言おうと、シーモアのこととは正しい。どうせこの騒ぎが終われば、みんなばっちり忘れてスラムは置き去りだろう。

「結局は、あたしら自身でやるしかないからね」

このシーモアの言葉が、全てを物語ってるってやつだ。

もっとも凄いつて点では、今回はナティエスのヤツのほうが上だ

ったかもしれない。

こいつがスラムの生まれじゃないのは言動見ても分かったけど、今回放送されたのでも見たんだろう、けっこいい身なりの「親戚」って名乗る連中が彼女を引き取りに来た。

それも、報道陣引き連れて。

動映映って有名になったナティを、引き取るところでも報道させて自分の利になるようにしたかったらしい。

とはいえナティエス、その大人しげな外見からは、想像つかねえ毒持ってるやつだ。

あの時は悪かった、昔のことと家出したのももう言わないから戻って来いっていうその「親戚」連中に対して、あいついきなり言うのけやがった。

「お父さんとお母さんの遺産、返しなさいよね！」

当然放映中。

親戚連中のうろたえぶりときたら、笑うつきやなかった。

しかもナティエス、その「親戚」が引き取った自分にした仕打ちを、片っ端から言いたてたんだからたいしたもんだ。

もう親戚連中はほうほうの体で逃げ帰って、ついでに放送見てたスラムの連中から生ゴミ投げつけられてた。どっちにしろあの親戚連中は、これからめいっぱい後ろ指ささるハメになるのは間違いない。

武器も使わなきゃ血も見ちゃいけないけど、ナティエスのやつの復讐はある意味完璧だ。

気が付いちゃいないだろうけどな。

言いたいこと言ってすつきりしたんだろう、当人はもう、ンな話忘れちまつてるらしい。

「けどさ、ひと騒動だったけど、落ちついてよかったよね。もう向こうのチームとのナワバリ騒ぎも、ないと思うし」

「よかった……」

俺が思うに、今回のいちばんの収穫はこれだろう。

今回休戦した上で協同作戦やったりのが良かったのか、この2つのチームは、次にリーダー変わる時にまとまることで話がついた。まあ聞いたところじゃもともとひとつだったつーし、元リーダーだったルーフェイアの親父さんやレニーサさん、クリアゾンのボスあたりからも話がいったらしい。

「そうそう、ガルシイがさ、ベルデナード来た時は寄れって言ってた」

「へえ。」

けどよ、また玄関の外で待たされたりしてな」

「もう、イマドのいじわる！ そんなことするわけないでしょ」

反論してから、シーモアとナティエスのやつは笑った。

Episode : 128

「借り作っちゃったね」

「ま、そのうち返してもらうぜ」

「そんなことより、今度みんなで遊びにいきましょう。あたしが全部面倒見てあげるから」

「母さん！」

「んなこと言いながら、俺らがワイワイやってた時だ。」

「兄ちゃん、姉ちゃん！」

「あ、ウイン」

あのチビが半分息切らせながら、駅の自走階段を駆け上がってきた。

「もう、行っちゃうって聞いてさ。オイラ急いで来たんだ」

「ごめんね、疲れたでしょう？」

ルーフェイアのやつがそう言うと、ウインがぶんぶん首振った。どうもこのガキ、こいつの外見に参ってるらしい。

ま、分かるけどな。

戦闘さえなけりゃこいつ、どこからどう見ても儂げなお嬢様だ。

「けど、ホントにもういつちまうの？」

このチビの言葉に、たちまちルーフェイアの顔が曇った。

「その……ごめんね……」

「あああつ！ 姉ちゃん、泣かないでっ」

思いつきりいつものひと騒動になる。

けどタシユア先輩がいるわけでもねえのに、なんでこうなるんだか……。

「姉ちゃん姉ちゃん、ほら、これあげるからさ」

「え……？」

ウインのヤツが箱を差し出して、びっくりしたルーフェイアが顔を上げる。

「お土産だよ」

「あ、ありがとう……」

それからそっと、ルーフェイアが箱を開けた。

へえ、気が利いてんな。

中から出てきたのは、ガラス細工の仔竜だ。

「かわいい……」

ルーフェイアも無邪気な笑顔になる。

「あら、今泣いたなんとかが、ってやつかしらね？」

「おばさん、ンなこと言うとまた泣きますよ」

ただ幸い今は聞こえなかったらしくて、ルーフェイアのやつはガラスの仔竜に夢中だ。

「ねえウイン、あたしたちには？」

「ナティねえ、オイラに土産せがんでどうすんだよ」

ズレたやり取りに、聞いてたルーフェイアもシーモアも笑い出す。

「だいたいナティ、あたしらチームへお土産持ってってないんだ。もらおうったってムリだよ。」

それよりウイン

前半から一転、シーモアの表情が厳しくなる。

「その仔竜の金、まさか」

「ンなことないよ！　これ、リーダーたちからなんだ。
だいいちオイラ、さっき失敗しちまってさ。だからお土産これだ
け」

俺も勘ぐってたけど、どうやら掏ってきた金で買った、ってんじ
やなさそうだ。

ルーフェイアのヤツあれで案外、チームの連中にも人気があつた
らしいから、その辺から金が出たんだろう。

まあ、出所がまともとは、かぎらねえけどな。
けど今そこまで言う気は、俺にもない。

Episode : 129

「でもウインが失敗するなんて、よっぽどよね？」

「オイラもびつくりしちゃったよ。カップルで歩いててさ、きっと懐なんからお留守だと思ったのに、いきなり腕掴まれちゃって」

「そりゃ、かなりのモンだね」

聞いた話じゃこのガキンちょ、チームじゃナティに次いで掏りの腕はいいらしい。

なのにそれを察して腕を掴んだってことは、その相手ってのは相
当だ。

「ヤローのほう狙うんじゃないかな。大失敗だよ」

「ま、これ教訓にして、今度から気をつけるのね。でも、よくそれで逃げられたね？」

掏りとしちゃ一級品のナティエスが、不思議そうに尋ねる。

「いや、それがさ、黙って手放して見逃してくれたんだ」

「ンな奇特的なヤツが、今時いるのか……」

未遂だったせいもあるんだろうけど、かなり珍しい話だ。

「でもホントそのヤロー、見かけと中身がぜんぜん違うんだ。

髪なんか銀色で前髪だけちょこつと紅くしちゃってさ、拳句に女みたいに伸ばして三つ編みしてんだぜ？

絶対、やれると思ったんだけどな」

「そ、それ、もしかして……」

ウインの説明に、俺も含めて絶句する。

「あ、あのね……その銀髪の人、眼鏡かけてなかった？

それとカップルって……連れの女の人、黒い髪に紫の瞳で長身じや……」

「あれっ、姉ちゃんなんで知ってんのさ？」

ルーフェイアの説明聞いて、目を丸くしたウインの頭を、シーモアがはたいた。

「あんた、その人狙ってそれで済んだんなら、はっきり言ってメチャメチャ幸運ってやつだよ」

「ほんとほんと、絶対成功しない相手よ、それ」

ナティエスのやつも一緒になって、このガキに向かって突っ込む。

タシユア先輩とシルファ先輩がどっかへ行ってるってのは、ルーフェイアから訊いてたけど、どうやら行き先はここだったらしい。

世の中広いようで狭いっつーか……。

「にしてもよ、よく五体満足で見逃してもらったよな」

「タシユア先輩、そんなことしないわ」

俺のつぶやきに、ルーフェイアのヤツが抗議する。

「先輩、優しいもの」

「はいはい、分かってるって」

毎度泣かされてるクセに必ずこう言うんだから、マジでたいしたもんだ。

「だとすると、この記事の犯人は彼かしらね？」

言いながらルーフェイアのお袋さんが、さつきから斜め読みして
た新聞　ウソみてえだけど経済新聞だ　をひらひらさせた。

「なんの記事です？」

「あ、あなたたちじゃ見ても、わかんないと思うわよ」

確かに俺もざっと見てみたけど、魔力石の相場が上がったとか国
境地帯で金属の採掘権がどうなったとか、んな記事ばっかだ。

「教えてくれたっていいじゃないですか」

「別に知らなかったって、困りやしないわよ。

あら」

俺の言葉を軽く躲したお袋さんが、遠い下の広場を見ながら面白
がるような声を出す。

「　　げ、オイラ帰るっ　　」

ウインのやつも気が付いて、慌てて踵を返した。

「ちよっとウイン、どうしたの！」

ああもう、シーモア、どうしよう？」

さすがにうるたえながらナティエスのやつが訊くと、シーモアも
呆れ半分苦笑半分で答えた。

「ウインのヤツ、タシユア先輩でも見たんじゃないのかい？」

けどこれ以上いてもしょうがないし、ルーフェイア、あたしらも
そろそろ引き上げるよ」

「え、あ、うん……」

突然言われて、こいつが戸惑いながらもうなずく。

「ほら、そんな顔しなさんなって。どうせ年が明けりやすぐ、学院で顔つきあわせるんじゃないか」

これで納得したんだろう。ルーフェイアのやつが淡い笑顔になった。

「そしたらシーモアもナティエスも、気をつけてね？ 風邪なんかひかないでね？」

「大丈夫だって」

「もう、ルーフェイアったらほんと心配性なんだから。じゃあね」それから2人も、手を振りながら下りの自走階段のほうへ向かった。

徐々に姿が沈んで消える。

「行っちゃったね……」

「ま、どうせまたすぐ会うんだしな」

「うん」

ちよつと笑顔になって、こいつがこっくりとうなずいた。

これが可愛いんだよな。

確かに年より幼いだろうけど、ヒヨコよろしくくつついてくるこいつは、俺は嫌じゃなかった。

「で、お前はこれからどうすんだ？」

「えっと……？」

自分じゃ考えてなかったらしくて、ルーフェイアが困った顔して両親のほうを振り向く。

「どこか予定があるのか？」

「あら、ディアスカルーフェイアが考えてると思ったわ」

おい。

親子3人でいたにも関わらず、誰も何も考えてなかったらしい。
この頼りない両親に、ルーフェイアのやつがため息をついた。

「んじゃみんなで、アヴァン来ません？」

「え？」

ちよつと首をかしげて、不思議そうにこいつが俺を見返す。

Episode : 131

「いや、俺このまま、伯父さんちいくからさ」

「あ……」

一瞬呆然としたあと、こいつが華やかな笑顔になった。

俺とルーフィアが初めて会ったのは、あの街だ。

それに実のところ、孫娘の命の恩人になるこいつを連れて来るように、伯父さんから何度も俺は言われてる。

「あんときゃ時間ないわみょーな騒ぎになるわで、たいして見てか
なかつたろ？」

来るなら、ちゃんと案内するぜ」

「あら、それいいわね」

けどいちばん喜んだのは、こいつのお袋だった。

「あの時はあたし、ぜんぜん見るヒマなかったのよね。一度ゆつ
くり見たかったのに」

確かにこの人、戦闘に参加したあとちょこつと来ただけで、多分
どこも見てねえだろうけど。

「か、母さんも来るの？」

「あら、何か悪いの？」

「だって……」

強引なお袋さんと妙な勘違いしてるルーフィアとが、かなり笑
えた。

「まさかあなた、あたしたちがこのボウヤのとこへ、上がりこむと
思ってたない？」

「え、違うの？」

もつともこの人が相手じゃ、勘違いするのも当然って気がする。
しかも親父さんときたら止めるどころか、面白がって見てるんだから始末に追えない。

「いくら小さい街だって、ホテルくらいあるでしょ。とりあえずそこへ泊まって、彼に案内だけしてもらえばいいじゃない」

「俺にケンカ売ってます？」

齒に衣着せないってのも、考えモンだ。

「あら、ごめんなさいね。

でもこれで行き先決まったわね」

言うが早いがいいつのお袋、さっさと切符を買いに窓口のほうへ向かった。

「母さん、どこの駅で降りるか知ってるの?！」

「アヴァン駅でしょ」

「ぜんぜん違いますって」

答えを聞いて、俺も心配になる。いくらアヴァン領内だからって、首都まで行っちゃうとかあり得ない。

けど俺らの突っ込みなんざこのおばさん、そよ風のごとしだ。

「あらそうだった？」

まあいいわ、駅員にでも訊くから」

「……………」

これにはさすがに心配になったらしくて、無言で親父さんが後を追いかける。

「ホント、すげえ両親だよな」

「だからお願い、それ言わないで……」

「悪い悪い。」

それよりよ、俺らも行こうぜ。お前の両親に任しとくと、なんか心配だしな」

「……うん」

小さくこいつがうなずいた。どうも親2人に振り回されて、気落ちしてるらしい。

「ルーフエイア」

「なに……？」

華奢なこいつが顔を上げた。

笑顔がないとその表情はどこか儚くて、消えちまいそうだから……。

「上手くいつて、良かったよな」

「うん！」

極上の微笑みが、ルーフエイアの顔にのぼった。

F i n

あとがき

長い長い話を最後まで読んでくださって、本当にありがとうございました。この話、じつは厚めの文庫本1冊分、あつたりします（汗）第9作はこれで完結となり、明日から第10作目の連載に入ります。今までと同じく、“夜8時過ぎ”の更新です

感想・評価大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3086f/>

言葉ではなく ルーフェイア・シリーズ09

2011年2月7日11時16分発行